

国 営 総 合 農 地 開 発 事 業  
母畠地区遺跡発掘調査報告11

唐松 A 遺跡(含・唐松館跡)  
地蔵田 A 遺跡  
地蔵田 B 遺跡(含・カナイ館跡)

1 9 8 3 年 3 月

福 島 県 教 育 委 員 会



国 営 総 合 農 地 開 発 事 業

母畠地区遺跡発掘調査報告11

唐松 A 遺跡(含・唐松館跡)

地蔵田 A 遺跡

地蔵田 B 遺跡(含・カナイ館跡)



## 序 文

国営総合農地開発事業母畠地区は、福島県中通り地方を貫流する阿武隈川上流右岸の郡山市・須賀川市・石川町・玉川村・東村及び中島村の6市町村にわたり、南北約30km、面積約4,379haの広大な地域を対象とした農業近代化のための総合農地開発事業です。

阿武隈川の流れは、古来その流域に豊かな耕土を堆積し、政治・経済・文化の中核となる地域を形成して現在に至り、県民生活の大動脈としての役割を果してきました。この流域には古代以来、古墳・官衙跡・寺院跡さらには、それらを支えた集落跡・生産跡など貴重な遺跡が数多く残っています。当母畠地区もその一部であり、表面調査の結果628の遺跡が確認されました。

これら遺跡と開発との調和を図るため、昭和57年度の工事施工に際し、東北農政局母畠開拓建設事業所と事前に協議を行い、記録保存のため8遺跡の発掘調査を実施しました。本報告書は、福島県教育委員会が財團法人福島県文化センターに調査を委託して実施したものうち、郡山市の唐松A遺跡(唐松館跡)・地蔵田A遺跡・地蔵田B遺跡(カナイ館跡)の3遺跡について『母畠地区遺跡発掘調査報告11』としてまとめたものです。本書が埋蔵文化財の保存・活用のみならず、学術研究にも役立つことを念願いたします。

調査に御協力いただいた郡山市教育委員会・東北農政局母畠開拓建設事業所・開発関係機関各位及び地元の方々、調査を行った財團法人福島県文化センター関係職員の御努力に深く感謝の意を表しますとともに、今後とも埋蔵文化財の保護について一層の御理解と御協力をお願ひいたします。

昭和58年3月

福島県教育委員会

教育長 邊見 荘之助



例 言

9. 報告書に使用した市町村名、遺跡名、遺構名の略号と、遺物番号の表記法は次の通りである。
- (1) 市町村略号 郡山市……C Y
- (2) 遺跡略号 唐松A遺跡(含・唐松館跡)……KM・A(T) 地蔵田A遺跡……GD・A  
地蔵田B遺跡(含・カナイ館跡)……GD・B(T)
- (3) 遺構略号 竪穴住居跡……S I 柱列……S A 掘立柱建物跡……S B 土坑……S K  
溝……S D 土壙……S F 特殊遺構……S X  
ビットは遺構にともなうものを、P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>……とした。
- (4) 遺物番号 遺物は各遺構ごとに土器・石器等の区別なく、遺構名と組み合せ通し番号を付し遺物の登録番号とした。
- 〔例〕 1住1……1号住居跡出土の1番目の遺物  
1坑10……1号土坑出土の10番目の遺物  
なお、遺構名は次のように略記してある。  
竪穴住居跡→住、土坑→坑、焼土遺構→焼、濠跡→濠

10. 引用論文等については、執筆者の敬称を略し、参考文献として第3編本文末尾に3遺跡分一括して掲げた。

11. 唐松A遺跡、地蔵田B遺跡出土の陶磁片については東北歴史資料館の藤沼邦彦氏に、唐松A遺跡出土の炭化木については鶴倉巳三郎氏に御教示いただいた。記して謝意を表するものである。

## 目 次

序 章 .....	1
第1節 調査経過 .....	1
1 昭和56年度までの調査経過(1)      2 昭和57年度の調査経過(2)	
第2節 位置と地形 .....	3
第3節 歴史的環境 .....	7
第1編 唐松A遺跡(含・唐松館跡) .....	9
第1章 調査経過 .....	11
第1節 調査経過 .....	11
第2節 調査方法 .....	13
1 調査方法(13)      2 基本層序(13)	
第2章 遺構と遺物 .....	15
第1節 壁穴住居跡 .....	15
1号住居跡(15)      2号住居跡(18)      3号住居跡(21)	
4号住居跡(23)      5号住居跡(26)	
第2節 掘立柱建物跡 .....	33
1号建物跡(33)      2号建物跡(33)	
第3節 漆と土墨 .....	35
1 漆 .....	36
1号漆(36)      2号漆(38)	
2 土墨 .....	38
第4節 土坑 .....	39
1号土坑(47)      3号土坑(47)      7号土坑(48)	
28号土坑(49)      34号土坑(49)	
第5節 その他の遺構と遺物 .....	51
ビット群 .....	51
焼土遺構 .....	52

遺構外出土の遺物	52	
縄文土器(52)	石　　器(53)	陶　磁　器(54)
第3章　考　　察	55	
第1節　縄文時代の遺構と遺物	55	
1　縄文時代の遺物(55)	2　縄文時代の土坑(56)	
第2節　古墳時代末～平安時代の遺構と遺物	57	
1　遺物について(57)	2　遺構について(60)	
第3節　中世以降の遺構と遺物	61	
 第2編　地蔵田A遺跡	81	
第1章　調査経過	83	
第1節　調査経過	83	
第2節　調査方法	84	
1　調査方法(84)	2　基本層序(84)	
 第2章　遺構と遺物	85	
第1節　竪穴住居跡	85	
1号住居跡(85)	2号住居跡(87)	3号住居跡(89)
4号住居跡(90)	5号住居跡(92)	6号住居跡(93)
第2節　土　　坑	95	
1号土坑(95)	2号土坑(97)	3号土坑(97)
4号土坑(98)	5号土坑(98)	6号土坑(98)
第3節　その他の遺構と遺物	99	
溝状遺構(99)	ピット群(100)	焼土遺構(100)
遺構外出土の縄文土器(100)	遺構外出土の土器(101)	
 第3章　考　　察	102	
第1節　縄文時代の遺構と遺物	102	
遺物について(102)	遺構について(102)	
第2節　平安時代の遺構と遺物	103	
遺物について(103)	遺構について(104)	

第3編 地蔵田B遺跡(含・カナイ館跡) .....	111	
第1章 調査経過 .....	113	
第1節 調査経過 .....	113	
第2節 調査方法 .....	114	
1 調査方法(114)		
2 基本層序(114)		
第2章 遺構と遺物 .....	116	
第1節 壘穴住居跡 .....	116	
1号住居跡(116)		
第2節 土坑 .....	117	
1号土坑(118)	4号土坑(118)	5号土坑(118)
7号土坑(120)	8号土坑(121)	
第3節 漆跡 .....	122	
漆跡 .....	123	
トレンチ検出の漆 .....	125	
第4節 その他の遺構と遺物 .....	126	
1号特殊遺構(126)	柱列・その他のピット群(128)	
遺構外出土の遺物(129)		
第3章 考察 .....	134	
第1節 繩文時代の遺構と遺物 .....	134	
遺物について(134)	遺構について(135)	
第2節 中世以降の遺構と遺物 .....	135	

# 挿図・表・図版目次

## 序 章

### 〔挿図〕

第1図 母畠地区位置図	1	第4図 地蔵田A・B遺跡周辺地形図	6
第2図 遺跡周辺地形区分図	4	第5図 周辺道路分布図	8
第3図 唐松A遺跡周辺地形図	5		

## 第1編 唐松A遺跡

### 〔挿図〕

第1図 唐松A遺跡(唐松館跡)調査区全体図	折込	第20図 2号建物跡	35
第2図 基本層序	14	第21図 1・2号濠セクション(西側)	36
第3図 唐松A遺跡遺構配置図	折込	第22図 1号濠跡出土木製椀	37
第4図 1号住居跡	16	第23図 1・2号濠セクション(東側)	38
第5図 1号住居跡カマド	17	第24図 1～3・5・6号土坑	40
第6図 1号住居跡出土土師器	18	第25図 4・7～14号土坑	41
第7図 2号住居跡	19	第26図 15～20号土坑	42
第8図 2号住居跡出土土師器(1)	19	第27図 21～23号土坑	43
第9図 2号住居跡出土土師器(2)	20	第28図 24～26号土坑	44
第10図 3号住居跡	21	第29図 27～31号土坑	45
第11図 3号住居跡出土土師器	22	第30図 32～38号土坑	46
第12図 4号住居跡	24	第31図 39～41号土坑	47
第13図 4号住居跡出土土師器	25	第32図 1号土坑出土撲条文土器	48
第14図 5号住居跡	26	第33図 遺構内出土繩文土器	48
第15図 5号住居跡カマド	27	第34図 ピット群	51
第16図 5号住居跡出土土師器	28	第35図 遺跡内出土縄文・弥生式土器	53
第17図 5号住居跡出土土師器・須恵器	29	第36図 遺構外出土土師質土器	53
第18図 住居跡出土土鉄製品	30	第37図 遺構外出土石器	54
第19図 1号建物跡	34	第38図 唐松館推定復元図	63

### 〔表〕

第1表 唐松A遺跡住居跡出土土師器 観察表(1)	30	第3表 唐松A遺跡住居跡出土土師器 観察表(3)	32
第2表 唐松A遺跡住居跡出土土師器 観察表(2)	31	第4表 土坑一覧表	50

### 〔図版〕

1 唐松A遺跡遠景(南東より)	65	10 2号住居跡(1)	70
2 唐松A遺跡遠景(北東より)	65	11 2号住居跡(2)	70
3 唐松A遺跡Ⅰ区全景(1)	66	12 3号住居跡	71
4 唐松A遺跡Ⅰ区全景(2)	66	13 3号住居跡カマド付近	71
5 1号住居跡炭化物出土状況	67	14 1号建物跡	72
6 1号住居跡	67	15 2号建物跡	72
7 Ⅰ区土坑	68	16 Ⅱ区土坑、焼土遺構	73
8 唐松A遺跡Ⅱ区全景(1)	69	17 1号濠(西側)	73
9 唐松A遺跡Ⅱ区全景(2)	69	18 唐松A遺跡Ⅲ区全景(西より)	74

19	4号住居跡	74	24	1号住居跡出土土師器	77
20	5号住居跡(1)	75	25	2・3号住居跡出土土師器	78
21	5号住居跡(2)	75	26	3・5号住居跡出土土師器	79
22	Ⅲ区土坑	76	27	道路内出土縄文・弥生式土器	80
23	1号土坑出土撫糸文土器	77			

## 第2編 地蔵田A遺跡

### [ 摘 図 ]

第1図	地蔵田A遺跡遺構配置図	折込	第10図	5号住居跡	93
第2図	1号住居跡	86	第11図	5号住居跡出土縄文土器・石器	93
第3図	1号住居跡出土土師器	86	第12図	6号住居跡	94
第4図	2号住居跡	88	第13図	6号住居跡出土縄文土器	94
第5図	2号住居跡出土土師器	89	第14図	1・3・5・6号土坑	96
第6図	2号住居跡出土鉄製品	89	第15図	4号土坑	97
第7図	3号住居跡	90	第16図	遺構外出土縄文土器	101
第8図	4号住居跡	91	第17図	遺構外出土土師器	101
第9図	4号住居跡出土縄文土器	92			

### [ 図 版 ]

1	1号住居跡	105	7	土坑	108
2	2号住居跡	105	8	1号溝跡	108
3	3号住居跡	106	9	4・5号住居跡出土縄文土器	109
4	4号住居跡	106	10	6号住居跡出土縄文土器	109
5	5号住居跡	107	11	遺構外出土縄文土器	110
6	6号住居跡	107	12	2号住居跡出土鉄製品	110

## 第3編 地蔵田B遺跡

### [ 摘 図 ]

第1図	地蔵田B(カナイ館)遺跡遺構配置図	折込	第10図	濠跡セクション	123
第2図	地蔵田B遺跡(カナイ館)現況図	115	第11図	濠跡出土陶器・土師質土器	124
第3図	1号住居跡	116	第12図	濠跡出土鉄製品	124
第4図	1号住居跡出土縄文土器	117	第13図	1号特殊遺構	127
第5図	1号土坑出土縄文土器	118	第14図	1号特殊遺構出土縄文土器	127
第6図	1・6号土坑	119	第15図	1・2号柱列	128
第7図	7・9号土坑	120	第16図	遺構外出土縄文土器(1)	130
第8図	7号土坑出土縄文土器	121	第17図	遺構外出土縄文土器(2)	131
第9図	カナイ館濠跡全体図	122	第18図	カナイ館推定復元図	136

### [ 表 ]

第1表	地蔵田B遺跡土坑一覧表	121
-----	-------------	-----

### [ 図 版 ]

1	地蔵田B(カナイ館)遺跡遠景(北東より)	139	7	濠跡Aセクション	142
2	地蔵田B(カナイ館)遺跡遠景(東より)	139	8	濠跡Bセクション	142
3	地蔵田B遺跡調査区全景(東より)	140	9	濠跡Eセクション	142
4	地蔵田B遺跡調査区全景(北西より)	140	10	1号住居跡検出状況	143
5	調査区北側斜面部(西より)	141	11	1号住居跡	143
6	調査区北側斜面部(東より)	141	12	土坑	144

13	1号特殊遺構	145	17	遺構外出土縄文土器(3)	147
14	Cトレンチ、南側溝跡	145	18	7号土坑出土縄文土器	147
15	遺構外出土縄文土器(1)	146	19	1号特殊遺構出土縄文土器	147
16	遺構外出土縄文土器(2)	146			
	唐松館跡より出土した炭化材の樹種			鷗倉巳三郎	148

## 序 章

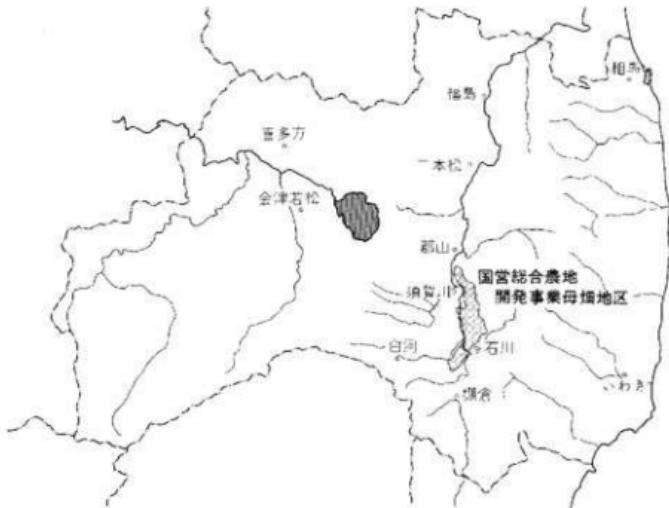
## 第1節 調査経過

## 1. 昭和56年度までの調査経過

昭和43年度から開始された国営総合農地開発事業母畑地区は、阿武隈高地西縁丘陵地帯において4,379haにおよぶ農地開発および圃場整備を行う事業である。この母畑地区は阿武隈川の中流部右岸にあり、南北約30km、東西約5kmほどの狭長な地区で、郡山市・須賀川市・石川町・玉川村・東村および中島村の2市1町3ヶ村におよぶ。

福島県教育委員会では、昭和51年度以降本格的に母畑地区内の埋蔵文化財調査に着手し、昭和56年度まで踏査を行い628遺跡を確認するとともに、遺跡の試掘調査を実施してきた。一方、これらの調査資料をもとに各年度ごと東北農政局母畑開拓建設事業所と埋蔵文化財の保存協議を行ってきたが、保存の困難な遺跡については記録保存のための発掘調査を実施してきた。

昭和52年度以降の具体的な調査は、(財)福島県文化センター(遺跡調査課)に委託して行い、その成果は次の報告書に収録した。



第1図 母畑地区位置図

## 序 章

『母畑地区開拓事業地内遺跡発掘予備調査概報』	福島県文化財調査報告書第23集	1970
『母畑地区遺跡試掘調査概報 I』	福島県文化財調査報告書第61集	1977
『母畑地区遺跡分布調査報告 II』	福島県文化財調査報告書第66集	1978
『母畑地区遺跡分布調査報告 III』	福島県文化財調査報告書第73集	1979
『母畑地区遺跡分布調査報告 IV』	福島県文化財調査報告書第83集	1980
『母畑地区遺跡分布調査報告 V』	福島県文化財調査報告書第94集	1981
『母畑地区遺跡分布調査報告 VI』	福島県文化財調査報告書第103集	1982
『石川町上森屋敷遺跡発掘調査概報』	福島県文化財調査報告書第60集	1977
『母畑地区遺跡発掘調査報告 II』	福島県文化財調査報告書第67集	1978
『母畑地区遺跡発掘調査報告 III』	福島県文化財調査報告書第74集	1979
『母畑地区遺跡発掘調査報告 IV』	福島県文化財調査報告書第84集	1980
『母畑地区遺跡発掘調査報告 V』	福島県文化財調査報告書第85集	1980
『母畑地区遺跡発掘調査報告 VI』	福島県文化財調査報告書第95集	1981
『母畑地区遺跡発掘調査報告 VII』	福島県文化財調査報告書第96集	1981
『母畑地区遺跡発掘調査報告 VIII』	福島県文化財調査報告書第106集	1982
『母畑地区遺跡発掘調査報告 IX』	福島県文化財調査報告書第107集	1982
『母畑地区遺跡発掘調査報告 X』	福島県文化財調査報告書第108集	1982

## 2. 昭和57年度の調査経過

昭和57年度の福島県教育委員会と東北農政局母畑開拓建設事業所との間の埋蔵文化財保存協議の結果、次の遺跡については工法変更等による保存が不可能なため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は財團法人福島県文化センター遺跡調査課に委託された。

工区	遺跡名	所 在 地	遺跡の種類	調査期間
2	唐松 A 遺跡 (含 唐松前路)	郡山市田村町岩作字唐松	土師集落・中世城館	5月31日～8月4日 10月4日～10月22日
2	地蔵田 A 遺跡	タ タ タ 字地蔵田	繩文散布・土師集落	8月2日～8月10日 9月20日～10月14日
2	地蔵田 B 遺跡 (含 カナイ前路)	タ タ タ タ	繩文包含層・中世城館	4月12日～5月28日
7	栗木内塙	須賀川市大栗字栗木内	近世塙	8月23日～9月1日
7	蓬入遺跡	タ 狸森字蓬人	土師散布	10月12日～10月29日
11	上悪戸遺跡	石川町中野字悪戸・堀込	繩文散布・土師集落	4月12日～8月6日
11	下悪戸遺跡	タ タ タ	繩文散布・土師集落	4月12日～7月2日 7月28日～8月27日
11	薬師堂遺跡	タ タ タ	繩文集落	7月12日～10月8日

本報告書には上記 8 遺跡のうち唐松 A 遺跡・地蔵田 A 遺跡・地蔵田 B 遺跡の 3 遺跡を収録した。残余の 5 遺跡については『母畑地区遺跡発掘調査報告』12 および 13 (福島県文化財調査報告書第 116 集および第 117 集) に収録されている。

## 第2節 位置と地形

本報告書に記載されている唐松A遺跡・地蔵田A遺跡および地蔵田B遺跡は、いずれも阿武隈川の支流谷田川の南岸にあり、国鉄水郡線谷田川駅の西北西700m～1,300mに位置し、国道49号岩作歩道橋より南東へ500m～1,000mほどの所にある。

谷田川の河谷は遺跡周辺で幅500mほどの氾濫原を形成し、谷田川がゆるやかに蛇行して流下している。谷田川河谷を含む地域の地質を概観すると、河谷部は砂礫質の沖積層と郡山盆地に広くみられる大槻層が約半々ずつを占めており、郡山層はわずかに認められるにすぎない。谷田川北岸は黒雲母花崗岩が風化浸食された比高20～30mの丘陵性台地であり、地表は深層風化した残積土が厚く堆積している。南岸は白河石英安山岩質熔結凝灰岩を基盤としたなだらかな丘陵性台地であり、局部的に郡山層の堆積が認められる。北部丘陵に比べて南部丘陵は、小河川による開析が進んでいる。唐松A遺跡と地蔵田B遺跡は、郡山盆地大槻層に比定される中位段丘上に立地しており、地蔵田A遺跡は郡山層が開析されてできた舌状丘陵の末端に位置している。

### 唐松A遺跡周辺の地形

唐松A遺跡は昭和56年度にその一部を発掘調査し、報告書VIIIにその成果を収録した。谷田川の比高約2m強の中位段丘上に位置し、土地利用の現況は宅地・桑畠および普通畠となっている。今年度発掘調査地域は、唐松A遺跡と唐松館跡が重複している部分である。

唐松A遺跡の最高所は南端部で標高252.5mあり、北へ向かってゆるやかに低下し北端部で251mとなる。東北農政局作製の1/1,000地形図でみると、唐松A遺跡の東側では252mの等高線の屈曲状況と現地観察から郭内より0.5～1m低い幅13～15mの溝状部が明瞭に認められ、また南側では250.5m、251m、251.5m、252mの各等高線の形態から幅15～30mで0.3～0.5m低い溝状の低地が認められる。これら等高線にあらわされた東側と南側の低地は、唐松館跡の濠跡と推定することができる。西側の濠跡と思われる部分には、10m幅の市道が造られており、地形図から濠跡を推定することは困難である。しかしこの市道は、明治15年作製の地籍にも記載されている道路であり、しかも比高2m以上の段丘差を直線状に登っている所をみると、道路敷部分は古くから段丘崖を切っていた可能性、すなわち唐松館の濠跡であったり可能性を否定することはできない。また聴取調査によると、郭の四隅には0.5～0.6mの土堤状の高まりが残っていたとのことであるが、現状では耕起のためか確認することができなかった。

### 地蔵田A遺跡周辺の地形

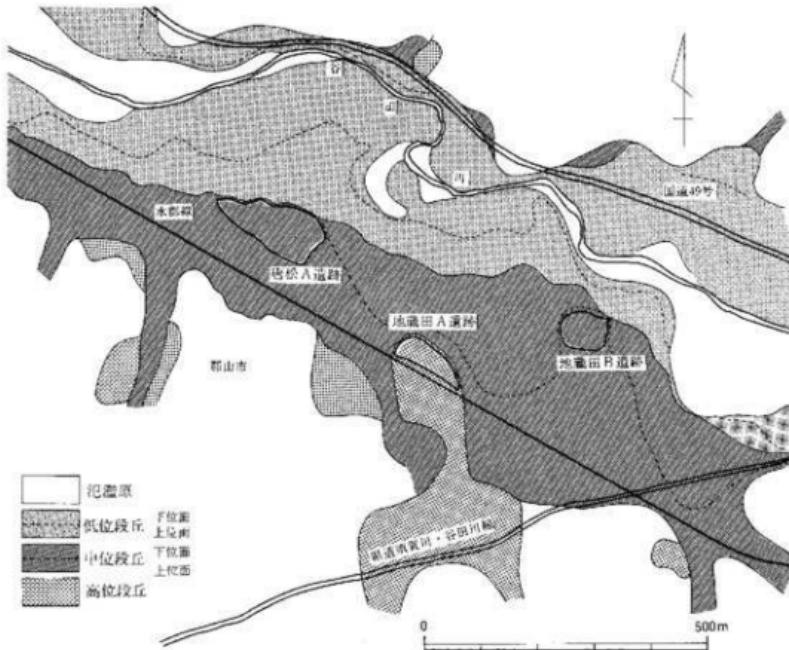
地蔵田A遺跡は郡山層が浸食されて形成された、北に張り出した舌状丘陵地に立地している。土地利用は普通畠・桑畠および花木畠であり、一部に杉林および竹林がみられた。今年度発掘調

査を実施した区域は、国鉄水郡線により南北に分断された舌状丘陵の北半部分である。地形は比高5m程度の半裁された円頂丘状であり、東と北はいずれも緩斜面をなしており、西側がわずかに急傾斜をみせる程度であり、地形的な特色はほとんどない。

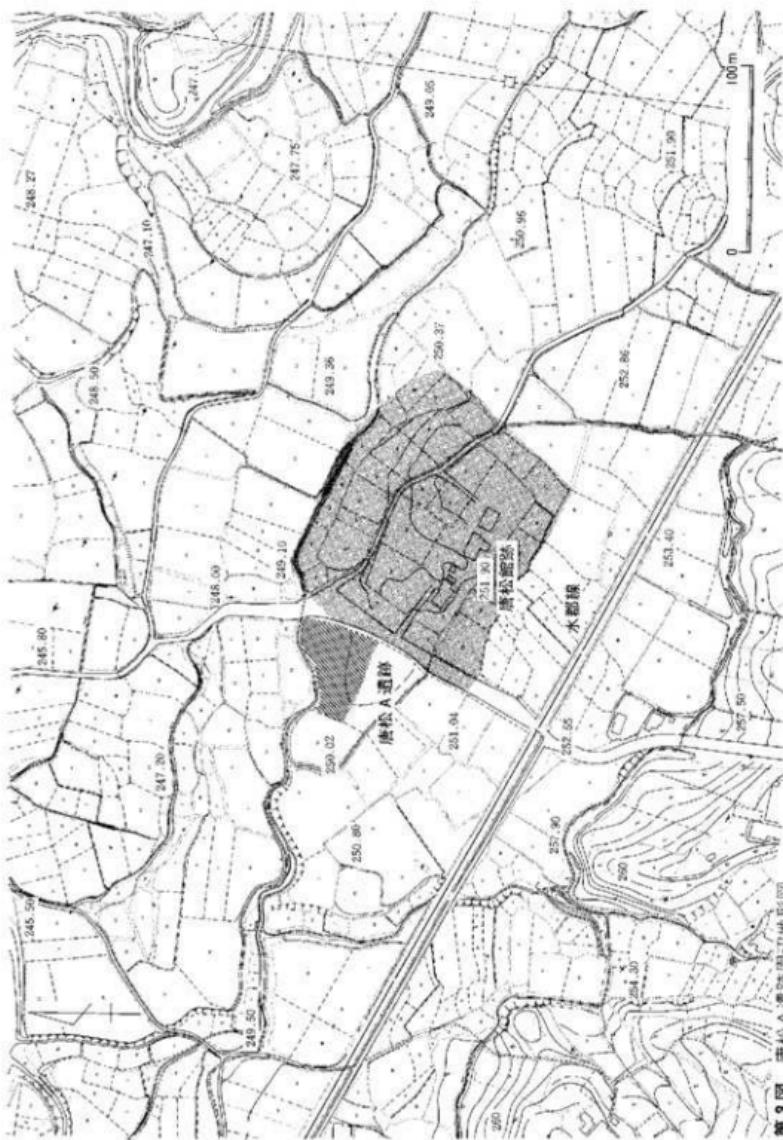
#### 地蔵田B遺跡周辺の地形

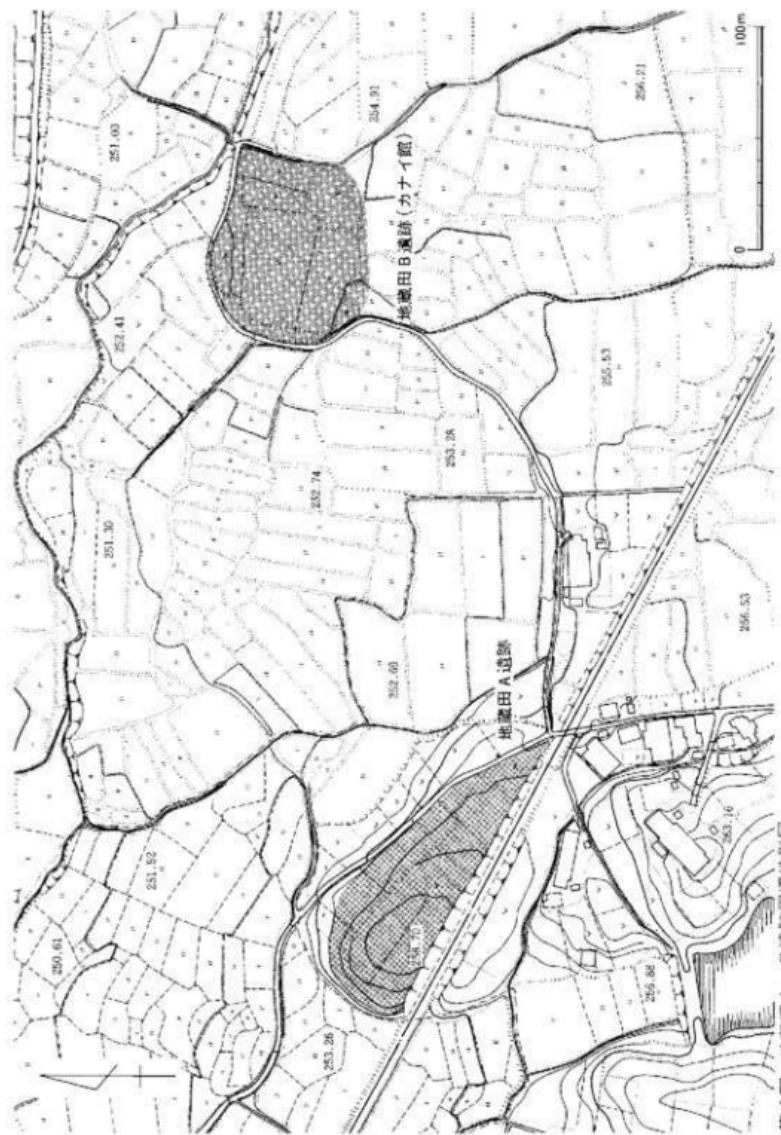
地蔵田B遺跡は普通畑・桑畑および水田に利用されており、地形的には唐松A遺跡と同様谷田川の南端に広く発達する中位段丘上に位置する。北側は比高1.5~2.5mの段丘崖により境されており、西は0.5~1.0mの浸食崖がみられる。東側には小さな灌漑水路による0.5m程度の比高差がみられるが、南部はゆるやかな斜面がつづき地形的変換線を見出すことは困難である。遺跡内の微地形はほとんど認められず、館の存在を思わせるような特色は見出せない。しかし聴取調査と試掘調査により濠跡が検出されたため、カナイ館として届出たものである。

なお本遺跡に北接して大字大供字石倉<sup>いしくら</sup>という約3,000m弱の小字がある。「くら」とよぶ地名は岩壁・断崖などを示す地形用語として知られていることからすれば、本遺跡北端の段丘崖は古くから存在したものと考えられる。



第2図 遺跡周辺地形区分図





第4図 地蔵田A・B選跡周辺地形図

### 第3節 歴史的環境

本報告書に記載されている3遺跡の性格は次のとおりである。

唐松A遺跡 繩文草創期～前期遺跡、奈良・平安時代遺跡、中世城館跡

地蔵田A遺跡 繩文早期末～前期遺跡、奈良・平安時代遺跡

地蔵田B遺跡 繩文前期～中期遺跡、中世城館跡

3遺跡に共通にみられる縄文時代の遺跡は、唐松A遺跡を中心とする半径5km以内に39遺跡ほどが知られている。これらの縄文時代遺跡のうち、試掘調査などで性格の確認されたものは11遺跡にすぎない。縄文草創期から前期にかけての遺跡は、今年度発掘調査の3遺跡以外には駒形B遺跡が知られているにすぎない。縄文後期から晩期にかけての遺跡には良好なものが多く、荒小路遺跡・又兵衛田A遺跡・一斗内遺跡・洞川岸A遺跡・山田C遺跡などがある。特に荒小路遺跡は今年度調査地に最も近くにある縄文後期後半の単独遺跡であり、配石遺構が確認されており、重要遺跡として注目される。また一斗内遺跡は15,000m<sup>2</sup>以上という広大な面積を有し、多数の埋甕と土坑群が確認されており、後期後半から弥生初期にかけての良好な遺跡であり、弥生時代の再葬墓の可能性があり注目される。本年度試掘調査を実施した洞川岸A遺跡は阿武隈川から150mほど離れているにすぎないが、埋甕が確認されると共に扁平な河原石を利用した石錘が多数出土しており、縄文後・晩期の漁撈に依存した集落跡と考えられる。

唐松館・カナイ館を含む中世城館跡は、唐松館を中心とする半径5km以内に25ヶ所確認されており、範囲を拡大すればその数は飛躍的に増大する。これらの城館跡のうち文書等に記載されているものはわずかにすぎず、唐松館・カナイ館などはそこに含まれていない。

12世紀から14世紀初頭にかけては猿田の城・藤田城・石川城などが知られている。觀応3・4(1352～1353)年の宇津峯攻防にからむ北朝方の軍忠状には、笠川城・御代田城・谷田川城・矢柄城・宇津峯城・六日市庭城・川曲城などが記載されており、日和田城も明確に存在していた。また応永11(1404)年の仙道国人一揆契状などから城館跡を推定すると、笠川城・御代田城・谷田川城・川曲城・細田城などが唐松館・カナイ館に接近しており、稲村城・守屋城・前田川城・高倉城・下枝城・中津川城・下行合城・阿久津城・名倉城・川田城・早水城などがその周辺にあった。觀応・応永の文書群からみて、笠川・御代田・谷田川・川曲の諸城館は、13世紀初頭には城館として成立していたものと考えられる。なお岩瀬郡を支配していた二階堂氏は、文治5(1189)年以前から岩瀬郡に居住していたと考えられるので、須賀川市域に城館を構えていたことは充分に想定できる。『藩翰譜』に記載されている田村仲教、仲能(13世紀初)の居城「猿田城」は『仙道田村莊史』では郡山市田村町岩作字東作田に比定されているが、東作田には城館跡がないので、東作田に

最も近い唐松館を猿田城にある説(『三春町史』第1巻)もあるが確証はない。また前述の宇津峯攻防における唐(柄)久野原合戦の唐久野は、『白河風土記』では守山村と江持村の境の原とされている。4通の軍忠状から北朝方の移動を考えると、笛川城から阿武隈川西岸にそって南下し、須賀川市浜尾付近から対岸の江持に渡ったと思われる。唐久野原を守山以東の谷田川氾濫原と想定することも可能である。『白河風土記』にいう唐久野原は周辺部で最も高い所であり、しかも江戸時代およびそれ以前の景観は、アカマツ・コナラ・クスギなどの森林とカヤなどの草地が交錯した植生が復元できるので、大規模な合戦には不適当であったと思われる。

(若林伸亮)



第5図 周辺遺跡分布図

## 第1編 唐松A遺跡 (含・唐松館跡)

遺跡記号 C Y - KM · A (T)  
所在 地 郡山市田村町大字岩作字唐松  
時代・種類 繩文・奈良・平安時代  
中世-館跡  
調査期間 昭和57年5月31日～10月25日  
発掘担当者 目黒 吉明  
調査員 若林 伸亮 大河 峯夫  
西間木 黑 橋本 博幸  
安田 稔  
協力機関 郡山市田村支所産業課



## 第1章 調査経過

本遺跡は、郡山市田村町大字岩作字唐松に所在する縄文・弥生・奈良・平安時代、および中世城館跡の重複する遺跡で、谷川南岸に形成された河岸段丘先端部に位置する。範囲は唐松A遺跡が12,000m<sup>2</sup>、唐松館跡が15,000m<sup>2</sup>であるが、そのうち9,000m<sup>2</sup>は館跡の内郭部で重なる。昭和56年度に調査課では本遺跡の西側水田部約2,400m<sup>2</sup>を対象に発掘調査を実施し、『母畑地区遺跡発掘調査報告書』にその成果を収録した。今回の調査では前年度分を除く残り15,600m<sup>2</sup>のうち3区域合計2,300m<sup>2</sup>を対象に実施した。

### 第1節 調査経過

本遺跡は、母畑開拓事業所との昭和57年度工事区内遺跡の保存協議の結果、記録保存のために発掘調査を実施することになったものである。当初、工法上削平を受ける遺跡東部約700m<sup>2</sup>を対象に調査を開始した。5月31日のことである。その後、遺跡中央部を東西に走る幹線道路が、遺跡を切って施工されることが判明し、6月7日現地協議の結果、7月2日対象地区540m<sup>2</sup>を新たに調査に加えることになった。

調査の都合上、当初の調査区域を第I調査区、道路敷部分を第II調査区と呼ぶことにし、調査を継続的に行つた。I・II区についての調査が終了したのは、8月5日である。

調査対象外の遺跡の大半は、盛土工法により現状保存を行うことで調査を実施しなかったが、8月30日・31日、表土を薄く削平するとの連絡により、工事に立ち会つた。この時点では遺構・遺物の表出は見なかつた。しかし、9月21日、館の北側、周溝内壁の崖上に、焼土塊と土器片が発見され、土師器を伴う住居跡と判明し、急遽調査することになった。周辺部を含めて300m<sup>2</sup>を対象に、第III調査区として、9月27日より調査を再開した。最終的に全ての調査が終了し一切を撤収したのは、10月25日であった。

#### 発掘調査日誌概要

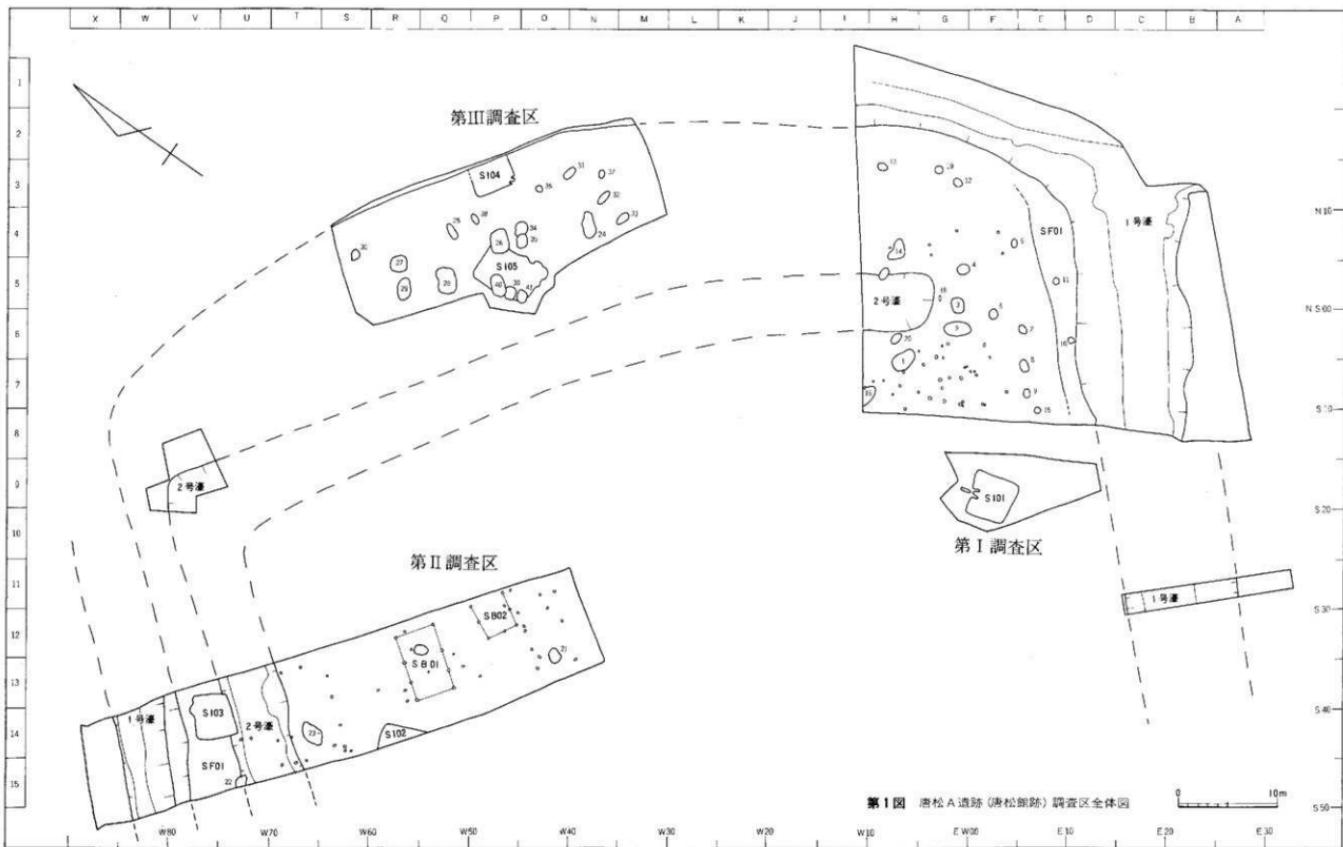
5月31日 ベンチマーク設定。25230m<sup>2</sup>。

6月1日 基準杭を設定し、地形現況図の作成を始める。

6月7日 母畑開拓事業所須賀川支所長・郡山市田村支所産業課長と当調査課の若林他調査員3名とで現地協議を行い、調査の必要性を確認した。

6月10日 重機を導入して表土除去始める。東側、濠跡の規模を確認するためにトレッセを設

- 定し、掘り込む。テント設営し器材置場とする。
- 6月11日 平場の9割を排土し、濠・土塁・ピットを検出する。トレンチで濠上端を確認。幅11.15m。道路南部の調査区は、狭いため手掘りにより排土を始める。
- 6月15日 1号濠・2号濠検出。南部で住居跡のコーナー検出。
- 6月16日 磁北より東へ55°振って基準杭を設け。全域にグリッドを掛ける。検出作業継続。
- 6月17日 ベンチマークを移動する。251.70m。住居跡全面を検出するため、地権者と協議。
- 6月21日 土坑・ピットの断ち割り、及びセクション図・平面図作成にあたる。
- 6月23日 南部を拡張し、住居跡全面を検出する。掘り込みに入る。
- 6月25日 S I 01より、土師器壺・杯片、鉄製鋸鍼車出土。同時に、炭化物がかたまって検出され、焼失家屋であろうと判断する。
- 7月2日 西側道路敷部分について、作物(植木の移植)との関係で地権者と時期の交渉をしていたが、7月13日より調査を始めることで話し合いが着く。
- 7月5日 1号濠より漆椀出土する。S I 01の炭化物実測終り、遺物を取り上げる。
- 7月13日 道路敷部分を第Ⅱ区とし、重機を導入して表土の除去を開始する。
- 7月14日 排土作業終了し、住居跡・土坑・柱穴及び1号濠・2号濠の延長部を確認する。
- 7月19日 2号濠北西コーナー確認のためにトレンチを設定し掘り込む。Ⅱ区の精査、掘り込みを継続する。
- 7月21日 2号濠掘り下げ。土師器壺・杯出土する。I区の1号濠完掘する。
- 7月28日 北西トレンチで、2号濠コーナーを検出する。南側は調査できないが、ほぼL字形に折れることを確認した。
- 7月30日 土塁の断ち割り作業中、下層よりS I 03を検出。須恵器片を多数伴出する。
- 8月5日 平面図を作図し、第1次の調査を終了した。
- 8月30日 遺跡内畠地造成地区についての整地工事に立ち会う。
- 9月21日 館北側の土塁が削られており、その下に焼土塊が表出しているのを発見した。土師器細片も散乱しており早速協議に入る。地蔵田Aと併行して調査を実施する。
- 9月27日 第Ⅲ調査区として焼土塊を中心に約300mの調査を再開した。表層の搅乱土をうすく削除し、住居跡1、土坑多数を検出した。
- 10月6日 I区より延長して基準杭を設定。軸方向は同じN55°Eとする。
- 10月7日 住居跡のプラン確認のため、一部南側を拡張して、さらに精査を継続する。
- 10月12日 各遺構の掘り込みを行う。群在する大型の土坑は墓坑である可能性がある。
- 10月18日 S I 05を除き、ほぼ完掘した。S I 05は、2軒の切り合ではなく長方形の1軒の住居跡となる確信を得る。遺構実測に入る。



第Ⅰ図 酒松A遺跡(酒松鉱跡)調査区全体図



10月25日 遺構を埋めもどして一切を終了した。

二次にわたる調査によって検出した遺構は住居跡5軒、建物跡2棟、土坑41基、濠2条である。

## 第2節 調査方法

### 1. 調査方法

本調査は、工事により削平・破壊される遺跡の部分の調査である。対象部分が館の東北隅に限定されるために、濠跡の調査については、一部トレンチ掘りを併用しながら行うこととした。

地形現況図の作成については基準杭の位置をトラバース測量で確認しながら $\frac{1}{500}$ 縮尺で行った。レベル原点の設定は、母畠開拓事業所が設定したベンチマークを利用した。

表層耕作土の排除は、期間短縮のため重機を導入して行った。遺構検出面は、地山・黄褐色砂質土上面であるが、濠および土塁は第II層上より形成されている。土層観察は、西および南壁面において行った。

発掘区域の設定は、調査区全域に5m方眼を掛けグリッドを設定し、東よりA・B・C…、北より1・2・3…の記号を付して、A-1、B-2…と呼ぶことにした。基準となる軸線は、F・G、5・6の境界に設け、N S 00、E W 00とした。軸線の方向はN55°Eである。なお、II区・III区については、I区の基準線を延長して設定した。

遺構図の採録は、濠を $\frac{1}{500}$ 、住居跡・ピットを $\frac{1}{50}$ 、土坑を $\frac{1}{50}$ で行った。土層セクション図は $\frac{1}{50}$ 縮尺で記録した。写真は、35mmカメラにより、モノクロ・カラーリバーサルを併用して隨時撮影した。

### 2. 基本層序（第2図）

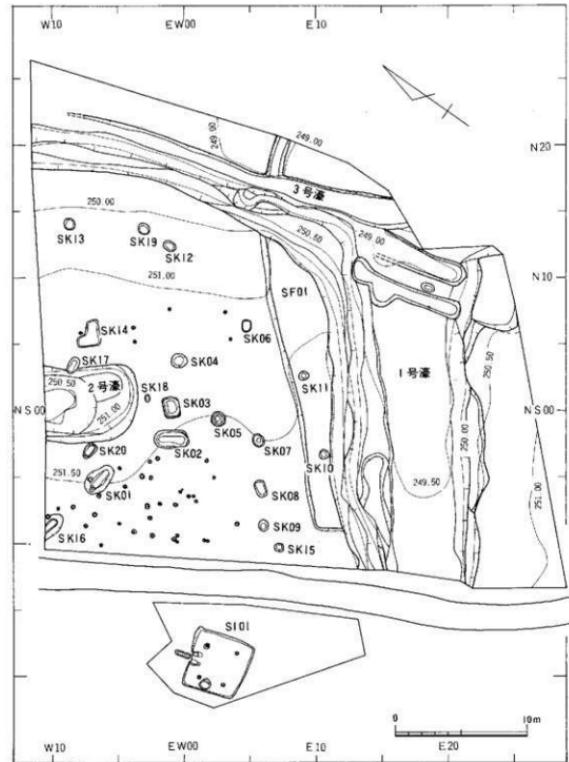
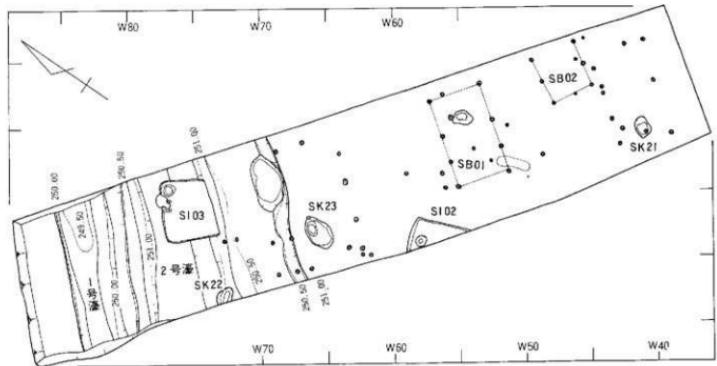
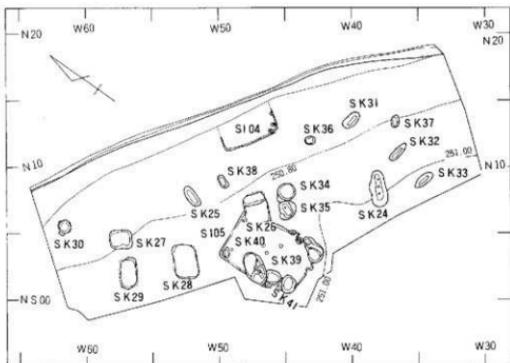
今回の調査において認められた本遺跡の基本層序はおよそ下記のとおりである。第I層表土（耕作土）は約20~30cmである。第II層は30~40cmの厚さに暗褐色砂質シルトが堆積し、第III層は、黄褐色土・地山をなす。もちろんこの層序が調査区全域を通して一律に表れるわけではなく、第II区では、第I層はより厚く40~50cmを測り、また、東側外濠は、第I層直下で検出している。区域により第I層・第II層とも、含有物などにより、さらに3~4層に細分される。

遺構は、そのほとんどを第III層地上面で検出しているが、2号住居跡セクション図からは、第II層の中位から掘り込まれていることが確認されている。また、館に伴うであろう濠跡は、第II層を切って構築されているようであり、土塁は第II層を生かしながら積み上げられている。上層は耕作時削平を受けて現在にいたったものと推測され、濠の掘り込み面、土塁の上部を破壊している。遺物は、第II層に一部含まれて出土しているが、そのほとんどは遺構内あるいは遺構検出面上で発見したものである。

（西間木薫）



第2図 基本図序



第3図 潜松A透跡透構配図



## 第2章 遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は堪穴住居跡5軒、土坑41基、掘立柱建物跡2棟、土壘および濠その他焼土遺構・ピット群が検出され、本遺跡は縄文時代から中世にかけての遺構が複合して存在していることが判明した。遺物は主に住居跡からは土師器、L-I・IIからは縄文土器が出土している。この他濠跡からは少量の中世陶器が出土した。

### 第1節 堪穴住居跡

堪穴住居跡は5軒検出されたが、完全に平面プランを捉えることができたものは1・5号住居跡の2軒である。遺物から1～4号住居跡はそれほど時期差は認められないが、5号住居跡だけはややかけ離れており、住居跡も特異である。

#### 1号住居跡 S 101

##### 遺構(第4・5図、図版5・6)

第I調査区南部、F-9・10グリッドにおいて検出した住居跡である。検出面は地山黄褐色ローム面で、土壘崩壊と思われる黒褐色土を除去後に検出された。平面プランは一辺が約4.5mのほぼ方形を呈し、深さは約30cmを測る。堆積土は暗褐色砂質シルトを主体とする土が投げ込まれた状態で乱れて堆積していたことから人為的な堆積と考えられる。

壁は北側ではやや角度を持つが、他ではほぼ垂直に立ち上がり壁溝は検出していない。床は平坦で中央部がやや盛り上がって固く踏み締められているが、貼床は認められない。床面からは大量の木炭が出土している。ほとんどは細片となって覆土中に混入しているものであるが、中には柱様の形状をそのまま維持したものもあり、本住居跡を焼失家屋とする根拠のひとつになっている。

カマドは北壁中央部に設けられている。焚口幅50cm、奥行きは90cm程あり、両袖は幅20～30cm、長さ70cm程で明黄褐色粘土で構築されている。煙道は燃焼部奥壁より長さ1.3m、深さは20cm程のU字形の掘り込みで、先端に行くほど浅くなっている。全体につぶれた状態で検出しているが、遺物は出土していない。カマドの両脇から小ピット2個が検出され、カマド上部の何らかの施設である可能性がある。

ピットは上記2個を除いて6個検出した。内4個は配置・形状から本住居跡の柱穴と考えられ



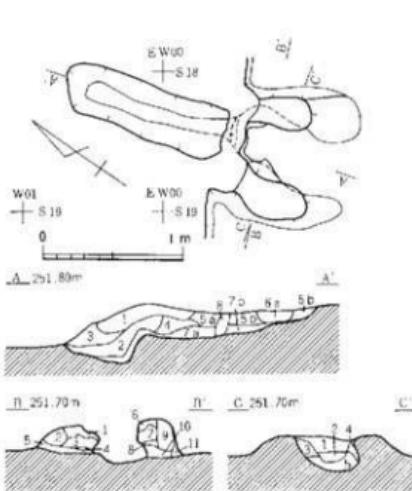
#### 第4図 1号住居跡

る。両壁中央より西寄りに検出したピットは、他に比して大きく、長軸45cm、短軸37cmのほぼ円形を呈し、深さは30cmを測る。位置・形状から貯蔵穴と考えられるが、遺物は伴出していない。

## 遺物 (第6・18図、図版24)

本住居跡より出土した遺物は、土師器と鉄製鋸鍊車である。土師器は、1住7の壺がカマド東側に直立した状態で出土したほか、土器はいずれも小片で散乱して出土したものである。図化を得た9点について以下に述べる。

1住1～6までの杯は外面に段を持つ内黒のもので、口縁より段までの外面調整はヨコナデ、段下部から底部にかけてはヘラケズリが施されている。内面は丁寧なヘラミガキが全面に施され、



第5図 1号住居跡カマド

1住4~6については、体部と底部を画する沈線が施されている。胎土・焼成は良好である。1住7~8は壺であるが、1住7は前述のように直立して出土したもので、胴下部を欠損したまま器台として使用された可能性がある。口縁部にヨコナデ、体部外面に縱方向・内面に横方向のヘラナデが施されており、胎土・焼成とも良好なものである。1住9は覆土中より出土した壺で口縁部より胴部にかけて1/4程度復元した。口縁部はヨコナデ、胴部上半はハケメ、下半にはヘラケズリが行われている。胎土はやや粗く、全体的にかなり磨滅している。

鉄製紡錘車は北西コーナー付近より出土したものである。茎は長さ20.9cm、太さ0.45cmを測り断面は円形のパイプ状を呈する。輪部は直径5.8cm、厚さ0.3cmで、茎の中央部に取り付けられたまま出土した。他に弥生式土器片が3片出土している。いずれも細い沈線で文様を施すもので1片には朱が塗られている。しかし、いずれも小片で、器種・器形を推定することはできない。

### まとめ

本住居跡は、耕作層よりもかなり深い面で検出されたために、遺存状態が比較的良好で、プラン等についても明確に捉えることができた。北壁にカマドを、四隅のほぼ対角線上に4つの柱穴を持ち、貯蔵穴を有する整然とした住居跡である。また、床面上からかなりの炭化材が出土したことは、火災にあったことを推定させる。遺物は体部に段を有す杯とハケメを多用する壺が出土し、その特徴から、栗門式期から国分寺下層式期にかけてみられるもので、本住居跡の時期を8世紀前半頃と推定する。

(西間木薫)

#### カマド煙道部地質土

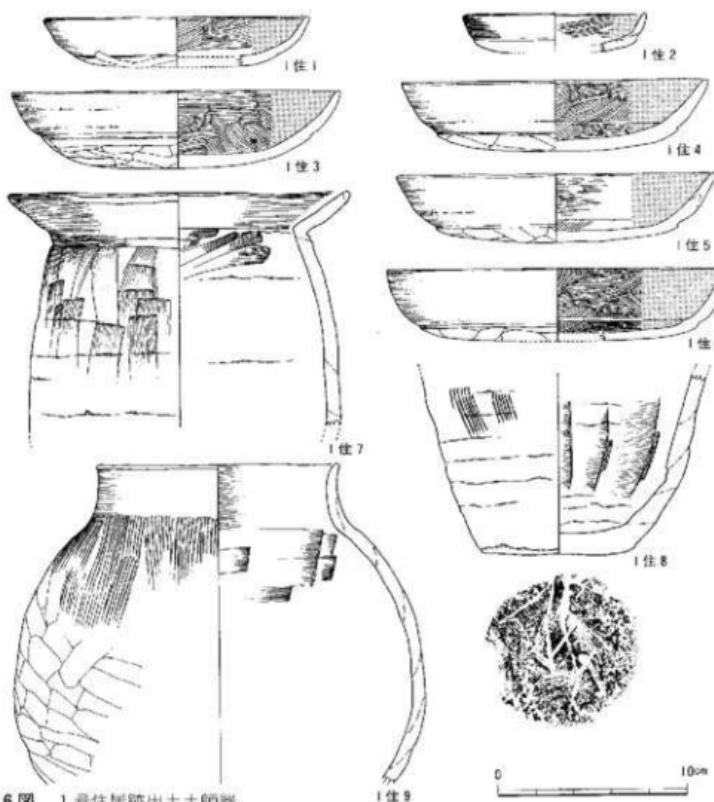
- 1 黄褐色シルト(黄色粘土ブロックを含む)
- 2 灰褐色シルト(灰土ブロックを含む)
- 3 灰褐色シルト(灰土を少量含む)
- 4 灰褐色シルト(黄褐色土をブロックで含む)
- 5a 灰褐色シルト
- 5b 灰褐色シルト
- 6a 灰褐色シルト(灰褐色砂質シルトを含む)
- 6b 灰褐色シルト(灰褐色砂質シルトを含む)
- 7a 灰褐色シルト(灰褐色シルトを多く含む)
- 7b 灰褐色シルト(黄褐色シルトを多く含む)
- 8 黄褐色砂質土ブロック

#### カマド側壁地質土

- 1 灰褐色砂質土(灰褐色砂質土・炭化物を含む)
- 2 黄褐色粘土ブロック
- 3 灰褐色粘土ブロック
- 4 灰褐色粘土(黄褐色砂質土を含む)
- 5 灰質褐色砂質土(炭化物を含む)
- 6 黄褐色砂質土(泥上ブロック・炭化物を含む)
- 7 黄褐色粘土ブロック
- 8 灰質褐色砂質土(炭化物を含む)
- 9 黄褐色粘土ブロック
- 10 灰褐色砂質土(黄褐色シルトを多く含む)
- 11 灰褐色砂質土

#### カマド内部地質土

- 1 灰褐色砂質シルト
- 2 灰褐色砂質シルト(泥上ブロックを含む)
- 3 灰質褐色砂質土
- 4 灰褐色シルト(灰質褐色砂質土ブロックを含む)
- 5 赤褐色粘土ブロック(炭化物を含む)



第6図 1号住居跡出土土器

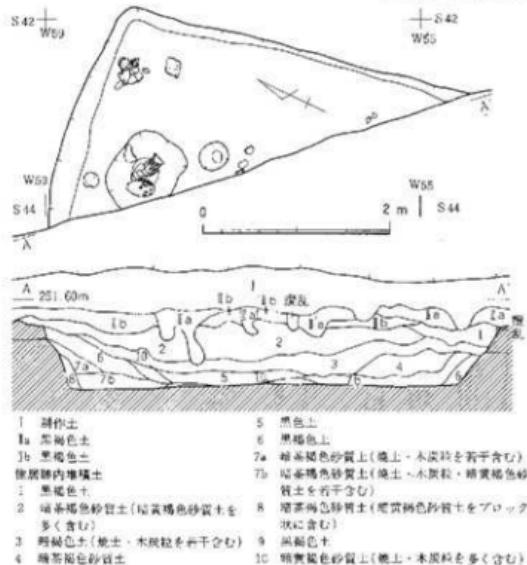
## 2号住居跡 S I 02

## 遺構 (第7図 図版10・11)

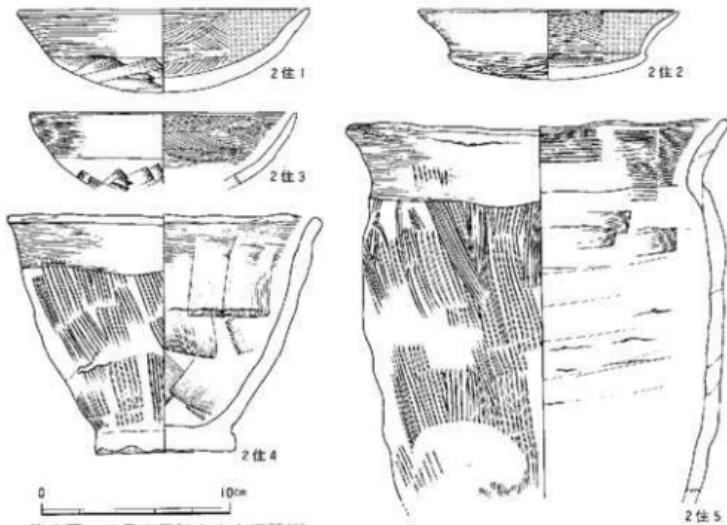
II区のほぼ中央において検出された住居跡であるが、調査できたのは全体の約1/3である。遺構確認面は暗黄褐色土の地山面であり、検出されたのは北辺375m、西辺250mを測る三角形を呈する北西コーナー部だけである。プランは方形を呈しているものと思われるが、他は調査区域外のためやむを得ず専だけの掘り込みとなった。住居跡内堆積土は暗茶褐色砂質土が主体をなし、壁付近や床面上には黒色土・黒褐色土がそれぞれ自然堆積の状況を示している。床面上の堆積土には、木炭や焼土粒が若干混入している。壁は割合遺存状態が良く35~50cmを測り、床面より55

~70度の角度をもって立ち上がりっている。床面は地山をそのまま利用しているようである。平坦ではあるが、壁周辺は非常に軟弱である。

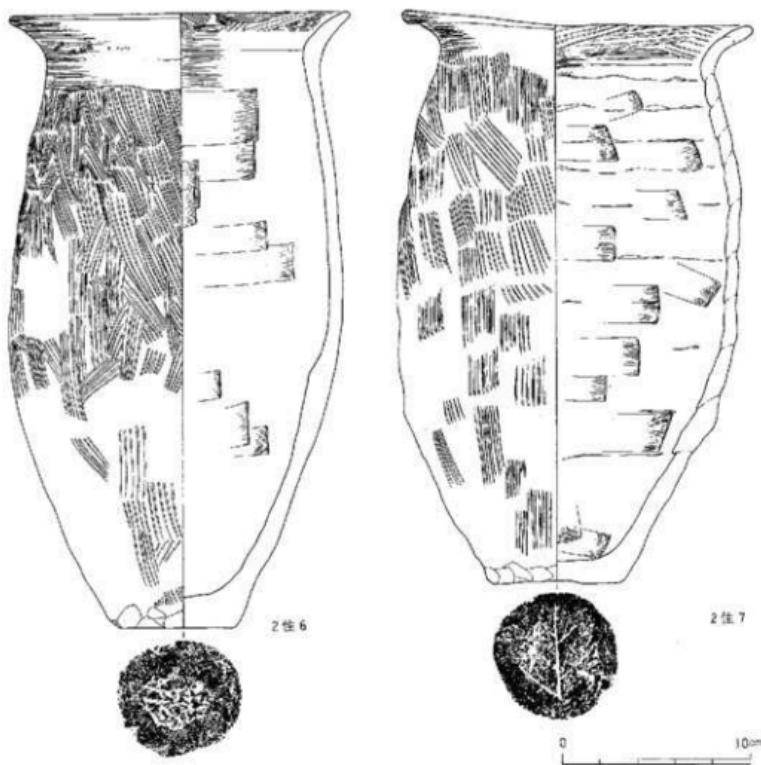
本住居跡内における付属施設としては、貯蔵穴と思われるピット( $P_1$ )を1個検出したが、壁溝・柱穴等は検出されなかった。検出された $P_1$ は西壁によった部分にあり、一部は調査区外となっている。プランは長軸88cm、短軸70cm、最大深度は約28cmを測る格円形であり、断面は掘り鉢状を呈するものである。



第7図 2号住居跡



第8図 2号住居跡出土土器(1)



第9図 2号住居跡出土土師器(2)

#### 遺 物 (第8・9図、図版25)

本住居跡に伴う遺物は土師器のみであり、床面上からは杯・甕が、またP<sub>1</sub>の1層目からは甕が出土している。

土師器杯は3点あり、2住1・2・3は口径13.8~15.5cm、器高3.7~4.4cmを測るものである。器形は、丸底の底部から体部へ移行する部分に、明瞭に段を有し口縁部は大きく外反する2住2と、段が稜線となり口縁部はやや外反気味に立ち上がる2住1・3がある。調整は、外面底部から段あるいは稜線まではヘラケズリ、その上はヨコナデが加えられている。内面は全面ヘラミガキが行われ黒色処理されるが、2住3は再酸化のためか黒色は消えている。2住2の外面底部は、ヘラケズリの後ヘラナデも施されている。

土師器壺は4点あり、2住4・5は北西コーナー部から、2住6・7はP<sub>1</sub>からの出土である。2住4は小型の壺であり、器形は平底より次第に大きく開きそのまま口縁部となるもので、調整は体部外面はハケメ、内面はヘラナデ。口縁部はそれぞれヨコナデが施されている。2住5・6・7は口縁部に最大径をもつ長胴壺である。調整は、外面は全面ハケメ調整が施された後、頭部から口縁部にはその上からヨコナデが加えられている。内面口縁部から頭部にかけては、ハケメ調整後ヨコナデを施し、体部は全面ヘラナデを行っている。2住4・6・7の底部には木葉痕が観察される。

### まとめ

本住居跡は、北西コーナー部付近だけの調査であり、カマドや柱穴の有無が不明であるなど全容を捉えることはできなかったが、検出された遺構部分や遺物の遺存状態は良好な住居跡である。出土遺物は土師器杯・壺だけであるが、これらはロクロ未使用のものであり、杯は内外面に段あるいは棱を有するものであることから、本住居跡の時期は、土師器土器編年上栗井式期に属するものと考えられる。

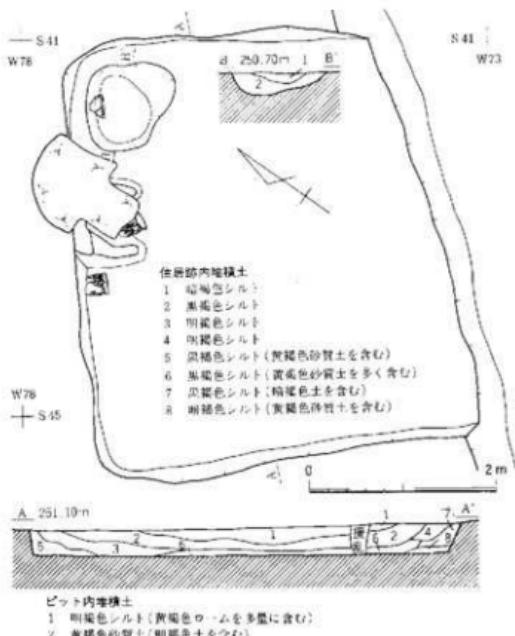
(橋本博幸)

### 3号住居跡 S I 03

#### 遺構(第10図、図版12・13)

唐松館の西辺を画すると考えられる土壘の下より検出された住居跡で、調査区でも西端に位置している。平面プランを確認したのは土壘断ち割り後の黄褐色地山面であったが、2号濠発掘時においてその法面に断面が観察されており、館構築の際の濠掘削によって住居跡の東辺が破壊されたものと考えられる。

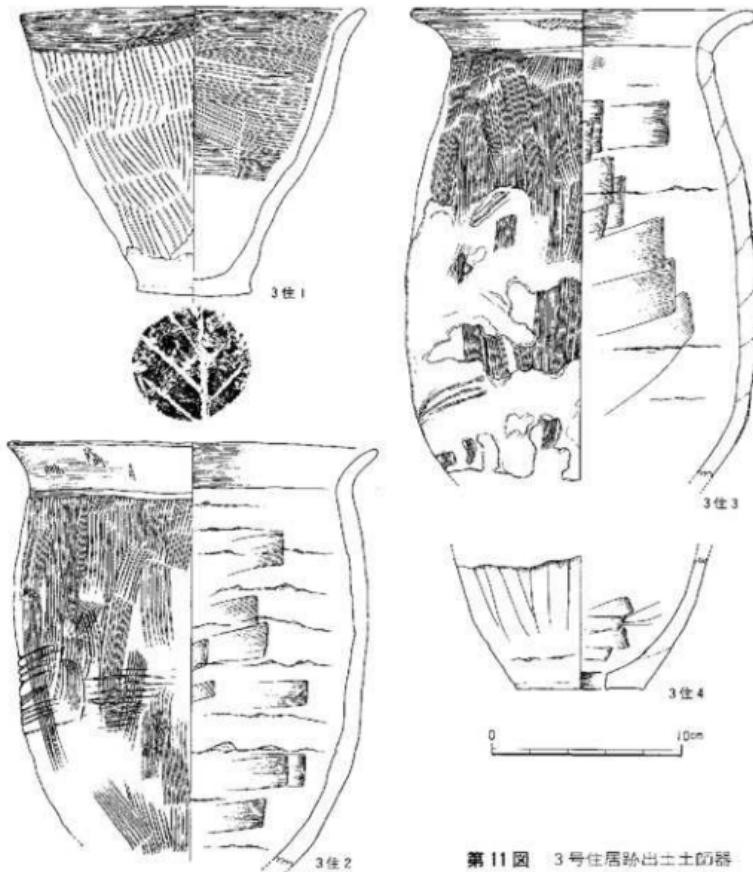
平面規模は遺存する西辺から推定して一辺4.5m強の方形プランを呈していたと思われ、1号住居跡などと共に集落内では平均的な規模のもの



第10図 3号住居跡

であったろうと考えられる。セクションを観察すると、1・2層は黒褐色土を主体とした土がレンズ状に、壁際の数層は地山層のブロック粒を含む土が将棋倒し状に堆積していることから自然堆積と考えられ、2号 sondage削時にはすでに完全に埋没していたであろうと思われる。壁高は最もよく遺存する南辺で30~35cm、遺存度の悪い北辺で南辺より5~10cm高さを減じている。貼床は認められず、地山をそのまま床面としており、壁溝は認められない。

カマドは電柱工事によってその大半が破壊されており、左袖と右袖先端が残存するのみで燃焼部はほとんど遺存していない。左袖は西壁面より60cm住居内に張り出し、焚き口になると思われ



第11図 3号住居跡出土土器

る両袖端の間も60cmを測る。住居外への煙道は認められない。

カマド右脇には南北90cm、床面からの深さ20cmの不整梢円形のピットが検出されているが、地山層のブロック粒が多量に積まっていることなどから、住居使用時に常に開口して使用されたとは考えにくいものである。その他のピットは検出されず、柱穴なども認められなかった。

#### 遺物 (第11図、図版25・26)

遺物で図示できたものはカマド周辺より出土した土器器で、その他に $\ell - 2$ より土器器片少量、須恵器片が多量に出土している。3住2はカマド左脇より出土した壺で肩部に段を有し、調整は口縫部ヨコナデ、体部外面ハケメ、内面ヘラナデである。内面には積み上げ痕が観察され、外面胴部のほぼ中央には横に引かれた粗い傷状の擦痕がみられる。3住3はカマド燃焼部から出土したものであるが、その半分は電柱工事によって切り取られた形で欠失している。調整は3柱2と同様であるが、胴部最大径がやや下方にあり、しかも口径より上まわっている点で3住2と異なっている。3住1は鉢形の土器で完形品である。外面はハケメ調整、内面は外面よりやや密なハケメ調整が横方向に施されている。3住4は有底の瓶破片である。内外面に丁重なヘラナデが施され、内面は黒色処理されている。この他の破片も壺の破片のみで、杯の破片は一点もみられない。

須恵器は大壺の破片で、少なくとも3個体分とみられるが、接合するものが少ないとから、住居が廃棄されてから一時期をおいて埋没中の住居内に投棄されたものと考えられる。

#### まとめ

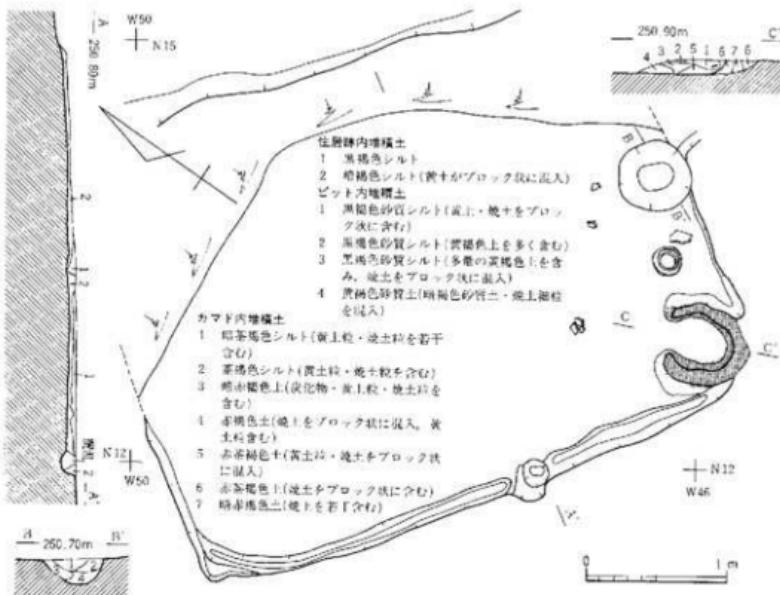
本住居跡は中世館跡に付随する土塁下で検出された住居跡で、東邊も館跡に伴う濠によって破壊されている。住居内において柱穴・壁溝は検出されず、カマドは電柱工事によってその大半を失っている。遺物から考えられる時期は古墳時代末から奈良時代前半で、1・2号住居跡と比べても時期的な隔りは少ないとと思われる。

(安田 稔)

#### 4号住居跡 S I 04

##### 遺構 (第12図、図版19)

第Ⅲ調査区北側P-3グリッドで検出した住居跡である。南側約10mの所にS I 05が位置している。第Ⅱ次調査の契機となった住居跡で、削平を受けてかろうじて残存しており、遺存状態ははなはだ不良である。また住居跡の北側約5mは、館を巡る外濠に切られた状態であった。全面について検出したのは地山・黄褐色砂質土上面である。堆積土は1層のみで、暗褐色シルトであるが、ロームの混入度でさらに2層に細分される。壁面は南側にわずかに残存し、床面から急な立ち上がりを見せるが、6cm程を残すのみで全貌をつかむことはできない。南壁に沿って幅10cm、深さ14cm程のU字形の壁溝が巡らされている。



第12図 4号住居跡

カマドは南東隅で検出した。煙道部は消滅しているが、袖部がわずかに残って確認された。焚き口より奥壁の立ち上がりまでは約47cm、袖幅70cmを測る。燃焼部周囲に焼土が残存しているが、底部には少量付着するのみである。ピットは2個検出したが、いずれも住居跡の壁面を破壊する形で掘り込まれており、住居跡に付随するものとは思われない。

#### 遺 物 (第13図、図版26)

本住居跡より多くの土師器片を採取した。ほとんどは細片でかなり磨滅しているが、中にはほぼ完形で出土したものもある。4住1・2・4がそれであり、カマド北側に4住1が最下、4住2が中央、4住4を最上に三段に重なった状態で検出した。4住1は外面に段を有する内黒の杯である。外面は口縁より体部にかけてヨコナデ、段から下部はヘラケズリを行った後ナデである。内部は中央で括れ、調整は全面にヘラミガキを施している。4住2は平底の鉢で、口縁部はヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリを施したものである。内面は全面に方向が不規則なヘラミガキを行い黒色処理をしている。4住4は小型の碗である。底径6cm、器高5cmを測る。外面口縁はヨコナデ、内面は全面にナデを施している。底部に木葉痕を残す。他に固化し得た土器は2点ある。4住3は4住2と同種の鉢で口縁部を欠損しているが、平底でやや浅い器形をなすもの

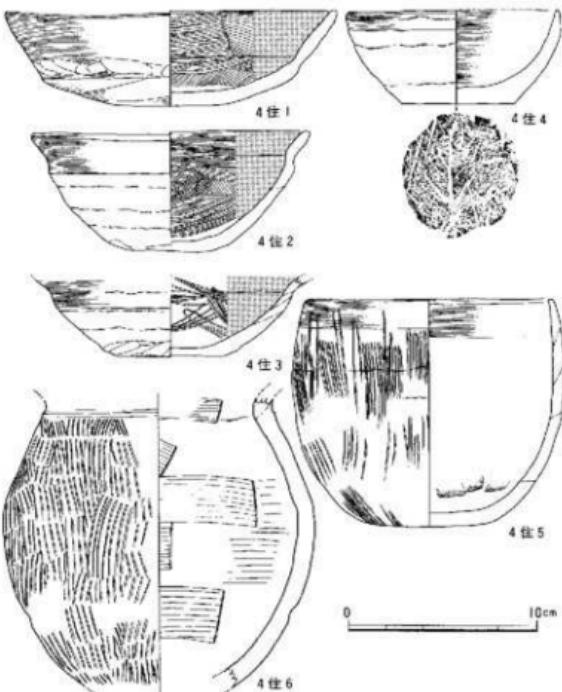
と思われる。4住5は約1/2が残存しており、推定口径13.2cm、器高約12.1cmで、調整は外面口縁部がヨコナデ、体部はハケメ、底部はヘラケズリが施されている。内面は、口縁にヨコナデ、体部から底部にかけてナデが施されている。胎土は粗く色調は暗赤褐色を呈する。器形は一応椀としておく。4住6は小型の甕で体部の約1/2を復元した。底部および口縁部は欠くが、体部の最大径18.1cm、残存高15.2cmである。調整は外面口縁部がヨコナデ、体部は全面にハケメ、内面は横および斜方向のヘラナデを施す。胎土に2mm程の石英粒が多く入り、色調はくすんだ灰黄褐色を呈する。

作図し得たもの他に多くの細片を出土しているが、ほとんどは甕の体部あるいは口縁で器形は長胴のものであろうと考える。

### まとめ

本住居跡が位置する所は、谷田川の氾濫によって生じた段丘崖のやや北向の緩斜面である。耕作等による後世の搅乱を著しく受け、残存していたのは本住居跡の南側約1/2であり、覆土も深いところで10cmという状態であった。平面プランは、方形を呈していたものと思われる。カマドは、南東コーナー部において、また壁溝は南壁下でそれぞれ検出したが、柱穴・貯蔵穴等は確認されなかった。出土遺物は土師器のみで、杯・甕・鉢・椀がある。それらの器形や技法等によって時期比定をするならば、本住居跡は栗廻式期に属するものと考えられる。

(西間木薫)

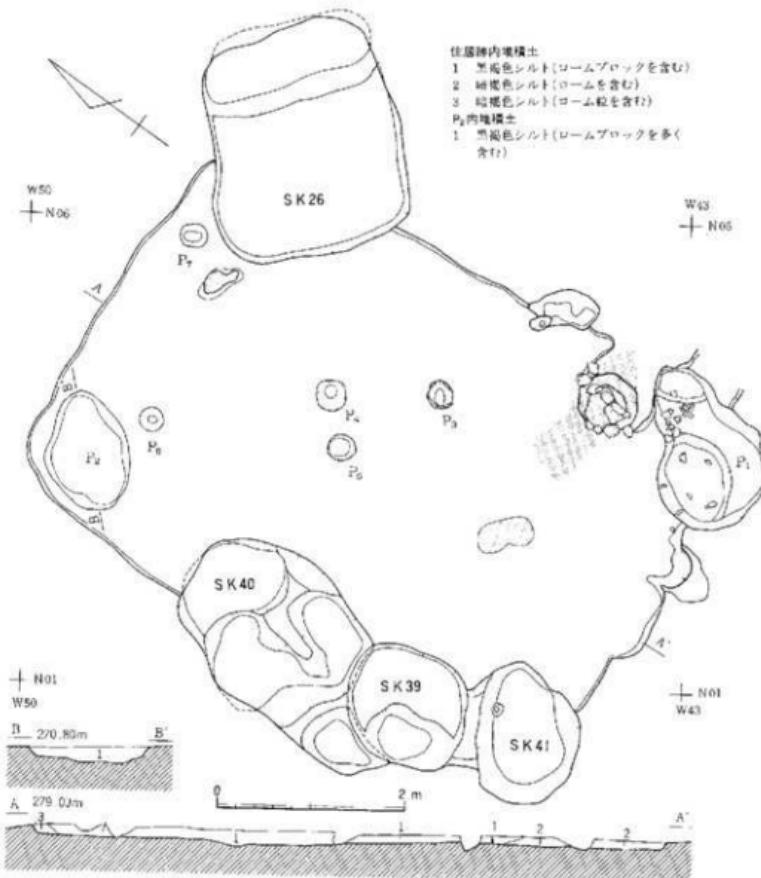


第13図 4号住居跡出土土師器

## 5号住居跡 S 105

## 遺構 (第14・15図、図版20・21)

Ⅲ区の中央で検出された住居跡で、39・40・41号土坑によって南西コーナー部が破壊され、北西コーナーは26号土坑によって切られている。検出面は地山黄褐色ローム面で住居検出時には耕作痕が縞状にみられ、一部住居跡床面まで達しているものが認められた。



第14図 5号住居跡

平面プランは南北6.6m、東西4.6mの長方形を呈し、他の住居跡と比べて特異である。住居跡内堆積土は主に黒褐色土が堆積し、壁際にわずかに暗褐色土がみられ、堆積状況には大きな乱れがみられないことからおそらく自然堆積と考えられる。壁高は残りのよい部分でも10cm程しかなく壁溝は認められない。床面は地山ローム面をそのまま床面としているが、2号カマド前面はかなり固くしまり、焼け面が広がっている。

カマドは南壁(1号)と東壁(2号)に2基検出されたが、両者の時間関係は不明である。1号カマドは南壁よりいくぶん外方に掘り込まれ、住居跡内には袖部と思われる張り出しがわずかに認められる。2号カマドは石を多く使用し、住居跡内に70cm張り出しているが、燃焼部は張り出しに比べそれほど大きな面積を有していない。カマドの他に住居跡中央よりに炉跡的なピット( $P_3$ )が存在する。 $P_3$ の底面は強く焼けていないが、ピット周縁に穢大の焼けたロームブロックが円形に組まれたような状態で認められ、特殊な火の使用が考えられる。

$P_1$ はカマドに挟まれた南東コーナー部に位置し多量の土器が出土している。規模は1.8mの不整形で、深さは最も深い所で30cmを測る。セクションや遺物の流れ込んだ状態をみると自然堆積の可能性が強く、住居使用時には開口していたものと思われる。 $P_2$ は住居跡の北西コーナーに位置し、長軸140cm、短軸90cmの楕円形を呈している。堆積土は一層のみで、自然堆積か人為堆積かは不明である。その他のピットで住居跡に伴うと考えられるのは $P_4$ で深さは44cmである。 $P_5$ ～ $P_7$ は埋土などから住居跡より新しいものと考えられる。

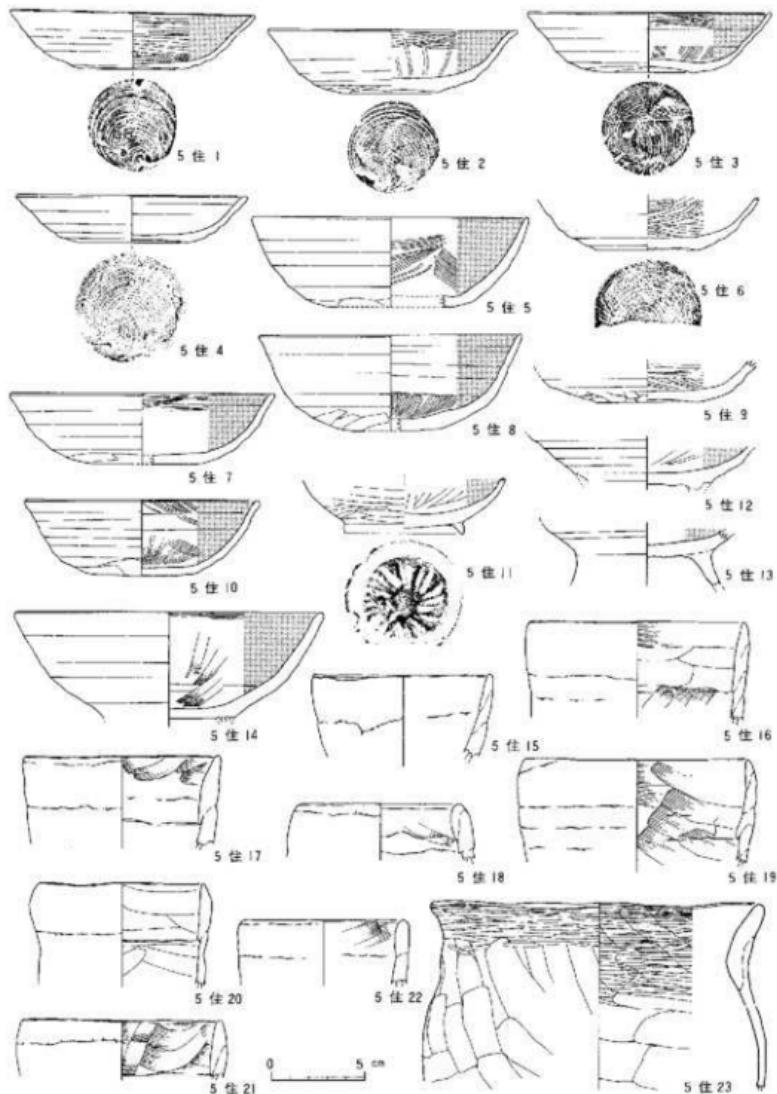
#### 遺 物 (第16～18図、図版26)

出土遺物はすべて $P_1$ 内より出土したもので、5住1～10は土師器杯、5住11～14は高台付杯、5住15～22は筒形土器、5住23は甕である。杯には回転糸切りの切り離しのままのもの(5住1・4・15)と体部下端にのみ手持ちヘラケズリを施し、糸切り痕を残すもの(5住2・3)、体部下端から底部に手持ちヘラケズリを施し、切り離し技法の不明なもの(5住5・7・8・9・10)の3種がある。内面はヘラミガキを行い黒色処理を施しているが、1住4だけは内面もロクロ痕のみで

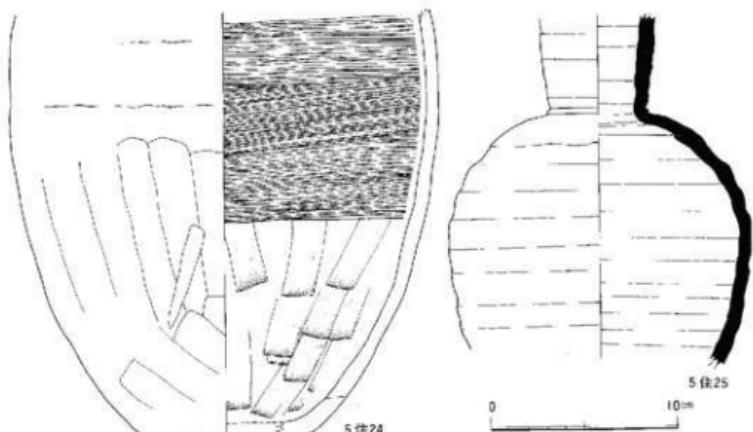


第15図 5号住居跡カマド

第1編 唐松A遺跡



第16図 5号住居跡出土土器



第17図 5号住居跡出土土器・須恵器

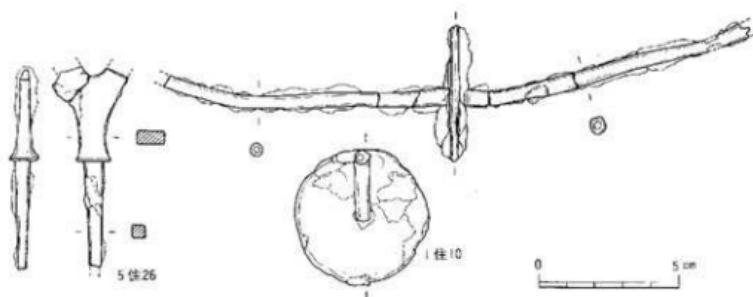
黒色処理は行われない。高台付杯はいずれも内面黒色処理を施しているもので、5住11の底部には菊花状のヘラ工具の圧痕がみられる。5住12・13の底部にも5住11ほど明確ではないがヘラ工具の圧痕がみられ、5住12はさらに高台貼り付け部の内側に粗い押しつけ痕がみられる。筒形土器はいずれも口縁部の破片のみで、完全な形を推定させるものはない。すべて積み上げ痕が観察され、特に内面において顕著である。調整は内外面ともナデ調整が行われているが、外面は特別な工具は使用していないと思われる。口径は最小で8.6cm、最大で12.0cmを測り、その範囲でばらつきがあり、ゆがみの大きいものが多い。5住23・24は長脛の壺で、5住23は胎土に粗い砂礫を多く含んでおり、調整は体部がナデ、口縁部に粗いヘラミガキが行われている。5住24は内面にロクロを利用したハケメ痕が特徴的である。5住25は須恵器の長頭壺で、体部と頭部の接合部分が観察される。

この他に堆積土中より有茎雁股式鉄鎌(5住26)が出土している。刃部・茎の一部は欠損しているが茎部は4cm程残存している。茎の断面は方形を呈している。

### ま と め

本住居跡の平面プランは長方形を呈し、建増あるいは重複等の痕跡はみられず、当初から長方形プランであった可能性が強い。またカマドを2基有することや、住居跡中央よりに炉跡的な施設を持つなど一般の住居跡に比べ特異な要素を抽出できる。出土した杯はすべてロクロを使用したもので、底部は糸切り痕を残すものと手持ちヘラケズリ調整を行うものがあり、他の住居跡より時代が下するものである。

(安田 稔)



第18図 生居跡出土鉄製品

第1表 唐松A遺跡住居跡出土上土器観察表(1)

遺物番号	器種	通数	加工	加工履歴	法盤(cm)	主な特徴
1住1 杯	1群 杯 C 種	6	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部。外面部は純部から段まではヨコナギ。それ以下はヘラケズリ。内面は全面 ヘラミガキが施されている。また内面は黒色処理されている。胎土は緻密であり、色調 は茶褐色を呈している。	14.2	
1住2 杯	1群 杯 D 種	6	口径 底延 器皿	外縁部。外面部は純部から段まではヨコナギ。底部はヘラケズリの後ナガが行われて いる。内面は全面ヘラミガキが施され黒色処理している。胎土は緻密であり、色調 は茶褐色を呈している。	19.6	
1住3 杯	1群 杯 C 種	6	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部。外面部は純部から段まではヨコナギ。その下はヘラケズリとナガが行われて いる。内面は全面ヘラミガキが施され黒色処理している。胎土は緻密であり、色調 は茶褐色を呈している。	17.4	
1住4 杯	1群 杯 C 種	6	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部。外面部は純部から段まではヨコナギ。底部はヘラケズリ。内面は全面ヘラ ミガキが施されている。また内面は黒色処理されている。胎土は緻密であり、色調 は茶褐色を呈している。	18.2	
1住5 杯	1群 杯 C 種	6	口径 底面直上 底延 器皿	外縁部。外面部は純部から段まではヨコナギ。底部はヘラケズリ。内面は全面ヘラ ミガキが行われている。また内面は黒色処理されている。胎土は緻密であり、色調 は茶褐色を呈している。	18.2	
1住6 杯	1群 杯 C 種	6	口径 底面直上 底延 器皿	外縁部。外面部は純部から段まではヨコナギ。底部はヘラケズリ。内面は全面ヘラ ミガキが行われている。また内面は黒色処理されている。胎土は緻密であり、色調 は茶褐色を呈している。	18.2	
1住7 瓢	1群 甕 B 種	6	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部。外面部はヨコナギ。体部外側は縦方向のヘラナナ。内面は横方向のヘラナナ が行わっている。胎土は緻密であり、色調は茶褐色を呈している。口縁部から体 部外側には一部に残る付着がみられる。	18.0 (12.5)	
1住8 瓢	1群 甕 A 種	6	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部。内面にはハケナ。内面にはヘナナが複数される。また外面上に乾土跡模様付 近部には木葉痕がみられる。胎土はやや粗く、色調は暗茶褐色を呈している。一部分 大を受けて黒色化している。	7.7 (2.5)	
1住9 瓢	1群 甕	6	口徑 底延 器皿	外縁部から胴部までヨコナギ。外面部はヨコナギ。胴部ヨコナギ。内面はヨコナギ。胎土は ヘラケズリがそれを行われている。内面はヨコナギ。胴部ヨコナギ。胎土はやや粗く、色調は暗茶褐色を呈している。	12.8 (16.8)	
2住1 杯	1群 杯 B 種	8	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部の一部を欠す。内面はヨコナギ。内面はヘラケズリの後ヘラミガキを行っている。また 内面は黒色処理している。胎土は緻密であり、色調は茶褐色を呈している。	15.5 4.4	
2住2 杯	1群 杯 A 種	8	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部の一部を欠す。内面はヨコナギ。その下はヘラケズリの後ヘラミガキを行っている。内面には ヘラミガキが施されている。内面は黒色処理している。胎土は緻密であり、色調は茶褐色を呈している。	13.8 3.7	
2住3 杯	1群 杯 B 種	8	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部。外面部は純部から横縫までヘラケズリ。口縁部はヨコナギ。内面は全 面ヘラミガキが行われている。胎土は緻密であり、色調は茶褐色を呈している。再 加工のためか内面の黒色は消失している。	14.0 (3.8)	
2住4 瓢	1群 甕 D 種	8	口徑 底面直上 底延 器皿	外縁部の一部を欠す。内面はヨコナギ。体部にはヘラナナがそれ施されている。底部には木 葉痕がみられる。胎土はやや粗く、色調は暗茶褐色を呈している。	16.7 7.4 12.6	

第2表 唐松A遺跡住居跡出土土器観察表(2)

遺物番号	鉢種	器形	種別	所上層位	法量(cm)	土 器 の 特 徴	
						外側	内側
2住5	壺	8	「群 窓 A類	床面直上 底逐 器高(20.0)	口徑 20.3 底径 18.2 器高 6.1 器高 22.7	底部下部を欠く。外面部縁部はハケメの後ヨコナナ。腹部はハメア。内面部縁部はハケメ。調査はヘラナナデが行われている。内外面に粘土被積み上げ板がみられる。粘土はやや粗く、色調は明黄褐色を呈する。	
2住6	窓	9	「群 窓 A類	口徑逐 器高	口徑 18.4 底径 28.7 器高 6.5	口縁部の一部を欠く。調査は、外面部縁部はハケメの後ヨコナナ。腹部はハメア。内面部縁部はハメア。腹部はヘラナナデが行われている。内面には粘土被積み上げ板が観察され、また底部には木漆痕が観察される。粘土はやや粗く、色調は明黄褐色を呈している。	
2住7	甕	9	「群 窓 A類	口徑逐 器高	口徑 18.4 底径 28.7 器高 6.5	口縁部の一部を欠く。調査は、外面部縁部はハケメの後ヨコナナ。腹部はハメア。内面部縁部はハメア。腹部はヘラナナデが行われている。内面には粘土被積み上げ板を呈している。	
3住1	壺	11	「群 窓 A類	床面直上 底逐 器高	口徑(18.4) 底径 6.1 器高 15.9	底部を欠く。調査は、外面部縁部はヨコナナ。腹部はハメア。内面部は上半 にハケメ、下半にハメアが施されている。底部には木漆痕が観察される。粘土はやや粗く、色調は明黄褐色を呈している。	
3住2	甕	11	「群 窓 A類	床面直上 底逐 器高(22.7)	口徑 19.6 底径逐 器高	底部を欠く。調査は外面部縁部はハメの後ヨコナナ。腹部はハメア。内面部は上半 部ヨコナナ、腹部はヘラナナデが行われている。内面には粘土被積み上げ板が観察され、また底部には木漆痕が観察される。粘土はやや粗く、色調は明黄褐色を呈している。	
3住3	壺	11	「群 窓 A類	床面直上 底逐 器高(23.0)	口徑 18.3 底径逐 器高	底部から底部にかけて底部を欠く。調査は、外面部縁部はハメの後ヨコナナ。腹部 はハケメ、内面部はヨコナナ。腹部はヘラナナデが行われている。内面には粘土被積み上げ 板が観察され、また底部には木漆痕が施されている。粘土はやや粗く、色調は明黄褐色を呈して いる。	
3住4	甕	11	「群 窓 A類	口徑逐 器高	口徑(6.8) 底径(7.0)	底部付近焼焦、底部はヘラナナデが有する。調査は、内外面ともヘラナナデが行 われている。内面は黒色処理されている。粘土はやや粗め、色調は中黄褐色を呈し ていて。	
4住1	杯	13	「群 窓 A類	床面直上 底逐 器高	口徑 17.7 底径逐 器高 5.1	形状品。外面部縁部はヨコナナ。段の下はヘラケスリの後ナナデが行われている。内面 は全周ヘラミガキを行、黒色処理している。粘土は緻密であり色調は暗色を呈し ていて。	
4住2	甕	13	「群 窓 A類	床面直上 底逐 器高	口徑 14.8 底径 4.9 器高 6.4	口縁部の一部を欠く。外面部縁部はヨコナナ。体部はナメア。腹部はヘラケスリがき れれている。内面は全周ヘラミガキを行、黒色処理している。外面部に粘土被積み上げ 板がみられる。粘土はやや粗く、色調は明黄褐色を呈している。	
4住3	甕	13	「群 窓 A類	床面直上 底逐 器高	口徑 12.2 底径 6.0 器高 5.0	体部から底部にかけて沿道遺。外面部縁部はヨコナナ。体部はナメア。腹部はヘラケ スリがきれられている。内面は全周ヘラミガキを行、黒色処理している。体部外側に は粘土被積み上げ板が観察される。粘土はやや粗く、色調は明黄褐色を呈している。	
4住4	甕	13	「群 窓 A類	床面直上 底逐 器高	口徑 12.2 底径 6.0 器高 5.0	口縁部から体部にかけて画面ともナナデ調査が行われている。底部には木漆痕が観察 される。粘土はやや粗く、色調は赤褐色を呈している。	
4住5	甕	13	「群 窓 B類	床面直上 底逐 器高	口徑(13.1) 底逐 器高(12.1)	沿道遺。外面部縁部はヨコナナ。体部はナメア。腹部はヘラナナデが施されている。粘土は粗 く、色調は灰褐色を呈している。	
4住6	甕	13	「群 窓 C類	床面直上 底逐 器高(15.2)	口徑逐 底逐 器高	体部の沿道遺。底部及び口縁部を欠く。外面部縁部はヨコナナ。体部はナメア。内 面はヘラナナデを施している。粘土はやや粗く、色調はくすんだ灰褐色を呈してい る。	
5住1	杯	16	「群 窓 AII類	P <sub>1</sub>	口徑(13.1) 底逐 器高 3.0	沿道遺。外面部縁部から体部にはロクロ底。体部下端に手持ちヘラケスリが施されて いる。底部は回転系切り(右回り)である。内面はヘラミガキを行、黒色処理して いる。斜面は微削りで施されている。色調は灰褐色を呈している。	
5住2	杯	16	「群 窓 AII類	P <sub>1</sub>	口徑 5.0 底逐 器高 3.4	沿道遺。外面部縁部から体部にはロクロ底。体部下端から底部にかけて手持 ちヘラケスリ。底部は回転系切り(右回り)が施されている。内面はヘラミガキを施 している。斜面は微削りで施されている。色調は灰褐色を呈している。	
5住3	杯	16	「群 窓 AII類	P <sub>1</sub>	口徑 5.0 底逐 器高 3.2	沿道遺。外面部縁部から体部にはロクロ底。体部下端は手持ちヘラケスリが 施されている。底部は微削りで施されている。内面は全周ヘラミガキであり黒 色処理している。斜面は微削りで施されている。色調は灰褐色を呈している。	
5住4	杯	16	「群 窓 AII類	P <sub>1</sub>	口徑 5.8 底逐 器高	沿道遺。外面部縁部から体部にはロクロ底。内面は手持ちヘラケスリが 施されている。色調は灰褐色を呈している。	
5住5	杯	16	C区複合 杯B1類	P <sub>1</sub>	口徑 14.8 底逐 器高(4.8)	沿道遺。外面部縁部から体部にはロクロ底。体部下端から底部は手持ちヘラケスリが 施されている。内面はヘラミガキが施され黒色処理している。粘土はやや粗く、色 調は灰褐色を呈している。	
5住6	杯	16	「群 窓 AII類	P <sub>1</sub>	口徑 5.7 底逐 器高(2.7)	沿道遺。外面部縁部にはロクロ底が施されている。内面にはヘラミガキを行、黒色 処理している。色調はくすんだ灰褐色を呈している。	
5住7	杯	16	「群 窓 B類	P <sub>1</sub>	口徑 14.1 底逐 器高(6.6)	沿道遺。調査は、外面部縁部から体部にはロクロ底。体部下端から底部は手持 ちヘラケスリが行われている。内面は全周ヘラミガキが施されている。また黒色処理し ていて。粘土はやや粗く、色調は明黄褐色を呈している。	
					口徑 3.8		

第3表 唐松A遺跡住居跡出土上部器観察表(3)

遺物番号	部地	器種	地質	出土層位	法面(cm)	上部の特徴	
5住8	林	16	日群	P <sub>1</sub> P-1	口徑 底延 高さ	14.0 5.5 5.1	外側有。外側口縁部から体部はクロロ灰、体部下端及び底部は手待ちへラケズリを行っている。内面はクロロ灰もみられるが、付は金目へラミガキである。また黒色処理されている。底上は黄褐色であり、色調はにい、黄褐色を呈している。
5住9	林	16	日群	P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	5.6 (1.8)	底部及び体部の底残存。外側体部はクロロ灰、体部下端は手待ちへラケズリである。底部は間接系切りの状態的にヘラケズリを行っている。底土は磁器であり、色調は黄褐色を呈している。再加熱されているようである。
5住10	林	16	日群	P <sub>1</sub> P-1	口徑 底延 高さ	12.6 5.8 4.1	完形品。外側口縁部から体部はクロロ灰、体部下端及び底部は手待ちへラケズリである。内面はヘラミガキが行われ過色處理している。底土は磁器であり、色調は黄褐色を呈している。口縁部から底部にかけて一部黒色化している。
5住11	高台 付林	16	日群	P <sub>1</sub> P-1	口徑 底延 高さ	2.6 (2.6)	底部から体部下端にかけて残存。高台は付高台である。杯形底部は外外面ともしないにヘラミガキを行った。また内面は黒色処理している。外側底部(付高台の内側)には花崗石灰へラテ状による凹痕がみられる。底土は磁器であり、外側色調は暗褐色を呈している。
5住12	高台 付林	16	日群	P <sub>1</sub> P-1	口徑 底延 高さ	2.7 (2.7)	杯形の体部下端から底部にかけて残存。高台は付高台であるが落失している。底部は外側はクロロ灰、内面はヘラミガキの後黒色処理を行っている。外側底部に高台はつりつけの際の凹みを明瞭にこしらえている。底土は磁器であり色調は灰青色を呈している。
5住13	高台 付林	16	日群	P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	(3.3)	杯形の底部と高台残存。高台は付高台である。杯形底部はクロロ灰が底部であり、内面はヘラミガキが行われ過色處理している。高台は外外面ともナゲが行われている。高台の付け部分はナゲの先でおさえつけたような痕がみられる。底土は磁器であり外側色調は黄褐色を呈している。
5住14	高台 付林	16	日群	P <sub>1</sub> 高台杯合組	口徑 底延 高さ	(16.6) (5.7)	杯形部は残存。高台は付高台。杯形部外側はクロロ灰、内面は口縁部から体部はヘラミガキ、体部から底部はヘラナダが施され、また黒色処理が行われている。高台は付高台である。高台の内側のため底部が開口部に観察される。底部表面はナゲが行われている。底土は粗粒であり、外側色調はにい、黄褐色を呈している。
5住15	筒形 土器	16		P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	(9.6) (4.3)	筒形部は残存。作りは粗粒であり、底土は粗粒で、色調は暗褐色を呈している。
5住16	筒形 土器	16		P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	(11.0) (5.2)	筒形部は残存。内面と底土とも指捺によるナゲが行われている。また粘土結構み上げ痕が観察できる。底土は粗粒であるが、作りは粗粒である。色調は明黄褐色を呈している。
5住17	筒形 土器	16		P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	(10.4) (4.7)	口縁部は残存。外側は磨擦のため底部は不明瞭であるが、内面口縁部には指捺によるナゲがみられる。外側面とも粘土結構み上げ痕が底土である。底土は磁器であり、色調は黄褐色を呈している。
5住18	筒形 土器	16		P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	(8.6) (2.9)	筒形部は残存。内面は底土の指捺によるナゲである。内面と底土とも粘土結構み上げ痕が底土である。色調は明黄褐色を呈している。
5住19	筒形 土器	16		P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	(12.0) (5.5)	口縁部は残存。外側は磨擦が著しいため調整板は不明瞭である。内面は底土によるナゲが行われている。内外面ともに粘土結構み上げ痕が底土にみられる。底土は粗粒である。色調は明黄褐色を呈している。
5住20	筒形 土器	16		P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	8.8 (5.5)	口縁部から体部にかけて見残存。内外面に粘土結構み上げ痕が明瞭に観察される。内面に指捺によるナゲがみられる。底土はやや粗く、色調は暗褐色を呈している。
5住21	筒形 土器	16		P <sub>1</sub>	口徑 底延 高さ	(10.6) (3.0)	口縁部は残存。内面は底土によるナゲが行なわれると思われるナゲが施されている。内外面ともに粘土結構み上げ痕が底土である。底土は粗粒である。色調は明黄褐色を呈している。
5住22	筒形 土器	16	C区-2 P <sub>1</sub> 埋込内	口徑 底延 高さ	(9.0) (8.4)	口縁部は残存。やや粘土内面を呈している。内外面とも磨擦が著しいため、調整板は不明瞭であるが、内面に指捺によるナゲが底土によるナゲが底土である。内外面とも粘土結構み上げ痕が底土である。底土は粗粒であり、色調は明黄褐色を呈している。	
5住23	壺	16	日群	P <sub>1</sub> 壺 A 領	口徑 底延 高さ	(17.8) (9.8)	口縁部から体部の上部の一部後存。調整は外側口縁部はヘラケズリの後ヘラミガキ。体部はヘラケズリが行なわれている。内面は口縁部コナゲの後ヘラミガキ。体部はヘラナダが行なわれている。底土は粗粒、色調は暗褐色を呈している。
5住24	壺	17	日群	P <sub>1</sub> 壺 B 領	口徑 底延 高さ	(8.8) (22.4)	体部から底部にかけて見残存。調整は外側部上半にはクロロ灰、下半にはヘラケズリが行なわれている。内面は体部上半が凹部を利用したハケメ底。体部下半はヘラナダがそれぞれ行なわれている。底土はやや粗く、色調は暗褐色を呈している。

(注) ( ) は現状値

## 第2節 掘立柱建物跡

### 1号建物跡 S B01

#### 遺構 (第19図、図版14)

第II調査区の中央よりやや東側で検出されたもので、ここでは柱痕が1直線上に並ぶことから1棟と考えられるが、P<sub>1</sub>・P<sub>8</sub>が他の柱穴とやや離れていることから、調査区北側にP<sub>1</sub>・P<sub>8</sub>を含めた別の建物跡を想定することも可能である。

平面プランを確認したのはL-IIの黒褐色土中であったが、他の調査区の壁面にかかった柱穴をみると、表土直下から断面が観察されるものがあることから、かなり上層より掘り込まれたものと考えられる。

掘形は、一辺25~30cm程の隅丸方形に近いものと円形のものがみられ、いずれも壁面のしまりは弱く、埋土も黒褐色土に黄褐色ロームブロックを含む土が、やはりしまりの弱い状態である。柱痕はすべての柱穴で確認され、10~15cmの円形である。深さは検出時の削平の度合によって異なり、深いもので60cm、浅いもので30cmを測るが、底面のレベルはほぼ同一で、検出状況を考慮すれば1m弱の深さを持つ柱穴であったと思われる。

検出された柱穴の配置は南北に3間、東西に1間で、それぞれの間隔は東側柱列北から2.9+2.2+1.9m、西側柱列北から2.9+2.05+1.9m、東側柱列と西側柱列の間隔は4.0mで、西側柱列の柱痕を通る軸線の傾きはN37°Eである。

#### まとめ

本建物跡は3間×1間の平面形が長方形を呈す建物跡で、東側柱列と西側柱列の間隔はほぼ同じであるといってよい。柱穴の規模からは堅固な上屋構造は想定できず、遺物の出土をみないことから時期は不明である。

(安田 徹)

### 2号建物跡 S B02

#### 遺構 (第20図、図版15)

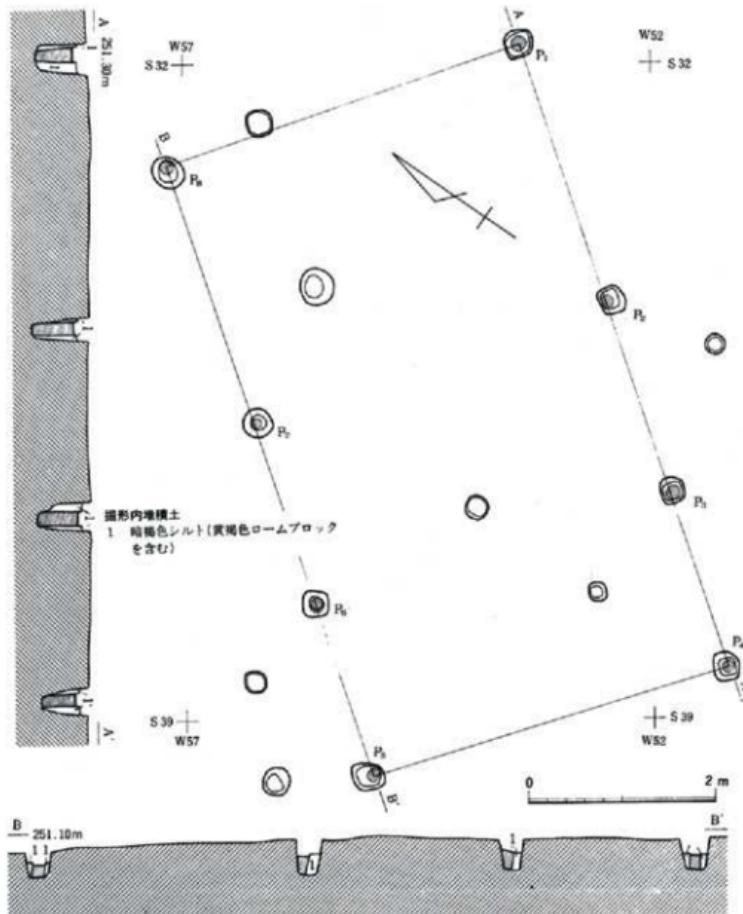
第II調査区の東側で検出されたもので東西2間、南北はP<sub>1</sub>とP<sub>7</sub>の間に柱穴がみられないことから調査区外の北側に延びるものと思われ3間以上が考えられる。検出面は地山ローム面であるが、これは調査区の東側は地山ロームと表土の間にはL-IIの黒褐色土を挟まないためで、掘り込み面が1号建物跡より下層であるというわけではない。

掘形は一辺20cm程の隅丸方形を呈しているが、P<sub>1</sub>だけは径15cmの円形で他に比べひとまわり小さくなっている。埋土は黒褐色土一層に若干の黄褐色ロームブロックが混じる程度で、全体的

第1編 唐松A道路

にしまりが弱く柱痕を識別することはできなかった。深さは40cm程ではほぼ一定であるが、P<sub>1</sub>だけは20cmと浅くなっている。

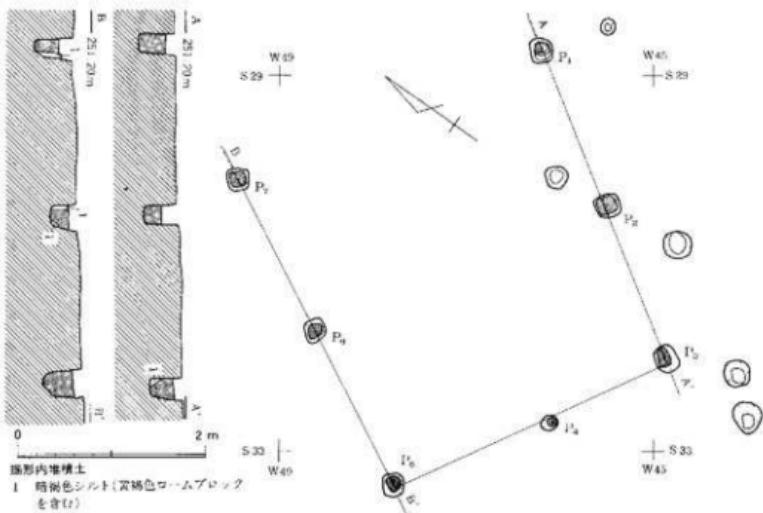
各柱穴の間隔はややばらつきがあるが、東側柱列北から……+1.8+1.75m、南側柱列東から1.4+1.8m、西側柱列南から1.85+1.85+……で、西側柱列の柱穴の中心を通る軸線の傾きはN28°Eを示している。



第19図 1号建物跡

## ま と め

本建物跡は調査区外に延びる可能性のある建物跡で、柱穴の配置もやや台形状を呈している。柱穴からは1号建物跡同様簡単な上屋構造しか想定できず、また、建物跡に伴うと思われる遺物も出土していない。(安田 稔)



第20図 2号建物跡

## 第3節 濠と土塁

今回の調査で検出した濠跡は2条である。当初の地形観察からは、唐松館の郭を成すと思われる段丘上の微高地より一段低く外側を取りまく細長い水田部に濠がめぐるものと想定して調査を開始した。調査第I区の表土を除去したところで予想した東側濠跡の他にもう1条、調査区西壁直下より東へ延びる濠跡を検出した。調査第II区では、南北に平行して走る2条の濠跡を検出し、本唐松館は一部二重濠構造をなすことが判明した。調査区設定の関係より、検出し得た濠跡は東側および西側の一部のみで、本館に伴う濠の全貌を明らかにすることはできなかったが、現地での地形観察を綿密に行うとともにトレンチ掘りにより確認しながら調査をすすめた。外側をめぐる濠により囲まれる平場は東西約100m、南北約80mの不正長方形を呈し、本館の基本的な縄張りを示すものと思われる。外側をめぐる濠の内側にそって土塁を検出した。内側の濠のさらに内

側に土星が染かれた様子は観察されなかった。

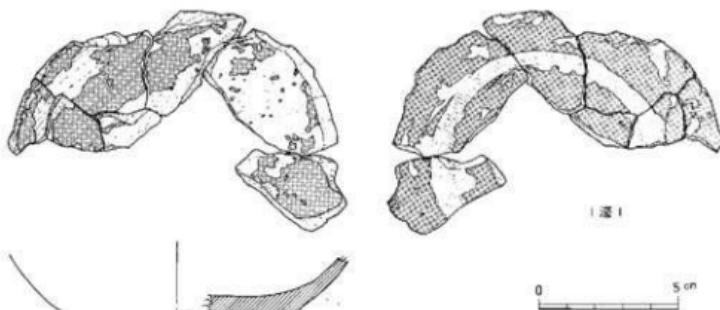
### 1. 漆 (第21~23図、図版3・4・17)

調査区I区・II区で漆の東側および西側の一部を検出した。東側漆の延長部および内漆の北西コーナーについては、トレントを設定して調査し確認した。以下にその結果を述べる。

**1号漆** 外漆を1号漆とした。東側では、上端幅約11m、下端幅4~5m、検出面よりの深さ



第21図 1~2号漆セクション (西側)



第22図 1号漾跡出土木製椀

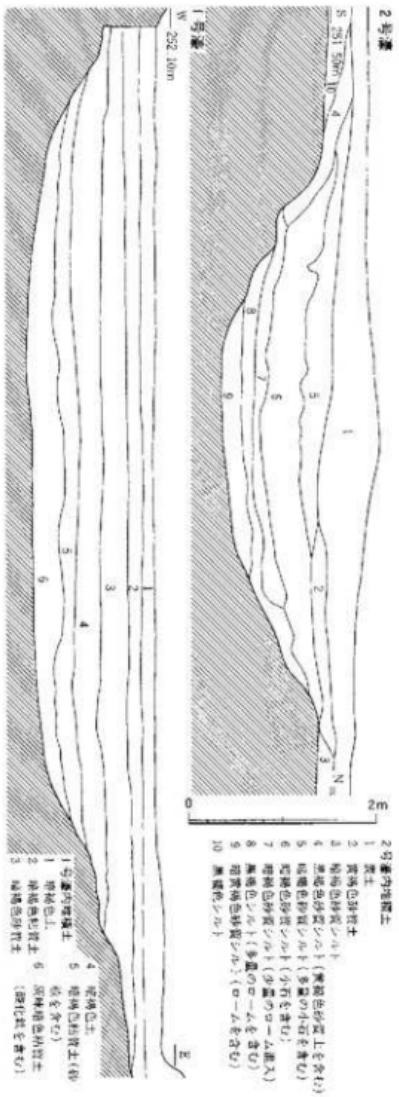
1.2~1.8mを測る。断面形は、平坦な底面より壁が急峻に立ち上がる、いわゆる諸葉研形を呈する。底面は南から北に向かってゆるやかに傾斜し、東北コーナーから北側にかけて最も低くなる。このあたりでは現在の水田耕作面よりの深さがあまりなく、用水路などによって相当搅乱を受けた底面は明確でない。北側では漆外側の上端を確認することはできなかった。現況地形の上でも南から北にかけてゆるく傾斜している関係から、北側漆の上端を構成する部位では相当削平され北へせり出して現在に至っている様子が観察された。

西側では規模が小さくなり、上端幅約4m、下端幅15~25m、深さは約0.7mである。内側ですぐに土壌の基部に取り付き、土壌をはさんで2号漆が並行して走る。断面形は諸葉研、底面は東側と同様北に行くにつれ下がるようである。

堆積した土層は東側では非常に整然としたものが観察された。上層は水田耕作土であるが、中位に砂質土層を約50cmはさんで下層は酸化鉄を含むグライ層が約50cm堆積している。各層はほぼ水平に順層をしており、埋没過程のかなり長期にわたって水がためられていたようである。西側部ではやや異なって、表土に近い暗褐色シルトを主体に地山・黄褐色土が混りながら分層される。しかし、下層では同様のグライ化した粘質土がみられ、水漆であることがうかがわれる。

北側で一部漆の外へかけて拡張して深掘りを試みた。水が湧出して充分な調査は行えなかつたが、表土・現水田耕作面の約20cm下に旧耕作面があらわれ、さらに20cm程掘り込むと、川原石と思われる丸味を帯びた大小の礫層を検出した。地形観察によれば、北側一帯は谷田川の氾濫原であり、本館の時期に川は迫って流れていた可能性がある。

遺物は東側漆底のグライ化した土層より木製椀を出土した(第22図)。遺存状態は非常に悪く、底部付近%程度であるが図上復元した。高台付の漆椀で、内外黒漆により地肌をつくった後内外朱塗りをして仕上げている。推定口径12cm、底径8.3cm、現存高2cmを測る。他に土師器、陶磁器の細片が少量出土しているが、器種・器形を推定するにはいたらなかった。



### 第23図 1・2号凍セクション（東側）

**2号濠** 1号濠の内側に沿って西側から北側に走るL字形の濠である。西側では前述のように1号濠に近接して二重濠の様相を呈する。北側ではやや距離をもって18m程離れる。上端幅は約6m、下端幅約4m、深さは0.8~1mを測る。I区で東端を検出しているが、トレンチより確認した北西コーナーからの長さはおよそ80mである。西側の濠南端については宅地にかかるて確認することができず、1号濠につながるかどうかは不明である。堆積土は1号濠とほぼ同様で、上層は暗褐色シルトを主に堆積し、下層はロームの小ブロックを含む層、最下層は粘質のグライ化した土層が観察された。

遺物も1号濠と同様、土師器の細片を少數と陶器片を出土している。陶器は13~14世紀のものと考えられるものが数点あるが、図化し得たものではなく、器形等を推定するのは困難である。

2. 土 界

1号漾(外漾)の内側に沿って土壠を検出した。一部削平を受け欠失しているが、調査区壁面の土層観察によれば、ほぼ全城に巡らされていたものと思われる。基部は広いところで幅約5m、Ⅱ区の漾が迫ったところでは3~4mである。残存する高さは0.7~1mを測るが、上部は耕作等により相当に削平・擾乱を受けており、構築時の高さや形状を知ることはできない。土壠の盛土は黒褐色シルトを主とし、部分により黄褐色土粒を含む。一般に土壠構築時の盛土は漾の土を上げて築かれることが知られ

ているが、この場合表層の黒色土上に掘り上げた漆の土をさらに盛り上げたものとすれば、その土量より現存高の2~3倍の高さに築かれたものかとも考えられるが、確証をなす資料は得られなかった。土壘基底部に崩壊を防ぐ何らの施設も検出されなかつたが、第4節で述べる土坑中B<sub>2</sub>類に分類した一群の土坑は、土壘の内側立ち上がり部分に土壘を巡って並置しており関連性が想定される。盛土内より土師器・須恵器片が若干出土している。

(西間木薫)

#### 第4節 土 坑 (第24~31図、図版7・16・22)

今回の2次にわたる調査で総計41基の土坑を検出した。調査区第I区で20基、II区で3基、III区で18基である。分布状況は構造配置図に示した。これらの土坑がどのように機能し、また、いつの時代に構築されたものであるかは明確でない。しかし、規模や形態からいくつかに類別されることから、まず全体について概観した後、特徴的ないくつかの土坑について個々に述べることにする。なお土坑番号は調査区第I区からの通し番号を付し、全土坑についての形態・計測値などは表にまとめた。

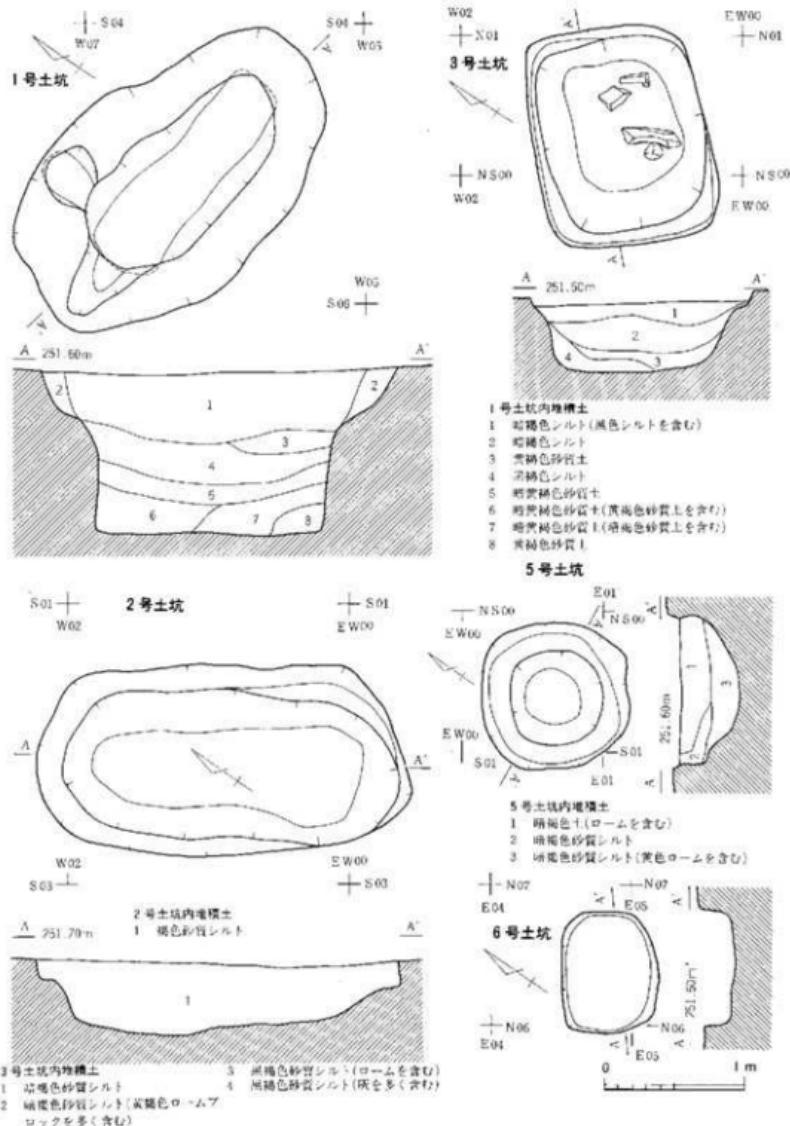
平面形が梢円または隅丸の長方形、横断面がロート状を呈し、比較的掘り込みの深い一群の土坑がある。底面ではほぼ隅丸長方形を呈し、短軸に対し長軸は3~4倍と長い。堆積土は下層から順次堆積した様子がうかがわれる。壁面が崩壊しながら埋没したようである。底部に小ピットを有するものが4基、少數ながら繩文土器片を伴出している。総計10基で、このいわゆる陥入穴状の土坑をA<sub>1</sub>類とした。

平面形が円形、断面がフラスコ状を呈す土坑は2基ある。底面は平坦で、1基は削平を受けて浅くなっているが、壁面を抉ってかなり深く掘り込まれている。堆積状況は自然で、A<sub>1</sub>類に近似している。形態的特徴から貯蔵穴かと思われるが確証はない。A<sub>2</sub>類とした。

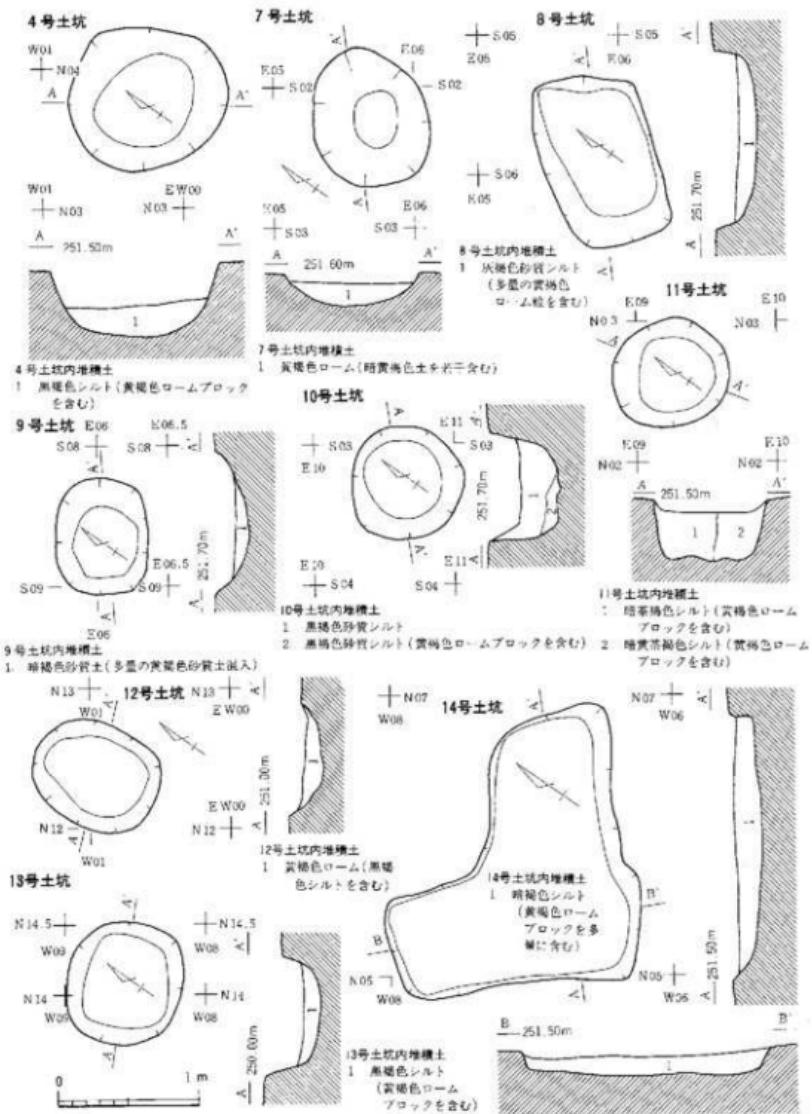
III区に集中して検出したやや大型の土坑群は、必ずしも一定したプランはもないが、形状や埋土により、ほぼ同時期に同じ目的をもって構築されたものであろうと推定した。底面はほぼ平坦で、断面は浅い筒形を呈する。堆積土はそのほとんどが一層で、黄褐色ロームブロックを多く含むシルトで埋められており、人為堆積と考えられる。壁面は荒れておらず、構築後時間をおかず埋めもどされた可能性がある。7基あり、B<sub>1</sub>類とした。

B<sub>2</sub>類はB<sub>1</sub>類に近似した特徴をもつ土坑群であるが、B<sub>1</sub>類に比べずっと小型である。平面形は、円形あるいは方形を呈する。掘形は浅く、深いものでも52cm、ほとんどは20~30cmである。土壘内側に不整であるが並んだ状態で検出した。堆積土はB<sub>1</sub>類と同様のロームブロックと暗褐色シルトの混合状態で、ほとんどの土坑が単一層である。性格は不明であるがB<sub>1</sub>類と同時期のものと思われる。

第1編 唐松A道路

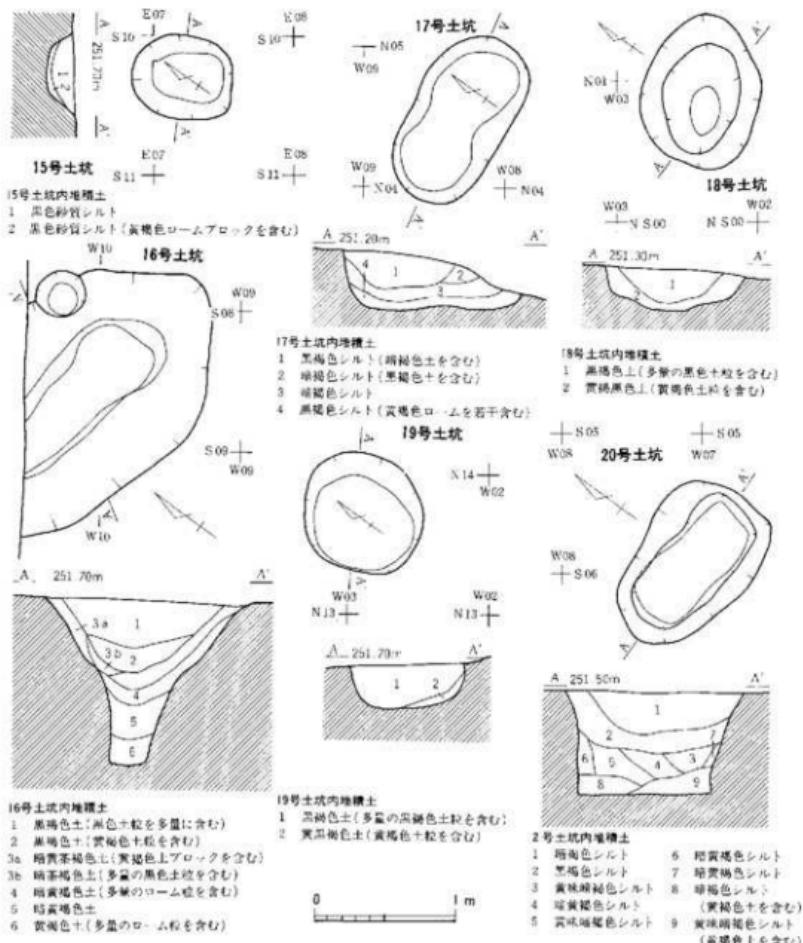


第24図 1～3・5・6号土坑



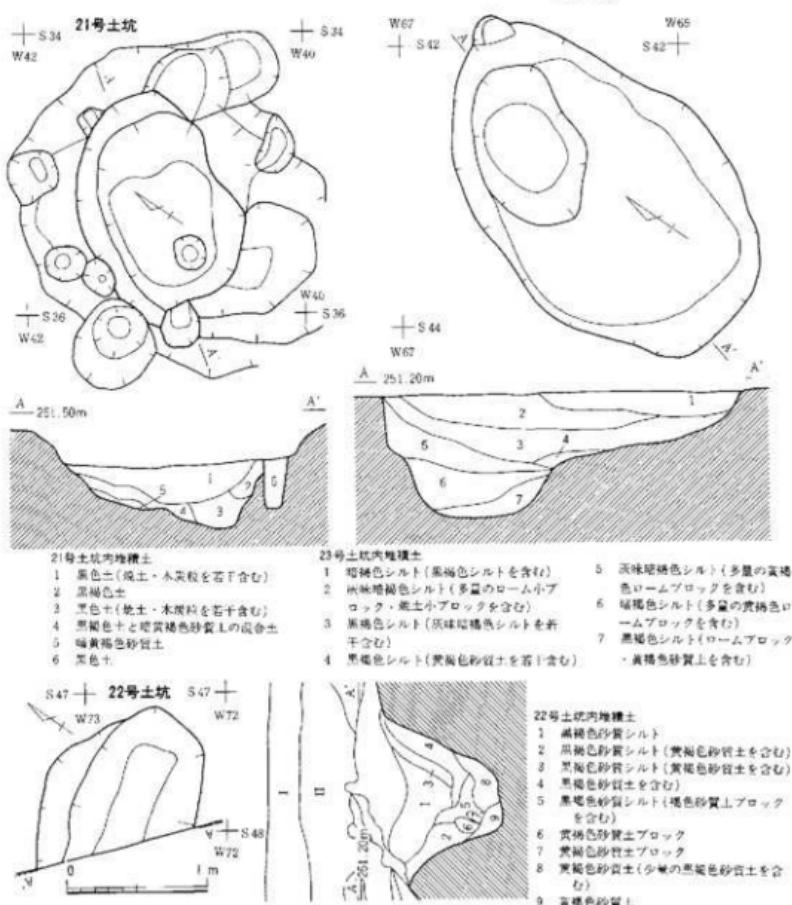
第25図 4・7~14号土坑

第1編 唐松A道路



第26図 15～20号土坑

いずれにも分類することのできなかった土坑が11基ある。遺構を切る擾乱状の土坑および、堆積土等から比較的新しいと思われるものをD類とし、比較的古いと目されるものをC類とした。その中でも、10号土坑は埋土中に塩化ビニールが混り、ごく最近のものであろうし、21号および39～41号はかなり乱雑な掘り込みで明確な目的をもって構築されたものとは考えられない。17号土坑は内濠に切られて検出されており、残存する形状より陥し穴状土坑に含まれる可能性がある



第27図 21~23号土坑

が、確証はなくC類に入れておく。15・19号土坑はその位置やプランからすればB<sub>2</sub>類に近似する要素を有している。所属時期もほぼ同じと思われるが、堆積土の状態からは同類とするには至らずC類に含めた。18号および11・23号については不明な点が多いが、覆土より新旧を分けることが可能である。

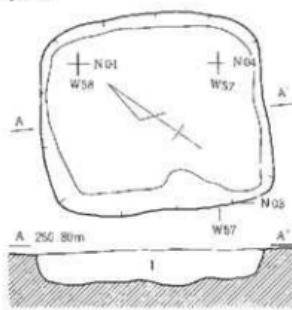
次に各類の代表的土坑について述べる。

第1編 唐松A道路



第28図 24~26号土坑

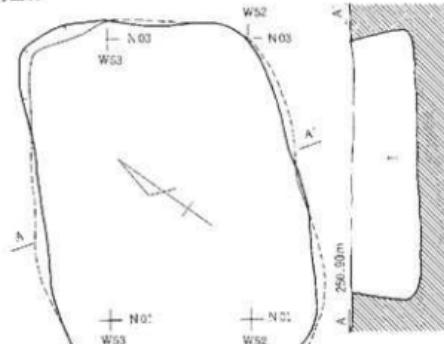
27号土坑



27号土坑内埋積土

- 1 黒褐色砂質シルト(黄褐色土と黒褐色土がブロック状に混入)

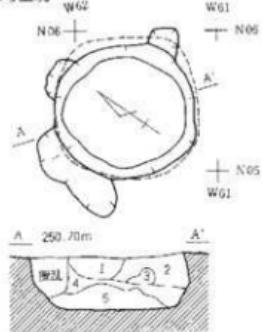
28号土坑



28号土坑内埋積土

- 1 黒褐色砂質シルト(黒褐色シルトブロック・黒褐色ロームブロック混入)

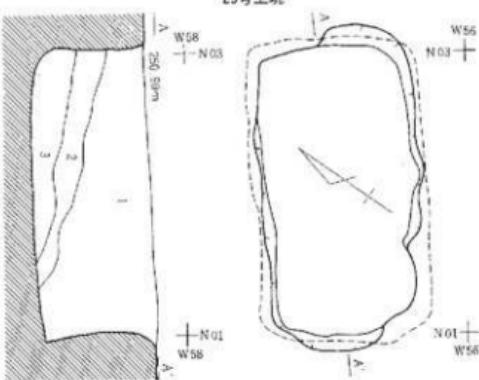
30号土坑



30号土坑内埋積土

- 1 黒褐色砂質シルト
- 2 黒褐色砂質シルト
- 3 黒褐色砂質シルト(黄褐色砂質土をブロック状に含む)
- 4 黄褐色砂質土(赤土をブロック状に少量含む)
- 5 黃褐色砂質土(黒褐色・黄土の混土上)

29号土坑



29号土坑内埋積土

- 1 黄褐色砂質シルト(黄褐色砂質シルトをブロック状に少量含む)
- 2 暗茶褐色砂質シルト(黄褐色砂質シルトをブロック状に多量含む)
- 3 黄褐色砂質シルト(暗茶褐色砂質シルトを混入)

31号土坑内埋積土

- 1 黄褐色シルト

32号土坑内埋積土

- 2 明茶褐色シルト

33号土坑内埋積土

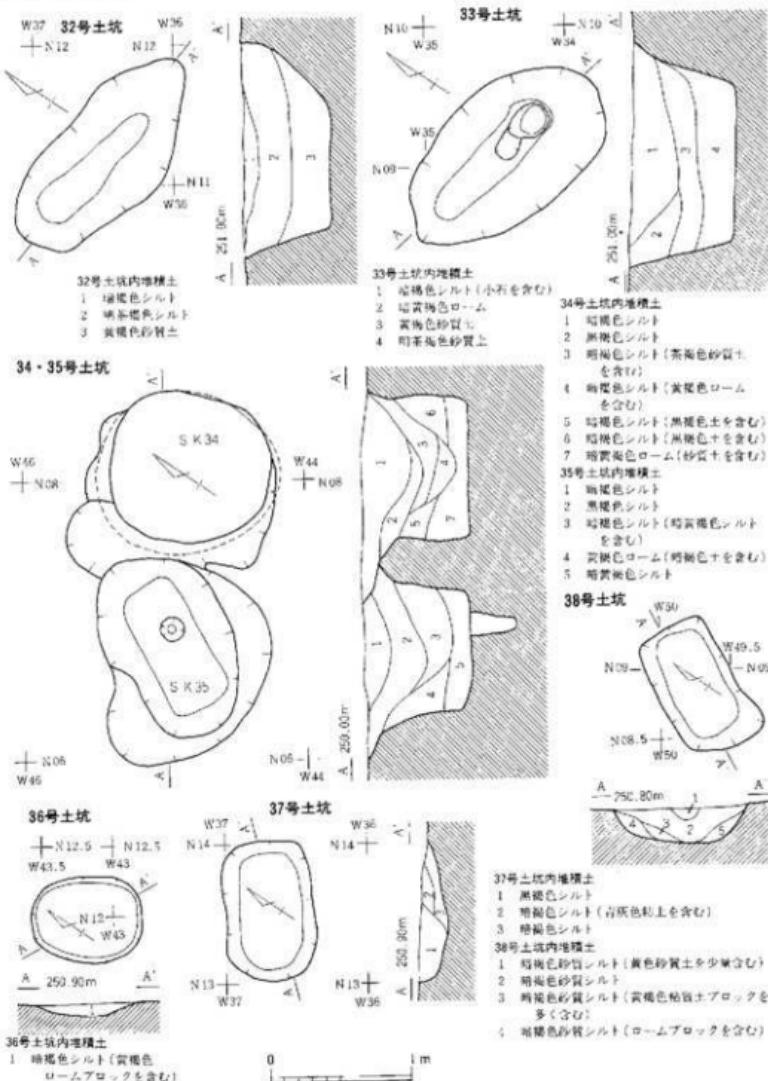
- 3 明茶褐色シルト(小石を多く含む)

34号土坑内埋積土

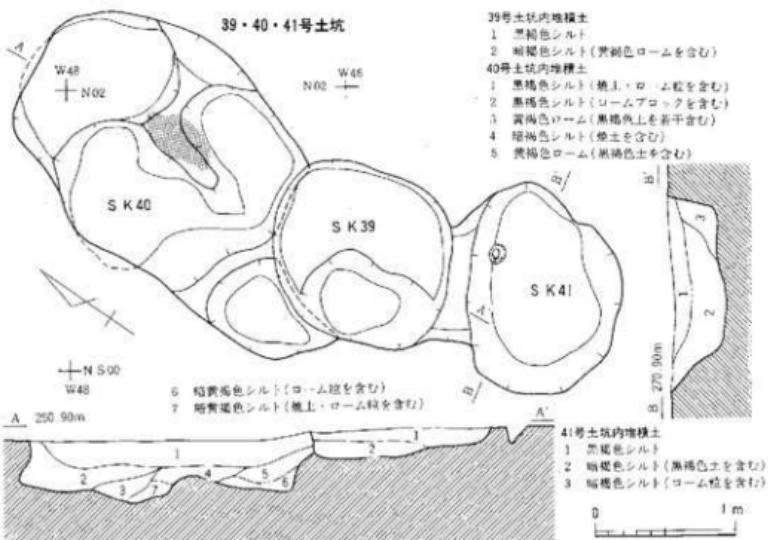
- 4 黄褐色砂質土

第29図 27~31号土坑

第1編 唐松A道路



第30図 32~38号土坑



第31図 39~41号土坑

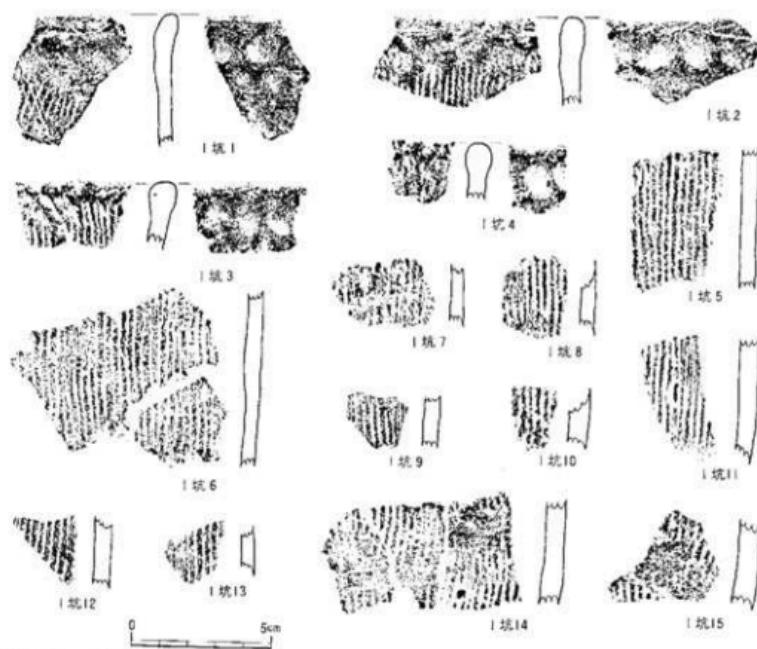
## 1号土坑 SK 01 (第24・32図、図版7・23)

H-6・7グリッドで検出した土坑である。壁上方ではかなり崩壊が著しく、断面形は上広がりのロート形を呈する。底面は平坦でピットではなく隅丸方形を呈し、長軸は短軸の3.6倍と長い。堆積土は8層に分層される。上層は暗褐色シルトを主とする土層であるが、下層では地山土との混合状態、最下層では地山・黄褐色砂質土が落ち込んで堆積している。隣接して、同類のSK 16・20がある。ことにSK 16は長軸方向が同じではほぼ東西に並ぶ。西側は調査区域外となるため、明言はできないが、数基のグループを成す陥入穴群の東端部になるものと思われる。

覆土中より縄文土器片を20片程出土した。撲糸文を施した細片で草創期のものと思われる。

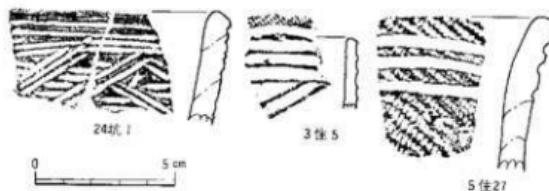
## 3号土坑 SK 03 (第24図、図版7)

第1調査区の2号濠のすぐ東側で検出した土坑である。すぐ南側に同類のSK 02が近接する。プランは隅丸方形、底面は平坦で割石が投げ込まれた状態で検出した。深さ56cm、堆積土は4層に分層されるが、暗褐色シルトに黄褐色砂質土の混入の程度で分けている。4層には、灰が若干含まれている。底面および壁面の遺存状態が良く、人為的に埋めもどされた可能性がある。



第32図 1号土坑出土燃糸文土器

遺物は青磁片が細片で1点と瀬戸系の灰釉陶器片3点が出土している。14~15世紀の所産と考えられ、本坑の時期とする。形態的特徴より墓坑と考えB<sub>2</sub>類としたが、確証はない。



第33図 造構内出土縞文土器

## 7号土坑 SK07 (第25図)

館を巡る外濠の内側に沿って土塁が築かれているが、館東側土塁のさらに西側の根元に並んで検出した土坑群のうちの1つである。検出面は地山黄褐色砂質土上面であるが、本坑を含めSK06・08・09がほぼ直線上に並置しており当初柱列を想定して掘り込んだ。柱痕は観察されず、掘り込みも浅く柱穴としての機能を推定させるものは検出しなかった。堆積土は1層のみで黄褐色

砂質土に表土の暗褐色シルトが含まれる。底部および壁面は比較的しっかりしており、掘り込んだ後ほとんど間を置かず、埋めもどされた可能性が強い。遺物は伴出せず確証はないが、土器に伴う何らかの施設であろうか。

#### 28号土坑 SK28 (第29図、図版22)

第Ⅲ調査区で検出したB<sub>i</sub>類の土坑である。同類のSK26・27・29が近接して位置する。この類最大のもので、約2.6m×1.8mの隅丸方形を呈する。底部もほぼ同形で、平箱様の形状をなす。堆積土は単一層で、暗褐色シルトに黄褐色土がブロックで混入しており、人為的に埋めもどされたものと考えられる。伴出した土器片は、本坑に伴うというよりは、近くにSI05もあり、埋土中に混入したものと考えるのが自然であろう。

#### 34号土坑 SK34 (第30図、図版22)

Ⅲ区、SK26のすぐ東側にSK35と並んだ状態で検出した土坑である。断面は中位から底部にかけてやや広がるフラスコ状の円筒形を呈し、検出面より底部まで78cmと深い。底面は平坦で、堆積土は下層から順次積み上がり、いわゆるレンズ状を呈する。土層は7層に分けられ、暗褐色シルトを主とするが、下層には壁崩壊土と思われる黄褐色砂質土が多く混っており、自然堆積と思われる。並置するSK35と近似した土層を示しており、ごく近接したしかもSK35よりはやや新しい時期のものであろうと考える。遺物を伴出せず形態的特徴より貯蔵穴の機能を果たした土坑であろうと推定する。B<sub>2</sub>類とした。

(西岡木薫)

以下、41基の上坑の分類を整理すれば下のようになる。

**A<sub>1</sub>類** 陥し穴状土坑 時期は、縄文時代全般にわたると考えられる。

土坑番号 01・16・20・22・24・25・31・32・33・35

**A<sub>2</sub>類** 貯蔵穴の機能を有する土坑 時期は、A<sub>1</sub>類に近い時代と考えられる。

土坑番号 30・34

**B<sub>1</sub>類** 墓坑と考えられる土坑 館との関係で、中世以降と思われる。

土坑番号 02・03・14・26・27・28・29

**B<sub>2</sub>類** 性格は不明であるが館に伴うであろう土坑 時期は、B<sub>1</sub>類と同じである。

土坑番号 04・05・06・07・08・09・12・13・36・37・38

**C類** 性格不明土坑 比較的古い時期と考えられる土坑である。

土坑番号 15・17・18・19

**D類** 性格不明土坑 比較的新しいと考えられる土坑である。

土坑番号 10・11・21・23・39・40・41

第4表 土坑一観表

土坑 番号	位 置	類型	平盤形	断面形	規 規		模 (cm)	出 土 遺 物	堆積上、その他の 状況
					上端(cm)	下端(cm)			
1	H-7	A <sub>1</sub>	楕円	ロート	255×158	167×47	116	縄文土器片	自然状態
2	G-6	B <sub>1</sub>	楕円	鍋	262×136	192×56	49		人為状態
3	G-5	B <sub>1</sub>	方形	鍋	160×125	95×72	56	中世陶器片	人為*
4	G-5	B <sub>2</sub>	円形	半円	112×102	70×67	52		人為*
5	F-6	B <sub>2</sub>	円形	半円	110×110	42×40	50		人為*
6	F-4	B <sub>2</sub>	方形	鍋	87×69	81×61	24		人為*
7	E-6	B <sub>2</sub>	椭円	半円	102×83	40×33	22		人為*
8	E-7	B <sub>2</sub>	方形	鍋	125×80	95×62	30		人為*
9	E-7	B <sub>2</sub>	楕円	半円	83×65	61×46	24		人為*
10	D-6	D	円	筒	81×80	57×55	49	土器器片	
11	S-5	D	円	筒	84×80	56×56	44		
12	G-3	B <sub>2</sub>	楕円	半円	92×73	73×52	23		人為*
13	H-3	B <sub>2</sub>	楕円	鍋	90×82	65×61	32		人為*
14	H-4	B <sub>1</sub>	不整	皿	193×180	180×165	23		人為*
15	E-8	C	楕円	鍋	71×60	50×37	20		
16	H-7	A <sub>1</sub>	楕円	ロート	不明×145	不明×40	120		自然*
17	H-5	C	楕円	筒	127×67	111×49	43		自然* 深に切られる
18	G-5	C	楕円	鍋	110×85	37×24	32		
19	G-3	C	円	筒	85×84	72×66	31		
20	H-6	A <sub>1</sub>	楕円	筒	125×82	92×40	75		自然*
21	O-13	D	不整	不整	230×190?	104×75?	72?		複数着しい
22	U-15	A <sub>1</sub>	楕円	ロート	不明×112	不明×29	86	縄文土器片	自然堆積 深に切られる
23	T-14	D	楕円	不整	262×173	220×143	85		
24	S-4	A <sub>1</sub>	楕円	ロート	286×135	215×46	152	縄文土器片	自然* 小ピット3個
25	Q-4	A <sub>1</sub>	長方形	筒	160×93	134×43	73		自然*
26	P-4	B <sub>1</sub>	方形	筒	243×197	242×188	34		人為* S1.05を切る
27	R-5	B <sub>1</sub>	方形	筒	162×142	148×118	25		人為*
28	Q-5	B <sub>1</sub>	方形	7ラスコ	261×185	256×197	50	土器器片	人為*
29	R-5	B <sub>1</sub>	長方形	7ラスコ	219×168	207×117	84	中世陶器片	人為*
30	S-4	A <sub>2</sub>	円	鍋	102×95	86×78	40		自然* 一部漫乱
31	N-3	A <sub>1</sub>	楕円	鍋	150×91	91×25	100		自然*
32	N-3	A <sub>1</sub>	楕円	ロート	166×66	105×25	123		自然*
33	M-4	A <sub>1</sub>	楕円	ロート	166×94	110×30	151	縄文土器片・フレイク	自然*
34	O-4	A <sub>2</sub>	円	7ラスコ	114×108	139×104	78		自然*
35	O-4	A <sub>1</sub>	楕円	筒	144×119	99×45	75		自然* 小ピット1個
36	O-3	B <sub>2</sub>	楕円	皿	76×64	70×53	10		人為*
37	N-3	B <sub>2</sub>	楕円	皿	100×63	82×46	20		人為*
38	P-4	B <sub>2</sub>	方形	鍋	95×55	77×38	26		
39	P-5	D	円	不整	135×121	121×115	27	須恵器・土器器片	S1.05を切る
40	P-5	D	不整	不整	207×165	198×140	21		*
41	O-5	D	楕円	鍋	138×110	106×73	41	土器器片1点	*

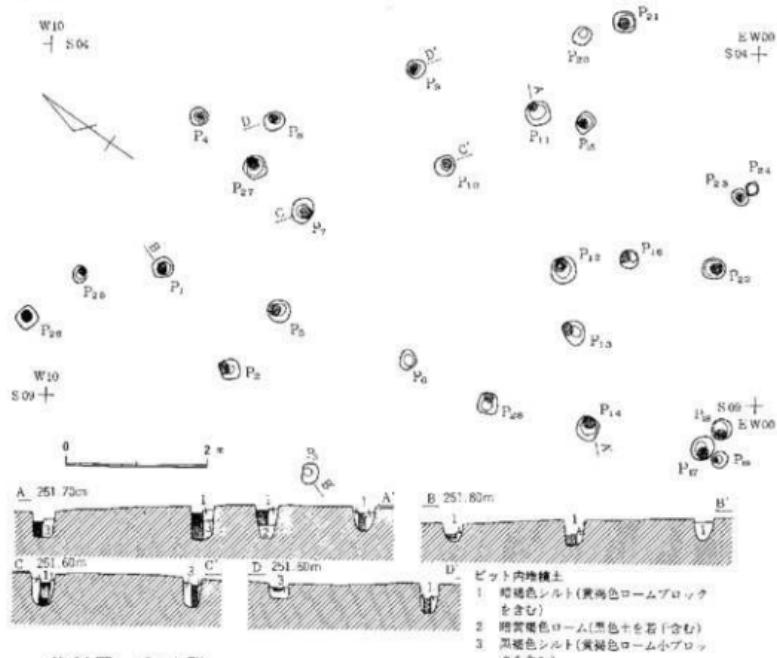
## 第5節 その他の遺構と遺物

前節まで調査において検出した主要な遺構について述べてきたが、ここでは、その他の遺構としたピット群および焼土遺構、また、遺構に伴わずに出土した遺物について報告する。

### ピット群（第34図）

第I調査区南側で確認されたもので、1号住居跡周辺では検出されないことから道路敷部分付近を中心広がりをもつものであると考えられる。検出面はL-III暗茶褐色シルトであるが、断面では表土直下から認められるものがある。

ピットの大きさは25~35cm、深さは20~60cmの範囲でばらつきがあり、平面形も円形や方形があり統一的なものはみられない。埋土は暗褐色土と黒褐色土に黄褐色ロームブロックを含むものが多く、しまりの強いものが数基認められるが、大半は軟弱である。ピットのはほとんどから柱痕



第34図 ピット群

が確認され、径10~15cmの円形を呈すものであった。

これら多数のピットの性格は、柱痕が存在することから柱穴と考えられるが、その配置状況をみると、一直線上に3~4基並ぶものはみられるものの建物の組み合わせとなるような配置は認められず、頑丈な上屋構造は設定できないことから簡単な小屋・柵等が推定される。(安田 稔)

### 焼土遺構(図版16)

Q・R-12グリッド面で検出した焼土の盛り上がりである。焼土の範囲は約11m×0.9mで、厚さ20cm程の塊や小ブロックを多量に含む層をなしている。15m×1m程の浅い掘り込みの上に乗った状態で検出された。土師器と須恵器が破片で出土している。土師器片は2次的な火熱を受けて赤く変色し、表面は焼けて剥落している。須恵器は、高台付杯と思われる。いずれも細片であり出土状況からも本遺跡に伴うものである可能性はうすい。

(西間木薰)

### 遺構外出土の遺物

今回の調査では、縄文土器片17点、土師質土器片2点、石器4点および陶磁器片が数点出土している。次に、各項目を設けて説明を加える。

#### 縄文土器

主としてⅡ区から出土したもので表土およびL-II中より出土したものである。繊維を多く含む早期末の土器が大半を占め、その他に前期の土器が若干含まれる。

##### I群土器 早期末の土器(第35図、図版27)

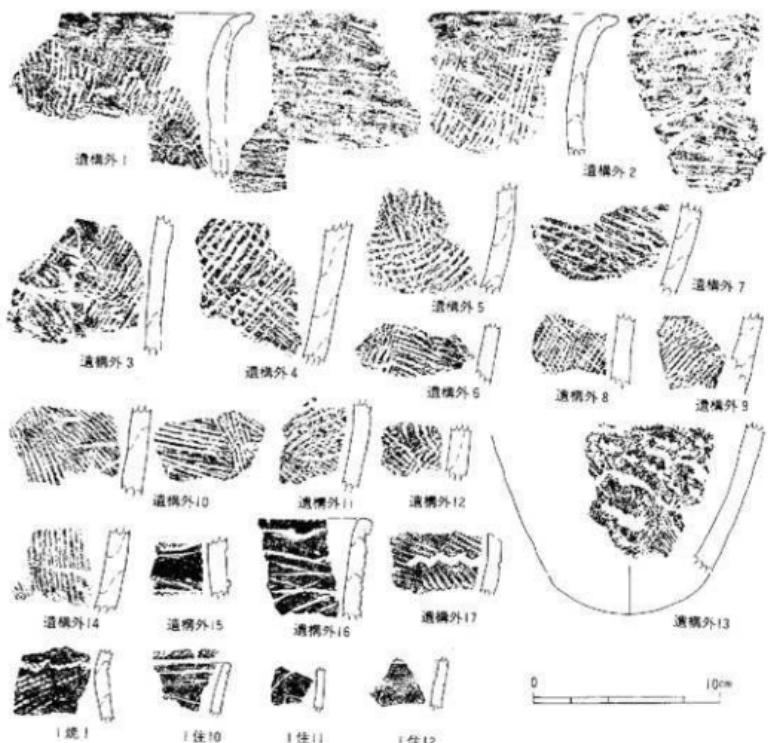
胎土に繊維を多量に含み外面に撚糸文を施するものである。撚糸文は胴上部は継方向の回転であるが、底部近くになると縦回転と斜め方向の回転が交差しているのがみられる。遺構外1・2は口唇部が強く外方へ折り曲げられ、撚糸文は折り曲げられた口唇下から施されている。内面には口唇下から貝殻条痕が施される。胴部破片で内面に貝殻条痕がみられるものは遺構外3・7・10・13・14で、遺構外10は条痕が明瞭にみられるが、他は条痕がみられるものの軽い擦痕風である。

##### II群土器 前期の土器(第35図、図版27)

胎土にほとんど繊維を含まない土器群である。遺構外15は細い隆帯を貼り付け、隆帯上に斜めの刻みが施されている。遺構外16は口縁部がわずかに折り返され、口唇部下には横方向と斜方向の沈線を組み合わせて施されている。遺構外17は単節斜縄文R Lを地文とし、やや太めの沈線にて鋸歯状文が施されている。

#### 土師質土器(第36図)

遺構外22・23は耕作土内から出土した素焼きのいわゆる土師質土器である。2点とも体部下半



第35図 遺跡内出土織文・彌生式土器

から底部にかけて残存するもので、口縁部は欠損している。ロクロ成形のもので、体部にはロクロ痕を明瞭に残す。底部は回転糸切りによる切り離しのままである。遺構外22は現存高2.2cm、底径5.1cm、遺構外23は、現存高0.9cm、底径5cmを測る。色調は前者は赤褐色、後者は灰黄褐色を呈している。

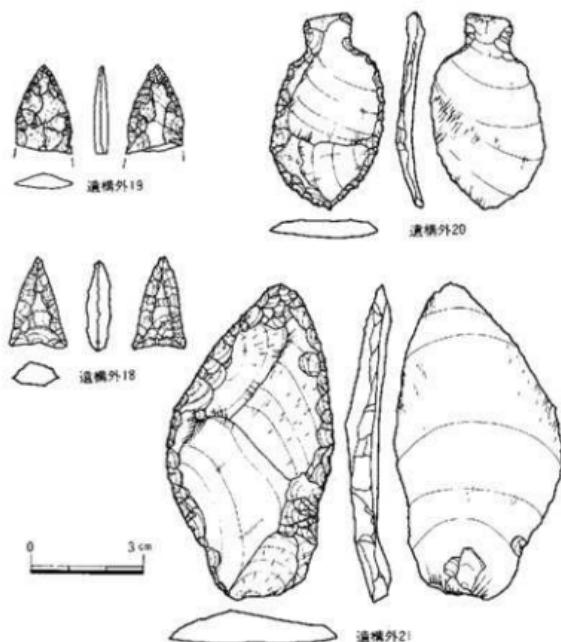
(橋本博幸)

## 石 器 (第37図)

遺構外18・19は石鎚で、遺構外19は途中で折れて欠損している。遺構外18は無茎で、基部に若干のえぐりが加えられている。遺構外18は頁岩、遺構外19は流紋岩である。遺構外20は定形的な石匙で、礫の自然面がわずかに残存している。遺構外21も石匙と考えられるが、遺構外20のよう



第36図 遺構外出土土師質土器



第37図 遺構外出土石器

が付着しており、破損箇所を修復したものかとも考えられる。常滑系の大甕の口縁部と考えられる破片は口唇部を外に折り返してさらに上下につまみ出し、T字を横に倒した形状を呈する。帯状の口唇部の幅は2.7cm程である。色調は赤褐色で部分的に灰黄色の釉が掛り器面はざらついている。天目茶碗の口縁と思われる黒釉の施された小片は胎土が灰白色で硬く良質のものを想像させる。他は施釉陶器片が5点あるが器種・器形を推定し得るものはない。

(西間木薰)

に明確なつまみ部は作り出されていない。石質は両者とも頁岩である。4点の石器はいずれも縄文時代に属するものと考えられる。

(安田 稔)

## 陶磁器

各区より出土しております全部で10点ほどであるが、いずれも細片化しており図化し得たものはない。磁器が3点あるうち1点は器種・器形は不明であるが、かなり良質の青磁で内外ともやや青味の強い灰青色を呈する。特徴的なことは断面の2面に黒褐色の漆様のもの

## 第3章 考 察

唐松A遺跡では、縄文時代の土坑群、奈良～平安時代にかけての集落跡、中世の館跡が確認された重複遺跡である。以下各時代について考察を行うが、中期後半の弥生式土器については、その数がわずかであることから、今回はふれないのでおく。

### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1. 縄文時代の遺物

今回の調査で検出された土器の中で最も時代の遡るものは、1号土坑の $\ell - 1$ より出土した撲糸文土器である。第32図に拓本を掲載したものは口縁部4点、胴部11点であるが、この他にも土器表面が剥落したものなどを含めて若干の小破片がある。口縁部はいずれも折り返しによって口唇部が若干肥厚しており、肥厚部の下に無文部をもつもの(1坑1・2)と、肥厚部直下から撲糸文が施文されるもの(1坑3・4)がある。内面にはいずれも指頭による圧痕が巡っている。掲載できたものの口唇部には意識的に施文した様子は認められないが、小片の中の折り返し口縁部の剥落破片の中には口唇肥厚部側面に縄文をこころがしたと思われるものがある。胴部片は厚さ5mm前後で底部近くになると厚さを増す傾向がある。撲糸文は継方向に密に施文され、底部近くには若干の無文部がみられる。

福島県における撲糸文土器は長沼町宮ノ前遺跡(長沼田1973)、西郷村坂の下遺跡(目黒1978)、白河市豆柄久保(藤田・中村1979)において出土し、最近ではいわき市竹の内遺跡(馬目1982)においてもその存在が知られるところとなり、坂の下遺跡の土器は夏島式、宮ノ前遺跡・竹の内遺跡の土器は稲荷台式に比定されている。

本遺跡の撲糸文土器を上記のものと比較すると、口唇部のふくらみ、および口唇下に無文部を有すこと、さらに小片ではあるが口唇部に縄文の施文がみられるなど、明らかに異なる特徴を有しているし、千葉県木の根遺跡において夏島式以降のメルクマールとなるのではないかといわれた口唇・口縁の研磨も認められない。このことを考えると本遺跡の土器はこれまで県内で発見された撲糸文土器よりも古い要素を持つものと考えることが可能である。福島県における夏島式以前の土器は最近になって矢吹町乙ヶ沢遺跡(芳賀1982)、塙町字塙遺跡(井上1982)において発見され、井草式との見解がなされているが、その特徴も本遺跡のものとは異なっている。しかし小片の中には、口唇肥厚部側面に縄文を施したと思われる破片が存在し、口唇下に無文部を有するもの

を口唇部施文の省略化されたものと考えれば、本遺跡の土器は乙ヶ沢・宇塚遺跡の土器の漸進した姿とも考えられよう。ただ福島県における撫糸文土器の様相がまだ明確ではないことから、ここでは広い意味での井草式の範疇で考えておきたいと思う。

次に24坑1・3住5、遺構外I群(1-14)は早期の土器である。24坑1は外面および口唇を丁重にナデた後に沈線文を施したもので、田戸下層式と考えられる。3住5は口唇部に絡条体圧痕がみられ、微隆起上には地文段階での浅い刻みが観察される。微隆起線を施していることから野鳥式と考えられるが、絡条体圧痕が残っていることから子母口式からの流れが考えられ、野鳥式でも古い段階のものと考えられる。

遺構外1~14は纖維を多量に含み、撫糸文を施す土器群である。内面には条痕および擦痕がみられるものがあり、器形の特徴からも大畠G式に比定されると考えられる。本遺跡からは昨年度発掘分を含めて竹管工具などによる沈線文や、口唇部にスリットを有するものは出土していない。

5住27、遺構外15~16は前期の土器と考えられる。遺構外17は鋸歯状の沈線から大木5式と考えられ、他の遺物も前期後半のものと考えられる。遺構外15は諸磯系の土器であろう。

## 2. 繩文時代の土坑

繩文時代の土坑と考えられるのはA類としたいわゆる陥し穴状の遺構で、10基検出されている。現在この種の土坑については議論の多いところではあるが、遺跡調査課内での検討結果でも一応陥し穴として落ちついていることから、ここでは陥し穴として記述を進める。

陥し穴状土坑は西白河郡東村西原遺跡、郡山市鳴神・柿内戸遺跡、須賀川市大久保遺跡からまとまって検出されており、特に鳴神・柿内戸遺跡では153基という数に及んでいる。本遺跡では限られた地域から10基しか検出されていないが、もし全域が調査されたならば相当数に達すると思われる。

これまで陥し穴状土坑は単独で検出されることではなく、また住居跡などと近接して検出された例も少ない。本遺跡では数は少ないものの少なくとも2つのグループが認められ、1・16号土坑のグループと31~33号土坑のグループがそれである。このグループは土坑の形状および長軸の傾きから捉えたもので、同時期に機能していた可能性が強く、これまでの見解を補充する資料となる。また本遺跡は地形的に当時は段丘の先端部に位置していたと考えられ、やはりこれまでいわれたように集団による追い込み獵を想定させる。所属時期については21号土坑がその指針を与えてくれる。21号土坑は中世館跡に伴う土壘下より検出された土坑で、さらに同壁のセクションにかかっているL-II中位から掘り込まれている奈良時代に比定される2号住居跡よりも明らかに下層から掘り込まれている。このことは、本遺跡の陥し穴状土坑が繩文時代に属するものとしての裏付けとなり、周辺の遺物状況から考えてみるならば繩文時代でも時期の遡るものと考えられる。

(安田 稔)

## 第2節 古墳時代末～平安時代の遺構と遺物

### 1. 遺物について

本遺跡において、今回の調査で出土した本時期の遺物には、土師器・須恵器・鉄製品がある。これらのほとんどは遺構(特に住居跡)に伴って出土している。ここでは中でも最も出土量の多い土師器について、土器の形態や技法等の分類を行った上、土師器編年上の位置関係に若干ふれたい。

検出された住居跡から出土している土師器は、成形段階においてロクロ未使用とロクロ使用の2つに分けることができる。前者をI群土器、後者をII群土器とそれぞれ図化できた資料を中心に分類を行っていきたい。

#### I群土器

本群土器を出土している住居跡には1～4号住居跡がある。

**杯 A類** 器形は、底部から体部に移行する部分の内外に明瞭に段を有する。調整は、外面口縁部はヨコナデ、底部はヘラケズリ、内面は全面ヘラミガキの後黒色処理を行っている。(2住2, 4住1)

**B類** 器形は、底部から体部へ移行する部分の内外に、不明瞭ではあるが稜を有するもので、調整はA類と同様である。(2住1・3)

**C類** 器形は、平底風の底部から内擣気味に立ち上がり、外面には沈線などによる簡略化された段を有している。調整は、外面底部はヘラケズリ、段上から口縁部はヨコナデ、内面は全面ヘラミガキの後黒色処理を行っている。(1住1, 3～6)

**D類** 他に比べて小型の杯である。器形・調整はC類に類似している。(1住2)

**甕 A類** 最大径を口縁部にもつ長胴甕である。口縁部は「く」の字状を呈し、胴部最大径は中央部にある。調整は外面口縁部はハケメの後ヨコナデ、胴部はハケメ、内面口縁部はハケメ、胴部はヘラナデが施されている。(2住5～7, 3住2・3)

**B類** 最大径を口縁部にもつ長胴甕であり、口縁部は「く」字状を呈している。調整は、口縁部内外はヨコナデ、胴部内外ともヘラナデが施されている。(1住7)

**C類** 口縁部径と胴部最大径がほぼ等しく、胴部が球形にやや近い小型の甕である。調整はA類と同様である。(4住6)

**D類** 小型の甕で、底部からラッパ状に開く器形を呈している。調整は、口縁部の内外面はヨコナデを施しているが、体部は外面ハケメ、内面ヘラナデを行っている。D<sub>1</sub>類と体部内外面ハケメを施しているD<sub>2</sub>類に分けられる。(2住4, 3住1)

**壺** 器形は底部が欠落しており不明であるが、胴部は球形を呈し口縁部は直立する。調整は、外面口縁部はヨコナデ、胴部上半はハケメ、下半はヘラケズリ、内面は口縁部ヨコナデ、胴部はヘラナデが施されている。(1住9)

**甌** 底部付近が残存する單穿のものである。調整は内外面ともヘラナデが施されている。(3住4)

**椀 A類** 本葉痕を有する平底より内縁気味に立ち上がる。内外面ともナデ調整が施されている。(4住4)

**B類** 器形は平底風丸底より内縁気味に立ち上がる。外面調整は口縁部ヨコナデ、体部はハケメ、底部はヘラケズリが行われ、内面は口縁部ヨコナデ、底部ヘラナデが施されている。(4住5)

**鉢** 平底風の底部より外方に開き気味に立ち上がり、口縁部で若干くびれた後外反する。調整は外面口縁部はヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリ、内面は全面ヘラミガキを施している。(4住2・3)

以上に分類できるが、これらを出土している1~4号住居跡ごとにまとめると

1号住居跡 杯C・D類、甌A・B類、壺

2号住居跡 杯A・B類、甌A・D類

3号住居跡 甌A・D類、瓶

4号住居跡 杯A類、甌C類、椀A・B類、鉢

となっている。各遺構から出土した器種は、上記の杯・甌・壺・瓶・椀・鉢で構成されている。他にも共伴すると思われる器種が想定されるが、今回の調査では補えなかった。これら出土した器種をみると、最も数量的に多いのは杯・甌であり、他は少数であるため、ここでは杯・甌を中心みていくことにしたい。

杯は、段あるいは沈線の位置と有無、また口縁部の立ち上がり方によってほぼ2分される。それは杯A・B類と杯C類の相違である。前者は、内外面に段あるいは棱線を有し、口縁部は外反気味に立ち上がるが、後者は、段が簡略化され口縁部は内縁気味に立ち上がるものである。しかし、再調整技法はどちらも外面の段あるいは後の上部がヨコナデで下部はヘラケズリ、内面は全面ヘラミガキの後黒色処理を施しており相違はない。甌においても杯A・B類を伴うものは、口縁部が「上字状」を呈し頭部に段を有する長胴甌で、調整は、口縁部はヨコナデで胴部外面はハケメ、内面はヘラナデの再調整が施されるものである。また、C類を伴う甌には、器形は長胴を呈するが、調整は胴部外面にハケメあるいはヘラナデを施すものがある。

本遺跡において、上記の杯A・B類を出土しているのは2・4号住居跡であり、杯C類は1号住居跡からである。3号住居跡では杯は検出されなかったが、出土した甌が2号住居跡の甌A・C類に類似することから、2号住居跡と同時期に属するものとみてよいだろう。

杯A・B類は形態的な特徴、また成形技法上の特徴から土師器編年にあてはめると栗圓式期に属するものであり、杯C類は、従来「国分寺下層式」で捉えられていたものであるが、技法的には「栗圓式」の範疇に入るものと考えられる。周辺においてこのような土器を出土しているのは、杯A・B類は西白河郡東村佐平林遺跡I～IV区16号住居跡、郡山市大善寺遺跡A地区6号住居跡、C地区4号住居跡、二本松市郡山台遺跡19号住居跡、二本松市借宿遺跡などがあり、また杯C類は、東村谷地前C遺跡2号住居跡、郡山市徳定B遺跡9号住居跡などでみられる。以上の住居跡出土遺物から本遺跡における本群土器を出土している住居跡の変遷をみると2～4号住居跡→1号住居跡が考えられよう。

なお、4住5は鉢あるいは壺とみることも可能であるが、ここでは一応椀に分類した。これは、二本松市借宿遺跡において住居跡に伴って出土した椀に器形・再調整技法などが類似しており、また4号住居跡に共伴している杯A類同様の杯も出土している。借宿遺跡では、栗圓式期の範疇で捉えているが、本住居跡もやはり栗圓式期併行の住居跡とみて大差ないであろう。

## II 群土器

今回の調査で検出された遺構で本群を伴うのは5号住居跡1軒であり、十分な検討を加えることはできないが、簡単に分類し本住居跡の編年的位置についてふれたい。

**杯** ロクロからの切り離し技法上、回転糸切りのもの(A類)、その後の調整によって不明なもの(B類)に分けられ、また、再調整技法上では体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリを施しているもの(I類)、体部下端から底部周縁に手持ちヘラケズリを施しているもの(II類)、再調整が行われないもの(III類)に分類される。(5住1～10)

本住居跡からは団化した5住1～10の他にも細片となっているものの十数個体分の破片があり、それらの組成はA II類、A III類、B I類が認められる。

**高台付杯** 杯部、高台部とも欠損しているものが多く器形は不明瞭であるが、杯部の調整は、内外面ともヘラミガキが施されるもの(A類)と、外面はロクロ痕、内面はヘラミガキが施されているもの(B類)がある。(5住11～14)

**甕** 図上復元のため器形は明確ではない。外面口縁部はヘラケズリの後ヘラミガキ、体部はヘラケズリ、内面口縁部はヨコナデの後ヘラミガキ、体部はヘラナデを施されているため成形段階が不明なもの(A類)、外面胴部上半はロクロ痕、下半はヘラケズリ、内面胴部上半は回転ハケメ、下半はヘラナデをそれぞれ施しているもの(B類)がある。(5住23・24)

**筒形土器** 作りは粗雑であり磨滅が著しいものが多い。粘土紐積み上げ痕が顕著であり、内外面に指頭によるナデが観察される。(5住15～22)

本住居跡は、他に須恵器の長頸壺(5住25)がある。筒形土器という特殊な器形を含めて他にも構成器種は考えられるが、今回は検出されなかった。

本住居跡から出土した杯は、回転糸切り無調整の杯、体部下端から底部周縁あるいは体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリ再調整を施す杯が共伴しているが、このような伴出例を周辺遺跡でみると、郡山市大善寺遺跡上野A地区4号住居跡、郡山市鳴神道跡6次2号住居跡、東村赤根久保遺跡1号住居跡などがあげられる。そのうち赤根久保遺跡は9世紀中葉頃に位置づけ、他はほぼ同時期かやや後出するものとしている。しかし、これらの住居跡にはロクロ使用段階の杯でも古手とされる底部あるいは体部下半に回転ヘラケズリ再調整を施す杯が共伴しているが、本住居跡からはそれが1点も出土していない。

以上のことから本住居跡は、赤根久保遺跡1号住居跡よりは新しい9世紀中葉～後葉に位置づけられる住居跡として捉えることができよう。

## 2. 遺構について

当時期の遺構としては、堅穴住居跡5軒があげられる。後世における擾乱や未調査部分があるなど、完全な形で調査できたものはなかった。また、今回調査を行った部分は3ヶ所に分かれており、遺跡における集落跡の様相などは捉えることが不可能であった。

検出された住居跡は、伴出する遺物によって大きく2時期に区分することが可能である。I期は、伴出する遺物がロクロ未使用土師器で構成される1～4号住居跡があげられ、II期は、伴出する遺物が大半ロクロ使用土師器で構成される5号住居跡があげられる。I期は伴出遺物に時間差がみられ、1号住居跡は2～4号住居跡よりは後出するものである。以上のことから今回検出された住居跡の変遷は、2～4号住居跡→1号住居跡→5号住居跡を考えることができる。

I期の住居跡は、時間的には若干のずれはみられるものの、構造上からは、一辺4.5m前後の方形のプランを呈し、床面は地山面をそのまま床として利用しているほか、2号住居跡を除いては作り付けのカマドを有するなどの共通点がある。しかし、カマドの方位は一定せず、方向性については指摘することができない。ただ、4号住居跡のカマドが、南東隅に位置していることが特異な例としてあげられる。このように隅にカマドを有する例を周辺遺跡でみると、二本松市矢ノ戸遺跡3号住居跡(北東隅)、郡山市柿内戸遺跡18号住居跡(南東隅)・38号住居跡(北東隅)・47号住居跡(北東隅)、須賀川市御所館遺跡2号住居跡(北東隅)、ほかに郡山市大善寺遺跡、石川町連中久保遺跡などで検出されている。以上のように遺跡内で隅にカマドを構築している住居跡の例は非常に少ない。これらに共伴する遺物やカマドの方位・構築方法、また住居跡の平面プランなどはまちまちである。これは、各住居跡が営まれた時点での自然環境などの影響が左右しているものと思われる。

II期は、5号住居跡1軒のみである。平面プランは長方形を呈するもので、長辺と短辺の比は1.43:1となっている。拡張や重複がみられないことから、構築当初から長方形を呈していたものと思われる。カマドは2基が同時存在した可能性があり、床面中央には炉跡のような施設を有

しているなど形態的に一般的な住居跡とは異っている。本住居跡のようにプランが長方形を呈するものは、二本松市郡山台遺跡26~28号住居跡、西白河郡東村佐平林遺跡Ⅳ区12号住居跡などがあげられる。前者は、柱穴の構成や限定された場所に集中的に構築されていることから、特殊な目的を持った住居跡群であった可能性を指摘している。また後者は、東西両壁にあるカマドが同時に存在した可能性があり、鉄鋤や鍬羽口が出土していることから工房跡の性格が強いとしている。以上のことを見て考えると、本遺構も構造上から特殊な目的のために構築し使用した可能性がうかがえる。

(橋本博幸)

### 第3節 中世以降の遺構と遺物

中世の遺構としては、唐松館に関連する濠と土塁があり、さらに形状より館との関係が推定される掘立柱建物跡・土坑・ピットなどを上げることができる。遺物は僅かではあるが、土師質土器・陶磁器の小片などが濠・土坑あるいは遺構外より出土している。ここではこれらの遺構・遺物を中心今回唐松館に関する調査の成果をまとめるとともに、本館についての若干の考察を試みるものである。

まず本館の占地について見れば、西流する谷田川南岸の氾濫原に面する南側河岸段丘の先端部に立地しており、北側は氾濫原に迫り出して比高差3m程の段丘崖をなしている。東側・西側はやや低い水田が連続して広がり、南側は幾分高まりながら約100m程で南岸丘陵裾部にいたる。川に沿って開かれた低湿な水田地帯の比較的見通しの良い微高地を占めており、北辺は段丘崖を利用しながら、東・西・南側に濠を掘ってこれを切り離し、館の平場をつくり出したようである。標高251.5m前後で南辺より北へゆるく傾斜する地形をなしている。

濠により区画された平場は、検出した濠上端を地形に沿って延長して各辺の長さを推定すれば、東辺約67m(36間)、南辺約90m(50間)、西辺約78m(43間)、北辺は中央東寄りで外にふくらむため弧の内側で約101m(56間)を測り、東西に長い不整長方形を呈する。南辺および北西コーナーは未調査のため問題はあるが、一応本館の縄張りは東西55間×南北45間程の長方形のプランであったろうことが推定される。

中世城館の築城に関しては、自然地形を最大に利用しつつ行われたことは知られており、本館もこれに相当する。また専ら人力によるためプランも比較的単純なものが多い。本県伊達郡に所在する金谷館(寺島他1979)や、岩瀬郡長沼町の南古館、今年度本館に先立って調査を実施した東方500mに接して立地しているカナイ館(第3編)などにも同様のことが言えよう。いずれも平地に面する丘陵・台地・段丘等の微高地に占地しており、一方あるいは三方を濠によって切り取つて郭を形成している。縄張りは単純な方形プランを用い、規模は金谷館が90m四方、長沼南古館

が85m×63m、カナイ館が62m四方と小さく、単郭あるいは簡単な複郭の平館である。長沼南古館については発掘調査が実施されておらず、また金谷館・カナイ館とともに本館同様部分発掘に終っているため充分な比較検討はできないが、占地・繩張りなどに本館と共通する特徴を有するものと思われる。

次に普請について見れば、主たる施設は濠と土塁である。規模・形態については第2章第4節に述べているので重複は避けるが、上端幅11m程で断面諸薬研の外濠が郭をめぐって掘られ、その内側に郭端に沿って基底幅4m、推定高2m程の土塁が全周して築かれたようである。西側は近接して平行に内濠が走り、この間60m程は二重濠の態をなしたと思われる。この内濠は北辺より20m程内側で直角に折れ、東進して東辺の手前で終る。上端幅6m程の諸薬研濠で、この内側にさらに土塁を設けた様子は観察されなかった。外濠底面より土塁上端までの高さを推定すれば、残存高で2~2.5mを測り、3mを超える規模を有したものと思われる。

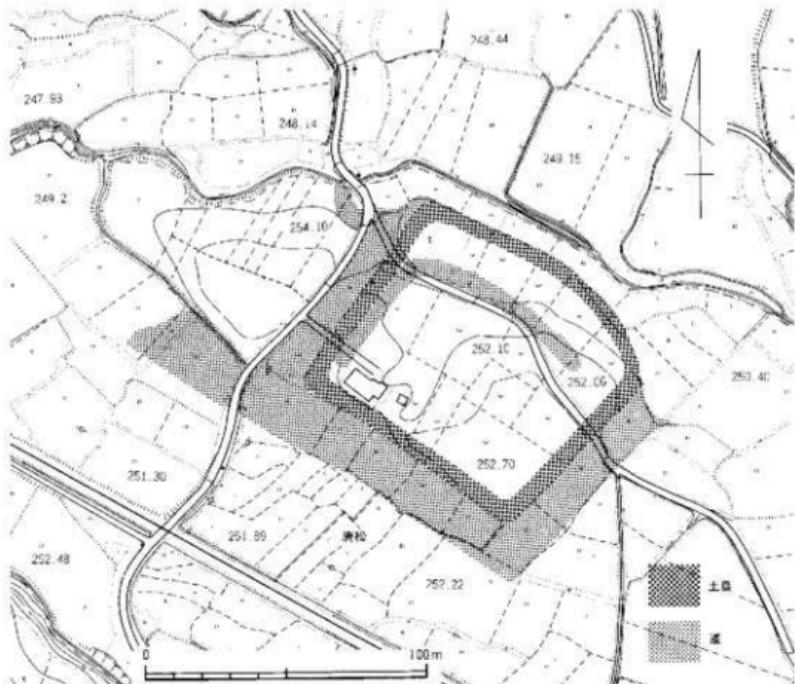
前出の金谷館においては、上端幅5.4~6.45m、深さ1.1~2mの断面諸薬研の濠と、その内側に基底幅10m強、現存高1.4mの土塁を検出している。ただし濠は底面に掘り込みを有する障子堀である。長沼南古館の濠は9m幅、カナイ館では5.2~5.8mの濠で土塁は不明である。これらと比較すれば本館の濠幅はやや大型となるが、他に須賀川市所在の単郭式平館である蛭館の濠は幅20m、長沼南古館に近接する北古館では18~20mと広く、かならずしも一定の規模を示すものではない。むしろ時代を昇るにつれて一般に土塁・濠とも郭に付随して小型・簡素なものとなるようである。また、特に平地に築かれる城館においては、土塁・濠は主要な防禦線を成すものであり、戦時に対応し得る規模・形態に築くためには膨大な資材・労力を要したであろうことは想像に難くない。本館にそのような要素は見られず、そうした大がかりな防衛施設が必要となる以前の時代の所産と考えて良いと思われる。

ここで内濠と繩張りの関係について若干検討を加える。内濠により区画された南側区域は、東西85m、南北55m程であり、北側では約20mの幅で東西100mの細長い区域をなす。これが南側を主郭、北側を外郭として当初より構築されたものかどうかは不明である。本県の中世城館跡の中にも連郭式の平地館は数例知られており、喜多方市の新宮城は二の丸・三の丸を有する同心円的複郭をなしており、建暦二年(1212年)に新宮氏により築城されたと伝えられ、その後改築されたとしても室町初期には現存する城郭は完成していたものと考えられている。前出の長沼北古館は鎌倉時代後半頃の長沼氏の居館とされているが、二の丸を有し連結的複郭をなしている。これらと比較した時、本館の内濠により切り離された外郭は規模も狭く上2城に見る二の丸的形態をなしていない。地形からもしも外郭を設けるとすれば、段丘崖をなす北側よりはむしろ東・南・西側に築いたであろうし、現に昭和56年度の調査報告において西側連郭の可能性が指摘されている(『母畠地区遺跡発掘調査報告』)。同種の類例を見ておらず問題は残るが、ここでは二重濠形

態の一種として、本館を単郭式平館の一類としてとらえておくことにする。

本館の作事に関してはそのほとんどは不明と言わざるを得ない。今回の調査が縁辺の部分発掘に終り、館の中心部を調査していないため、門をはじめ橋・櫓・建物等の遺構を検出することはできなかった。ただⅡ区東側で検出した1号・2号掘立柱建物跡については層位的観察から本館跡に伴うものとは考えにくく時期の下るものと考えられ、Ⅰ区南側に広がりをもつピット群についても同様の所見から本館跡とは時期を異にする柱穴群と考えられる。土坑はB<sub>1</sub>類、B<sub>2</sub>類であるが、3号土坑を除いて伴出遺物がなく同時期とするにはやや問題が残る。B<sub>2</sub>類は分布状況等より土壌に付随する補強施設のようなものと考えた。B<sub>1</sub>類は、当初土倉様のものを想像したが墓坑としてほぼ間違いないものと思われる。

ここで遺物について若干述べれば、3号土坑より灰釉陶器片が4点出土しており、うち3点は瀬戸系の瓶子の部体に近似した特徴を有するものである。遺構外出土の甕口縁片は、横倒したT字形の口縁帯を有するもので、宮城県出土の窯窓系大甕の口縁に類似し、前出金谷館においても同様の破片を報告している。13~14世紀の所産と比定しており、本館の時期に相当するものと思



第38図 唐松館推定復元図

われる。また3号土坑および遺構外出土の青磁片は2点のみであるが、高度の技法を感じさせるもので舶載磁器の可能性を否定できない。東北地方における中国陶磁については、青森県の尻八館に大量の出土例を見る他、本県でも伊達郡梁川城より若干の出土例があり、中世商品経済の流通を考える上で本資料も何らかの手掛りを与えるものと思われる。

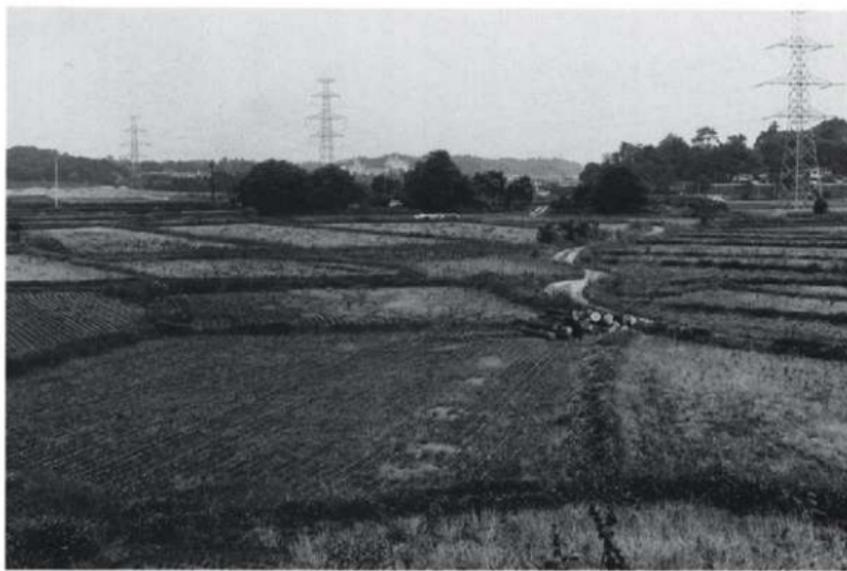
以上、唐松館に関する遺構・遺物についてまとめた。しかし、これにより導ける結論はそう多くはない。第1に、本館はその占地・縄張りおよび普請の技法などから、中世の比較的早い時期の城館跡に近似した特徴を有するものであること。第2に、濠による防禦線を一部二重にして強化しており、これは北西からの敵にそなえるべき必要があったことを示唆するようである。第3に、少量ながら13~14世紀頃の所産と考えられる遺物を出土しており、本館の時期として大きく崩れることはないと思われる。

本来ならば、ここで文献上の考察を併せ述べるべきところであるが、明確な資料を得られぬまま今日にいたっている。昭和56年度の調査に関する前出の報告において、本館に関係すると思われる文献を広範に検討しており、詳細はこれに委ねることにする。ただ、建長6(1254)年に著された『古今著聞集』に初出する、田村荘の領主藤原仲能の居館がこの地方にあったであろうことは、『仙道田村荘史』をはじめ散見する資料中にあらわれており、これとその他の実質的支配者である莊司系田村一族に関係する館として本館の上限を考えてほほあやまりはないものと思われる。

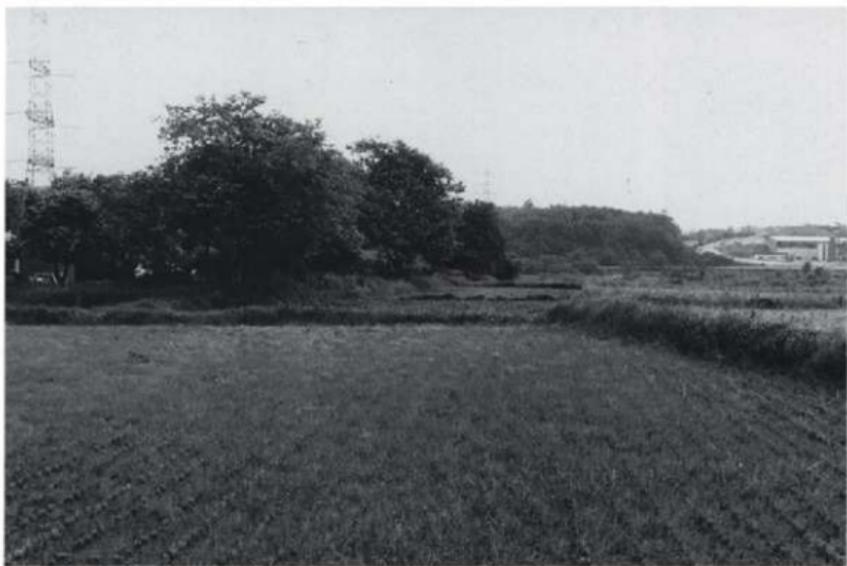
今回の発掘が部分的調査に終り、本館に関してその多くはいまだ不明と言わざるを得ず、多くの未解決の問題を残している。今後当地方に関する発掘調査例の集積を待つとともに、当面不充分ながらも中世城館跡の調査に一つの類例を加え得たことを成果として報告を終る。(西間木薫)

#### 〔追記〕

1号住居跡床面より出土した炭化木について、鶴倉巳三郎氏に樹種を同定していただいたので、写真図版とともに巻末に付載した。



1 唐松 A 遺跡遠景 (南東より)



2 唐松 A 遺跡遠景 (北東より)

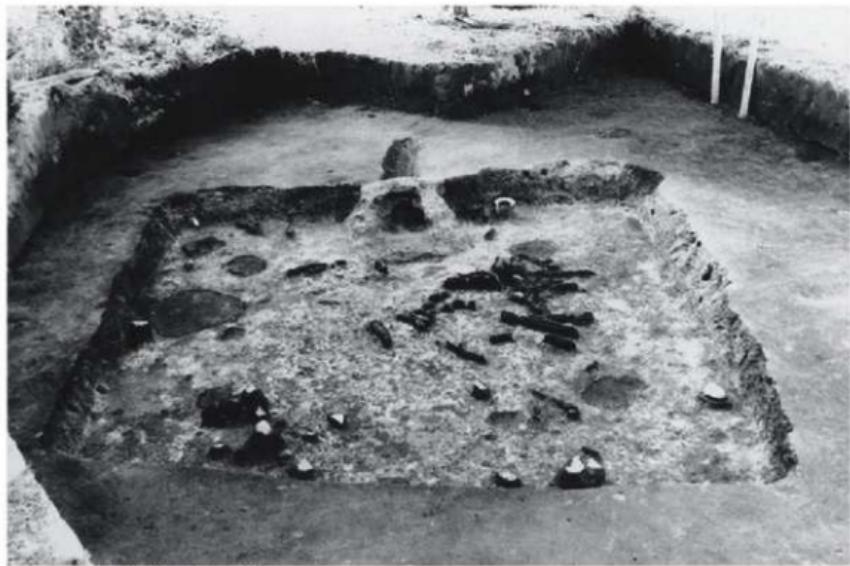
第1編 唐松A遺跡



3 唐松A遺跡 I 区全景(1)



4 唐松A遺跡 I 区全景(2)

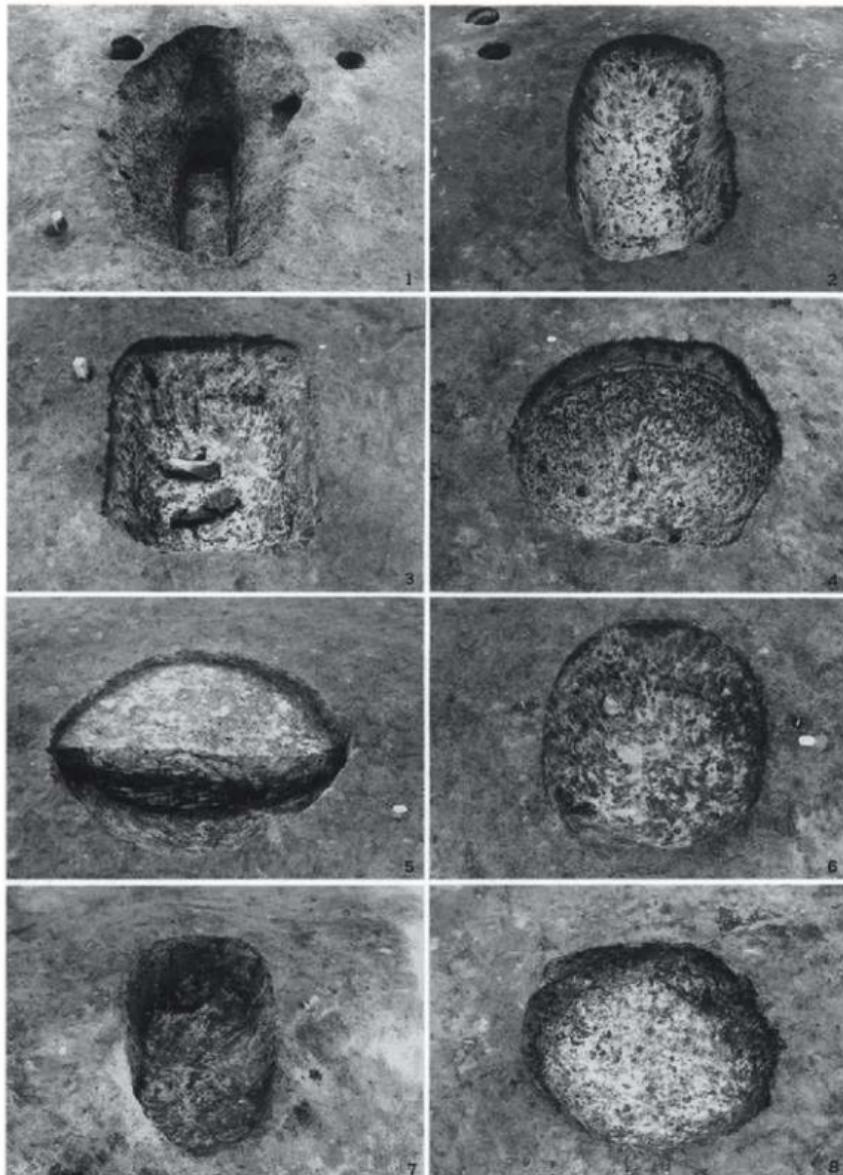


5 1号住居跡炭化物出土状況



6 1号住居跡

第1編 唐松A道路



7 I区土坑

1. … 1号土坑 2. … 2号土坑 3. … 3号土坑 4. … 4号土坑  
5. … 5号土坑 6. … 15号土坑 7. … 17号土坑 8. … 19号土坑



8 唐松 A 遗踪 II 区 全景(1)



9 唐松 A 遗踪 II 区 全景(2)

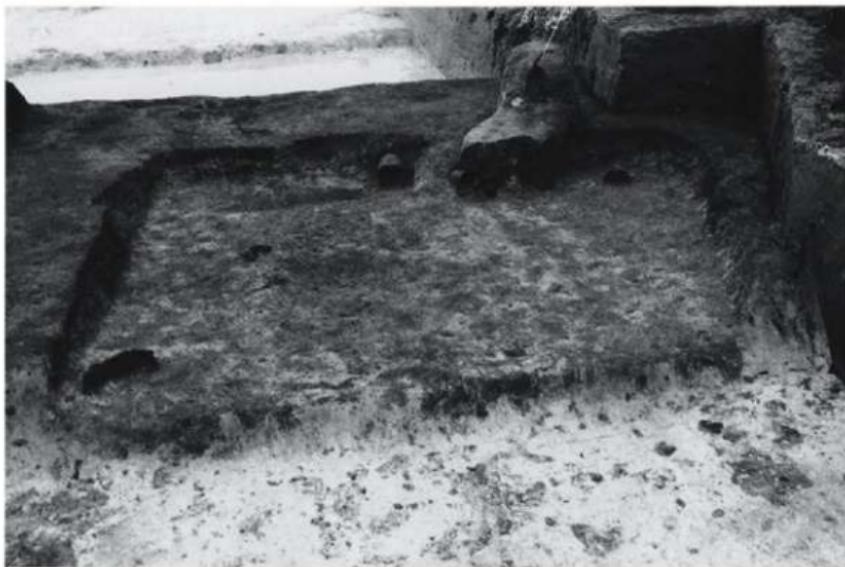
第1編 唐松A道路



10 2号住居跡(1)



11 2号住居跡(2)



12 3号住居跡



13 3号住居跡カマド付近

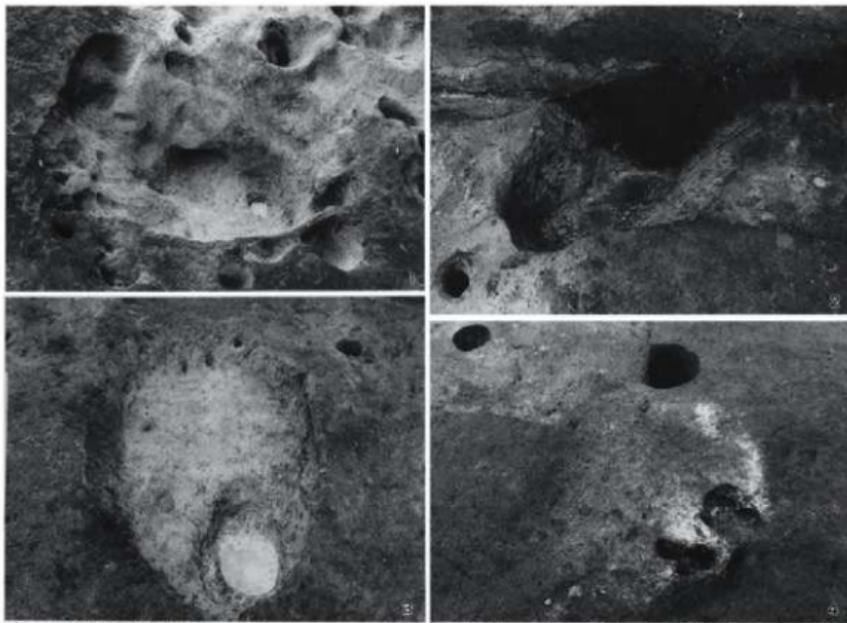
第1編 唐松A道路



14 1号建物跡



15 2号建物跡



16 II 区土坑。烧土遗構

1...21号土坑 2...22号土坑 3...23号土坑 4...烧土遺構



17 1号濠(西侧)

第1編 唐松A道路



18 唐松A遺跡III区全景(西より)



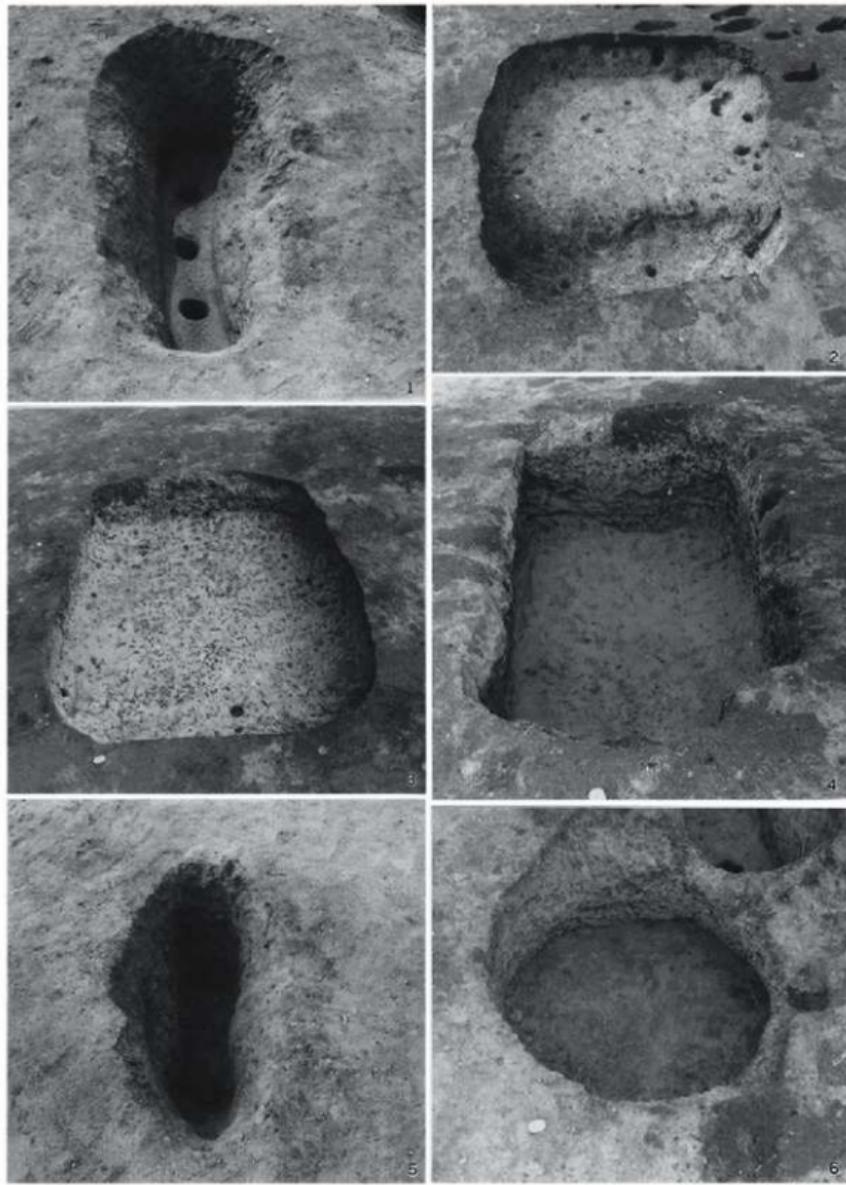
19 4号住居跡



20 5号住居跡(1)

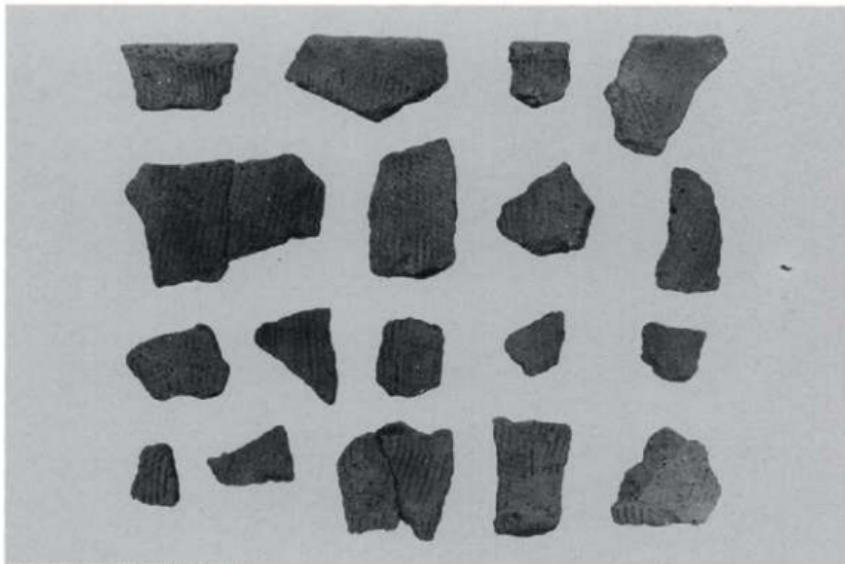


21 5号住居跡(2)

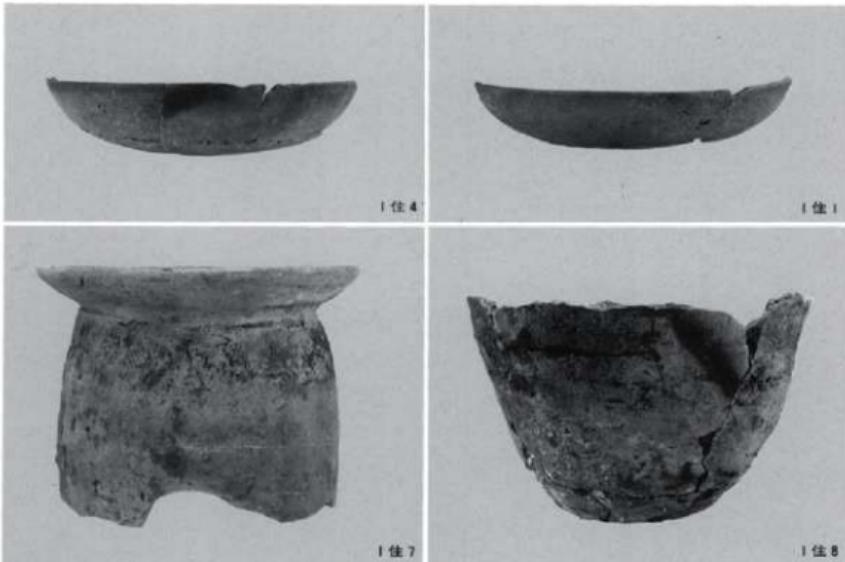


22 III区土坑

1. … 24号土坑 2. … 26号土坑 3. … 28号土坑  
4. … 29号土坑 5. … 33号土坑 6. … 34号土坑



23 1号土坑出土系文土器



24 1号住居址出土土器



2住1



2住2



2住6



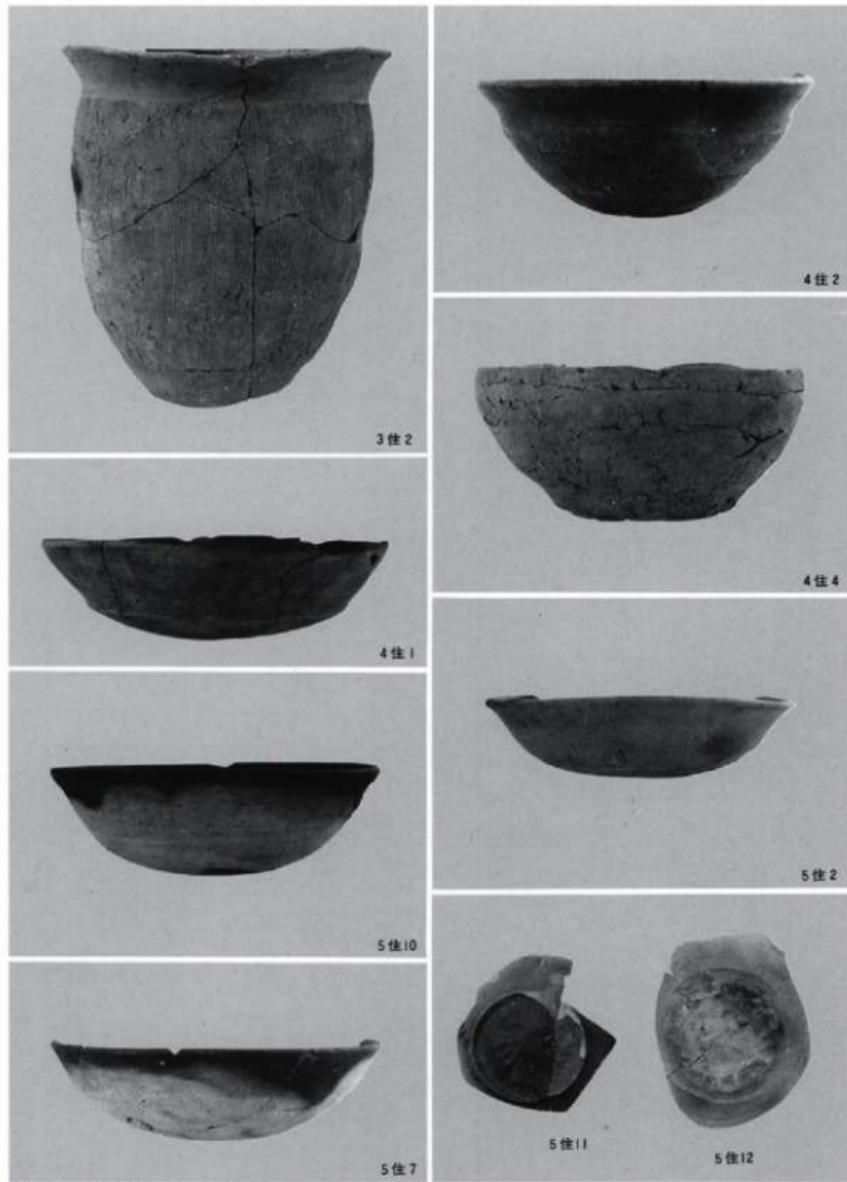
3住3



2住4



3住1



26 3～5号住居跡出土土器



## 第2編 地蔵田 A 遺跡

遺跡記号 C Y - GD · A  
所在地 郡山市田村町大字岩作字地蔵田  
時代・種類 繩文・平安時代  
調査期間 昭和57年8月4日～10月8日  
発掘担当者 目黒 吉明  
調査員 若林 伸亮 大河 峯夫  
西間木 薫 安田 稔  
協力機関 郡山市田村支所産業課



## 第1章 調査経過

地蔵田A遺跡は郡山市田村町大字岩作字地蔵田に所在し、谷田川南岸の河岸段丘面に張り出した舌状丘陵北端部に立地する遺跡である。中央を国鉄水郡線が東西に走り遺跡を南北に分断している。範囲は約10,700m<sup>2</sup>であるが、今回の調査は北側約3,800m<sup>2</sup>を対象に実施した。

### 第1節 調査経過

本遺跡の発掘調査について、実施に至るまでの経緯を若干触れておく。昭和57年度当初本遺跡については、母畑開拓事業所との協議において現状保存の結論を得、調査計画から外れていた。しかし、6月になって工事上の問題から協議が再開された。それは、遺跡北斜面中央部を走る支線道路予定部が地形上削平しなければ工事が困難となつたためである。7月、協議が成立し、道路敷部分約270mについて調査することになった。この調査は、8月4日開始したが、遺構が検出されず、8月10日調査を終了した。実質5日の調査であった。

9月に入り、前回調査の道路敷部分を除く、北斜面全体に関する調査について再三協議がもたらされた。当初の設計では丘陵頂上と裾部平坦面との比高差が5m余りあるが、現地形を生かす計画であった。これに対し、農民側から当初計画では法面が膨大な面積を占めるため設計変更の要請があり、工事立会のうえ協議することとなった。

9月21・22日の両日、工事の前過程としての重機による表土削除に立ち会った。住居跡・土坑が表出したところで、一時工事を中止し、全面発掘調査をすることになった。本格的に調査を再開したのは9月27日である。前編で報告した唐松A遺跡の第Ⅲ調査区と同時並行して調査を実施し、2次にわたる調査のすべてを終了したのは10月8日のことであった。

#### 発掘調査日誌概要

- 8月4日 重機を導入して表土の除去を開始する。
- 8月5日 表層の排土を継続しながら精査を並行して行う。ベンチマークを設定する。
- 8月9日 敷水して精査を繰り返したが、遺構は検出されない。西に2m拡張のため再度重機を導入する。
- 8月10日 全体平面図を作成。遺構なく調査を終了した。
- 9月27日 重機による表土削除と作業員による精査を並行して行う。住居跡2軒、溝1条、土坑数基を検出。

- 9月28日 精査を続けながら、S I01, S D01の掘り込みに入る。
- 9月29日 調査区東側で住居跡コーナー部を検出。約1/2は道路により破壊されているようである。実測のための基準杭を設ける。10m方眼に組む。主軸方向はN35°Eである。
- 9月30日 住居跡をさらに2軒検出。掘り込むと同時に縄文早期末と思われる遺物が出土する。
- 10月1日 さらに1軒縄文の住居跡を検出する。住居跡は、これで6軒(縄文時代3、平安時代3)となる。
- 10月4日 S I04・05・06の3軒はほぼ同時期の確信を得る。S I02より鉄製品を出土する。
- 10月7日 実測等大半を終了し、作業の主力を唐松Ⅲ区に移す。
- 10月8日 全体写真を撮影し、調査を終了した。

## 第2節 調査方法

### 1. 調査方法

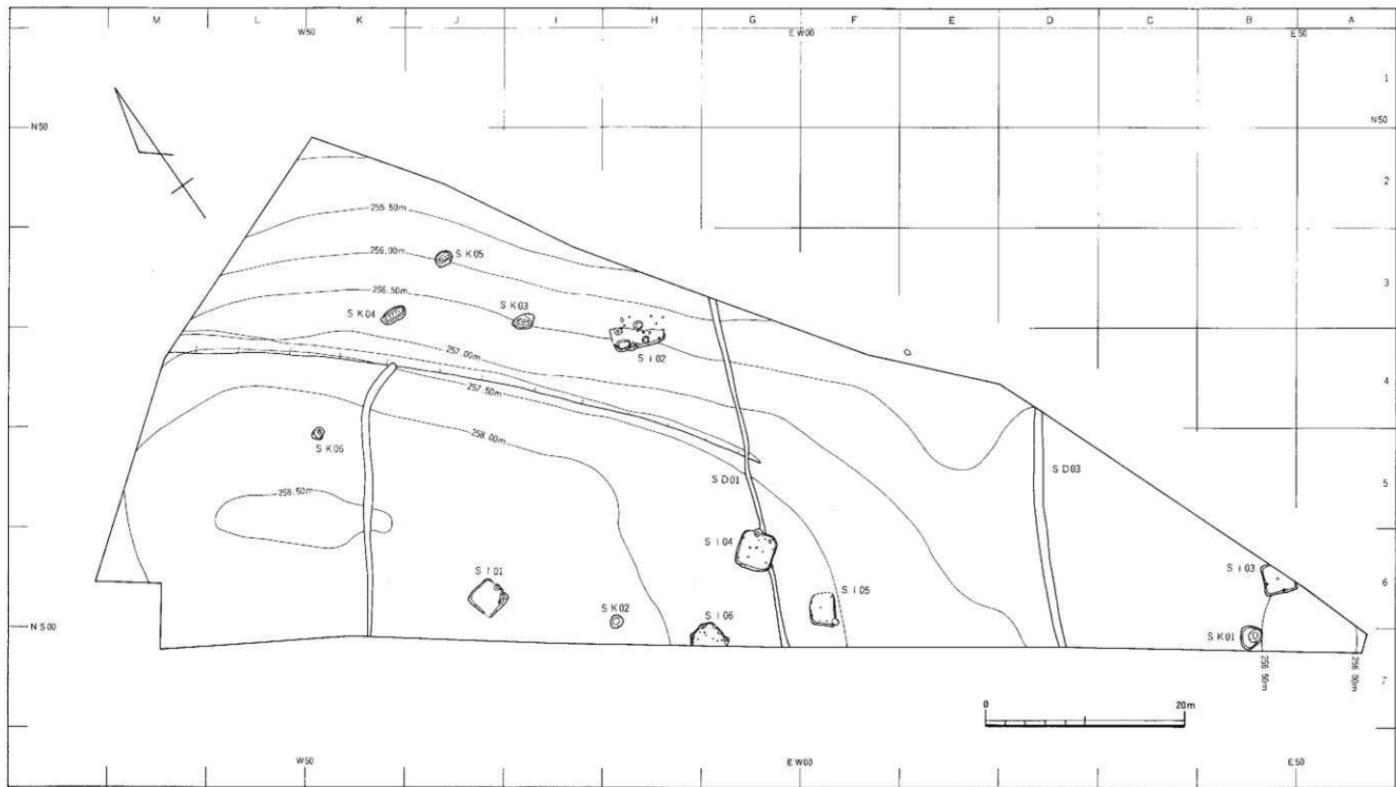
急遽本調査を行ったのは国鉄水郡線の北側部分で、8月に調査を行った支線道路部分(270m)を除く3,500m<sup>2</sup>である。表土除去は、遺構の有無を早急に確認しなければならなかつたため、重機を導入し行った。遺構検出とともに、調査のためのベンチマークを遺跡内に設けた。設置した原点のレベルは257.30mである。

遺構は調査区内において散在した状態で検出されたため、実測にあたっては発掘調査区内に設定した10m方眼の基準杭を利用する簡易造り方の方法をとった。基準とした南北の軸線方向はN35°Eを示している。遺構は大部分地山面において検出したが、掘り込みに際しては2分法による調査方法を用いた。各遺構図の作成は、住居跡・土坑・溝等は1/50で行い、調査区域全体図は1/200の縮尺で行った。写真は、遺構掘り込みの進行状況に応じその都度35mmカメラを使用し、フィルムはモノクロ・カラーリバーサルを併用撮影した。

### 2. 基本層序

昭和56年度の文化センター遺跡調査課の試掘調査によって、第I層は耕作土、第II層は黒色土、第III層は褐色土地山という基本層位を確認しているが、今回の調査においてもほぼ同様の観察結果を得ることができた。大きくは、やはり3層に分層でき、第I層目は耕作土、第II層目は黒褐色シルトであり、第III層目は黄褐色砂質土(地山)となる。調査区域内西側の丘陵頂部付近では、第I層直下において第III層が検出され、東側平坦部および北側斜面部では傾斜角度が大きくなる程第II層の堆積が厚くなっている。遺構は、地山である第III層上面でそのほとんどを検出しているが、溝・土坑の一部は第II層を切り込んで構築されていることが確認された。遺構外から出土した遺物は少なく、I・II層中から若干出土しただけである。

(西間木薫)



第1図 地蔵田 A 遺跡遺構配置図



## 第2章 遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は壁穴住居跡6軒、土坑6基、溝2条、他に焼土遺構とピット数個である。後世の削平・搅乱を受けて、遺存状態ははなはだ良くないが、本遺跡は縄文から奈良・平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。遺物は各遺構および遺構検出面上で出土している。縄文土器と土師器の破片がほとんどであるが、他にS I 02より鉄製紡錘車1点とS I 05より石鎌1点を出土している。

### 第1節 壁穴住居跡

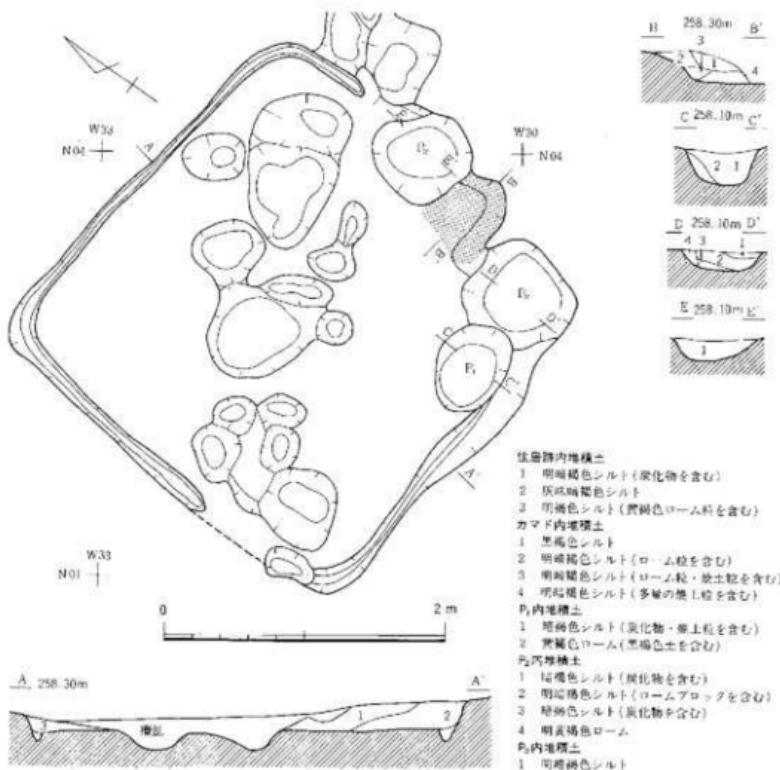
検出した住居跡は6軒あるが、うち3軒は縄文土器を、3軒は土師器を伴うものであった。遺物よりS I 04・05・06は縄文早期末、S I 01・02・03を奈良・平安時代のものと考えたが、前者は丘陵頂上付近に、後者は周辺部にはば位置しており、土地利用の時代的相違を感じさせる。以下調査時に付した番号に従い順次報告する。

#### 1号住居跡 S I 01

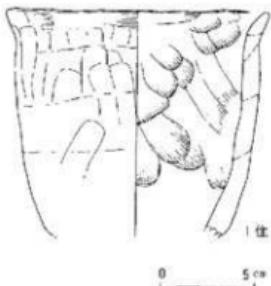
##### 遺構(第2図、図版1)

I・J-6グリッドで検出された住居跡で、調査区より検出した住居跡のうちで最も西側に位置するものである。試掘調査時に検出されていたが、調査後に搅乱を受けたと思われ、南西コーナーから北東コーナーにかけて床面におよぶ搅乱ピットが住居跡を縦断している。従って地山ローム面で検出できたプランは南東コーナーと北西コーナーのみで、搅乱土以外の堆積土もその部分でしか認められなかった。残存する部分の堆積土から考えると自然堆積である可能性が強い。

平面プランはほぼ全周する壁溝が遺存していたことから一辺3mの方形を呈していたことが知られる。床面は搅乱部より南側はややしまりが感じられるが、北側はそれほど感じられない。カマドは右袖だけが残存し、左袖は搅乱によって削り去られている。カマド奥壁は、住居跡東壁ラインよりわずかに飛び出す程度で、焼け面はカマド内だけに留まり焼きしまりは感じられない。住居跡内ピットは3基検出され、P<sub>1</sub>はP<sub>2</sub>を切っており、堆積状況からP<sub>2</sub>を埋めてからP<sub>1</sub>を掘り込んだことがうかがえる。P<sub>3</sub>は住居跡に伴うものとすれば左袖の下に入り込むことになるが、堆積土層は搅乱ピットの埋土とはまったく異なっている。柱穴と考えられるようなピットは認められなかった。



第2図 1号住居跡



第3図 1号住居跡出二土師器

### 遺物 (第3図)

堆積土内より土師器が少量出土している。壺の破片はいずれも調整が粗雑で、器形もかなりくずれるものと思われる。杯片は一点で、口クロを使用し、内面黒色処理を施す。

### まとめ

本住居跡は小型の住居跡で、半分は耕作時の搅乱によって破壊されている。遺物からその時期をみるならば表杉ノ入式期と考えられ、壺等は末期的な様相を呈している。

(安田 稔)

## 2号住居跡 S 102

## 遺構（第4図、図版2）

北側斜面中腹、H-4グリッドで検出された住居跡である。北部約半は削平を受け消失しており正確なプランは描けないが、残存する南壁から推定すれば、一辺約4.7mの方形を呈するものと思われる。検出面は地山・黄褐色砂質土上面である。

堆積土は1層で、黒褐色砂質シルトが主に堆積しているが、含有する黄褐色土粒・炭化物・焼土粒によりさらに5層に細分できる。なお、炭化物・焼土は細粒となって、ほぼ全体に含まれている。自然堆積と思われるが、最深部で10cmを残すのみであり明らかでない。

床面はかなり凹凸があり、炭化物・焼土塊が散乱しており、しまりもあまり感じられない。壁は南面でゆるく立ち上がっているが、10cm程を残して削られており、東・西壁はかならずしも明確でない。カマド・柱穴は検出されなかったが、焼土塊が遺構内外に残存し、カマドの痕跡と考えられる。

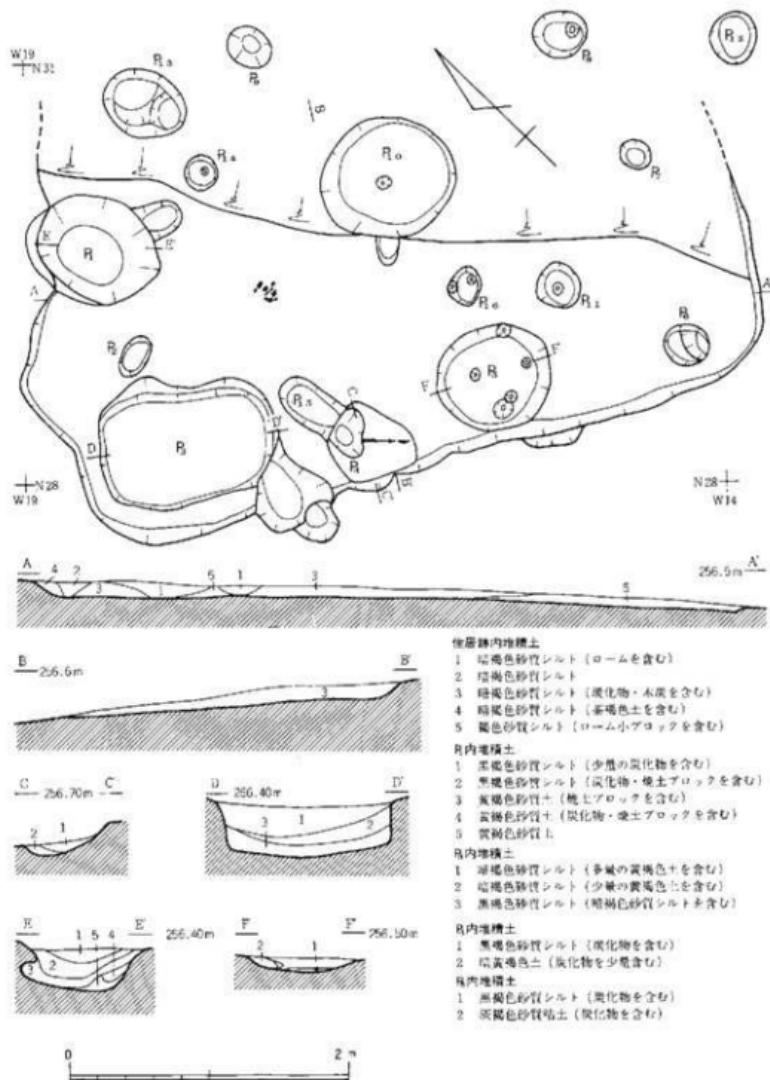
ピットは10数個検出しているが、遺構に伴うと思われるものは3個だけである。 $P_1$ ・ $P_3$ は貯蔵穴と考えられる。 $P_1$ は西側壁面にとり付いて検出された。長軸92cm、短軸70cmの楕円形のピットで、断面は壁側を深く抉って外にふくらみ、内側ではゆるやかに傾斜して立ち上がる不整ながら袋状を呈している。堆積土は5層に分かれ、上層では炭化物・焼土ブロックが多量に混っている。第5層は地山の黄褐色土を多量に含み、壁面崩壊によるものと考えられる。深さ30cmを測り、自然堆積と考えられる。 $P_3$ は南西コーナーに検出したピットで隅丸方形を呈す。縦13m、横0.8m、深さは40cm。下端もほぼ同形で箱形のピットである。堆積土は3層で暗褐色シルトを主体として埋められている。炭化物・焼土をまったく含まないところから、住居跡使用の時期に一時使用した後埋め戻されたものと推定される。 $P_5$ は南壁にとり付いて検出された浅い落ち込みで、周間に焼土塊が散乱していたことからカマドのあった位置とも考えられるが確証はない。

遺存状態は不良であり判断はできないが、炭化物・焼土の散乱状況から、焼失家屋である可能性が強い。

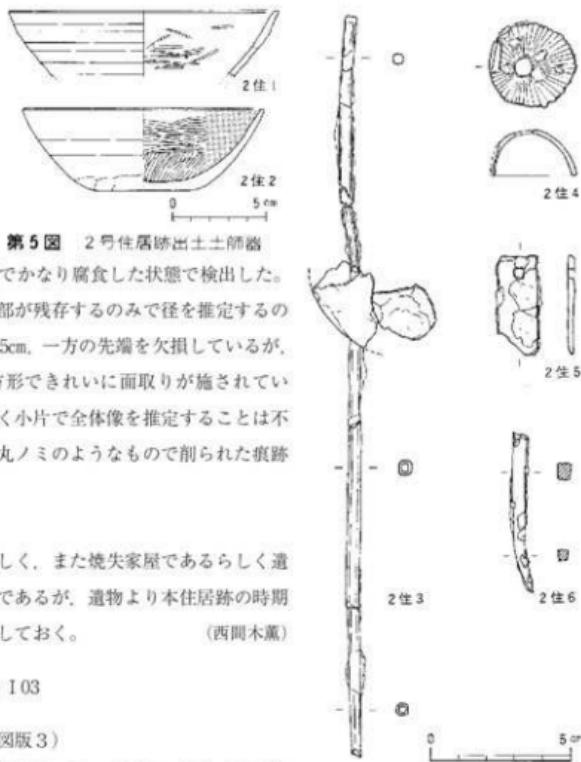
## 遺物（第5・6図、図版12）

遺物はごく少量出土している。そのほとんどは土師器で、 $P_1$ から出土しているがいずれも細片である。他に鉄製紡錘車が1点、性格の不明な木製品1点を出土している。2住1はロクロ成形の杯の口縁部であるが、体部から底部については欠損している。 $\ell-3$ 中より出土したもので、内面は横方向にかなり密なミガキを施し黒色処理はしていない。2住2はロクロ成形の杯である。体部から底部にかけて手持ちヘラケズリ、内面は底部が放射状、体部から口縁にかけては横方向にヘラミガキを施した後黒色処理をしている。

第2図 地蔵田A道路



他に  $P_1$  より壺の底部および床面より小型の鉢の底部と思われる細片が出土しているが、器形などについて推定できる資料はない。



第5図 2号住居跡出土土器

鉄製紡錘車は  $P_1$  檜出面でかなり腐食した状態で検出した。紡輪は腐食がすすみ、一部が残存するのみで径を推定するのは困難である。紡茎は 26.5cm、一方の先端を欠損しているが、断面は径 0.4cm、ほぼ正方形できれいに面取りが施されている。木器については、ごく小片で全体像を推定することは不可能であるが、外側面に丸ノミのようなもので削られた痕跡が観察された。

### まとめ

本住居跡は、削平が著しく、また焼失家屋であるらしく遺存状態は良くない。少数であるが、遺物より本住居跡の時期は 9 世紀初頭頃のものとしておく。

(西間木薫)

### 3号住居跡 S I 03

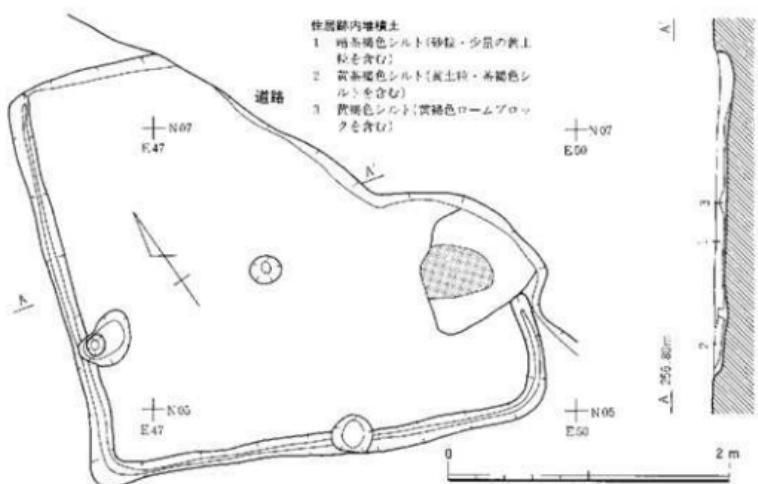
#### 遺構 (第7図、図版3)

調査区東側平坦部の東端付近、B-6 グリッド内で検出された住居跡で、北側 1/4 程が生活道路により破壊されている。検出面は地山黄褐色土上面であるが、検出面より床面までの深さはわずか 8~10cm を残すのみでかなり削平を受けている。プランは南北約 3m、東西 3.2m のほぼ方形を呈する。堆積土は茶褐色シルトで 2 層に分かれると、順次的に観察されるところから自然堆積と思われる。貼床はなく、壁溝が幅 20~25cm、深さ 5~8cm で巡らされている。カマドは検出されなかったが、北側道路部分を一部拡張したところカマド燃焼部と思われる焼土域が発見され、カマドの位置かと推定されるが、付帯する他の施設は検出されなかった。ピットは 3 個検出したが、本住居跡に伴うものではないようである。

#### 遺物

総数で 30 点出土しているが、いずれも細片である。中に縄文土器片 5 点を含んでいるが、丘陵

第6図 2号住居跡出土鉄製品



第7図 3号住居跡

上の住居跡と同時期のものであり、流れ込んだものと思われる。多くは土器器で、杯は口クロ成形後内部は丁寧にヘラミガキをし黒色処理を施したものである。底部3片には回転ヘラケズリの痕が観察される。壺の胴部破片にはすべてではないが、ロクロによる成形痕が残っており、口縁はナデである。他はいずれも細かく磨滅しており、調整などを判断するには至らなかった。

### ま と め

本住居跡はかなりの削平を受け遺布状態が悪く、時期について明確にすることは困難であるが、遺物にロクロ使用のものが多く、平安時代初頭と考えられる。

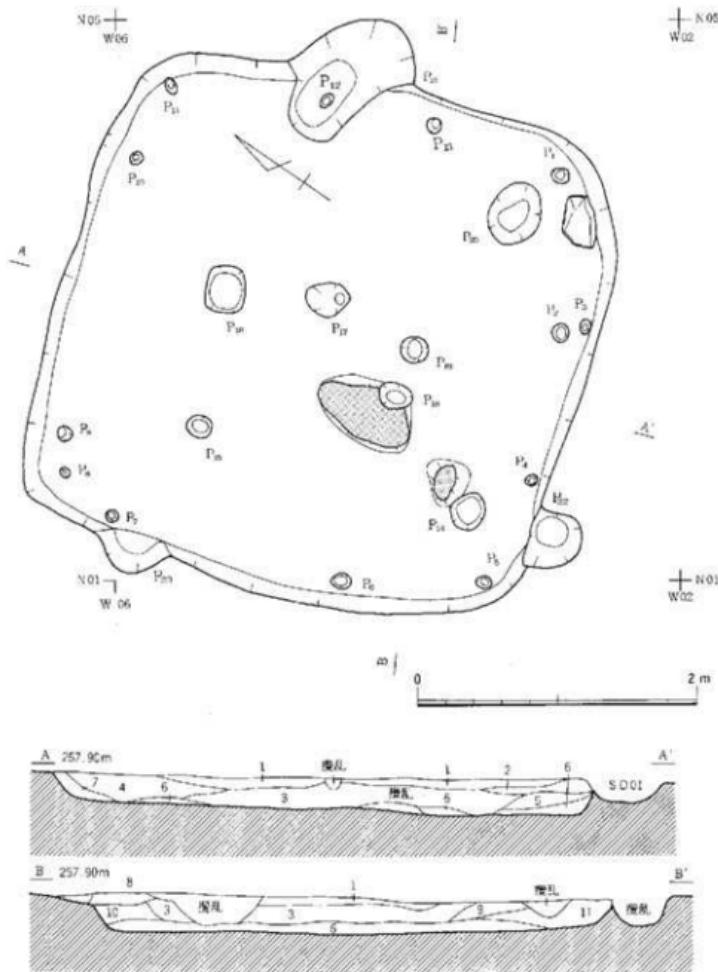
(西間木薰)

### 4号住居跡 S104

#### 遺構 (第8図、図版4)

調査区中央やや東よりで検出された住居跡で、5・6号住居跡と共に丘陵の東緩斜面に北西風を避けるように円弧状に並んでいる。検出面は地山黄褐色土面で検出時は円形に近い梢円形と思われたが、中央から壁側に向けて掘り込んだ結果、1辺3.8m程の隅丸方形であることが確認された。壁高は15~20cmで比較的残りがよく、堆積土は暗褐色土を基調としたシルト質土が数層堆積しているが、堆積状況に乱れがなくブロックの混入もないことなどから自然堆積と考えられる。

住居跡内の北コーナー部には炭化物が集中して遺存していたが、住居の構築材のようなものではなく、木質は認められるものの極めて細い感じのものであった。住居跡中央よりやや南コ



## 住居跡内埋積土

- |                      |                         |
|----------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色シルト(黒褐色土を含む)    | 6 石褐色シルト(黄褐色ローム・炭化物を含む) |
| 2 茶褐色シルト(茶褐色土を含む)    | 7 喀褐色シルト(多量の黄褐色ローム粒を含む) |
| 3 黄褐色シルト(炭化物の塊状を含む)  | 8 黑褐色シルト(茶褐色・ローム粒を含む)   |
| 4 密褐色シルト(黄褐色ローム粒を含む) | 9 茶褐色シルト                |
| 5 粗褐色シルト             | 10 喀褐色シルト(黄褐色ローム粒を含む)   |

第8図 4号住居跡



第9図 4号住居跡出土繩文土器  
近の破片で尖底を呈すると考えられる。4住1・3の内面には条痕が観察される。

### まとめ

本住居跡は遺物から縄文時代早期末の住居跡と考えられる。平面プランは隅丸方形を呈し、柱穴の配置に規則性は見い出せない。焼土面は床面より若干浮いており、住居跡内での火の使用は考えられるものの、明確な炉跡的な施設は見うけられない。

(安田 稔)

### 5号住居跡 S 105

#### 遺構(第10図、図版5)

F-6グリッドで検出された住居跡で3軒並ぶ東側の住居跡である。調査区を全体的にみると本住居跡付近から東斜面にかけてL-IIが堆積しており、検出状況も住居跡の西コーナー付近はプランが捉えやすく深さも15cmあるが、東コーナー側はL-II黒褐色土の堆積と耕作による擾乱のために全体的に地表面まで下がった段階で確認され、壁の立ち上がりも鈍角で検出面との比高差も2cmしかなく、さらに一部は電柱工事によって完全に破壊されている。平面プランは長軸約3.2m、短軸約2.5mの隅丸方形を呈すると考えられる。

住居跡内中央よりやや北側には床面が焼けた部分があるが、焼け方は極めて弱く地山黄褐色ロームの床面がわずかに赤味を帯びている程度であった。ビットは住居跡内で8個検出され、径8~15cm、深さ15cm前後のもので、中に微量の炭化物を含むことから、おそらく柱痕と考えられる。 $P_9 \cdot P_{10}$ は上層からの擾乱ビットである。

#### 遺物(第11図、図版9)

$\ell-2$ から出土したもので、胎土中に纖維を含む土器である。5住1は口縁部破片で端部が強

ナーよりでは2ヵ所に焼土面が検出されたが、床面が焼けているわけではなく、床面から5cm程浮いた状態で検出されたものである。ビットは壁際と住居跡中央付近で検出されているが、炭化物の有無や深さなどから確實に柱痕と考えられるのは $P_8 \cdot P_9 \cdot P_{10} \cdot P_{12}$ で $P_{18} \sim P_{23}$ は上層から掘り込まれたビットである。

#### 遺物(第9図、図版9)

4住1~3は $\ell-2$ 、4住5は床面直上である。いずれも胎土に纖維を含み、撚糸文を施している。4住1・4は胴部破片で沈線による幾何学的な文様が施されている。4住5は底部付近の破片で尖底を呈すると考えられる。

く外反し、口縁端部から撲糸文が施され回転方向の異なるものが一部交差しているものがある。また、5住2・3の内面には擦痕、5住5・8には条痕がみられる。ほぼ底面から出土した石鏃は無茎のもので、長さ4.6cmと極めて長形である。内外面に入念な剥離を加え、基部にはいくぶんえぐりがみられる。石質は流紋岩と思われる。

### まとめ

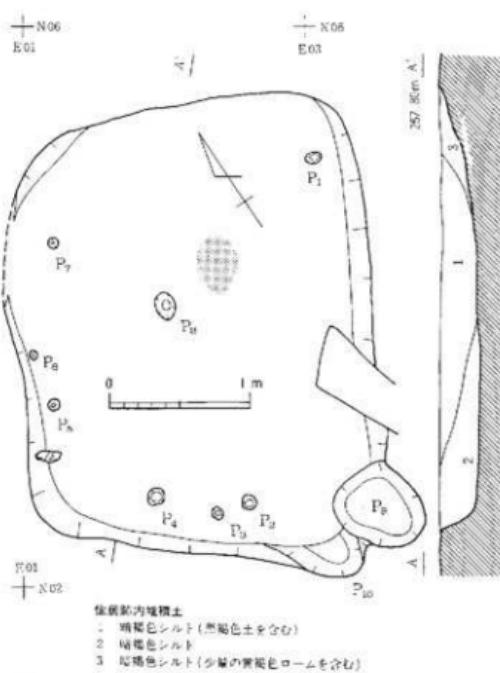
本住居跡も遺物から縄文時代早期末の住居跡と考えられる。平面プランは隅丸長方形と思われ、4号住居跡よりは面積的に小さくなるようである。柱痕は壁際に巡るようであるがやはり明確な規則性はない。住居跡床面の中央にはわずかに焼けた面があり、住居跡内での火の使用が認められる。

(安田 稔)

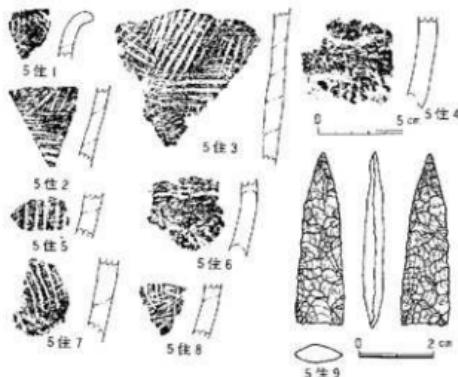
### 6号住居跡 S I 06

#### 遺構(第12図、図版6)

G・H-6・7グリッドで検出された住居跡であるが、南側半分は鉄道関連の国有地となっていることから調査区外となり、拡張による調査も

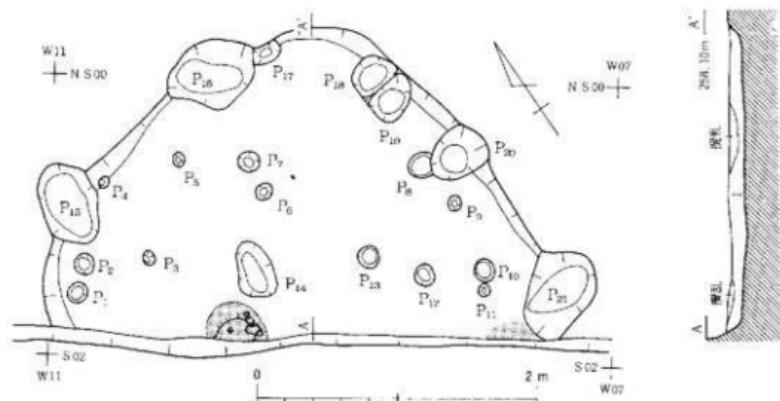


第10図 5号住居跡



第11図 5号住居跡出土縄文土器・石器

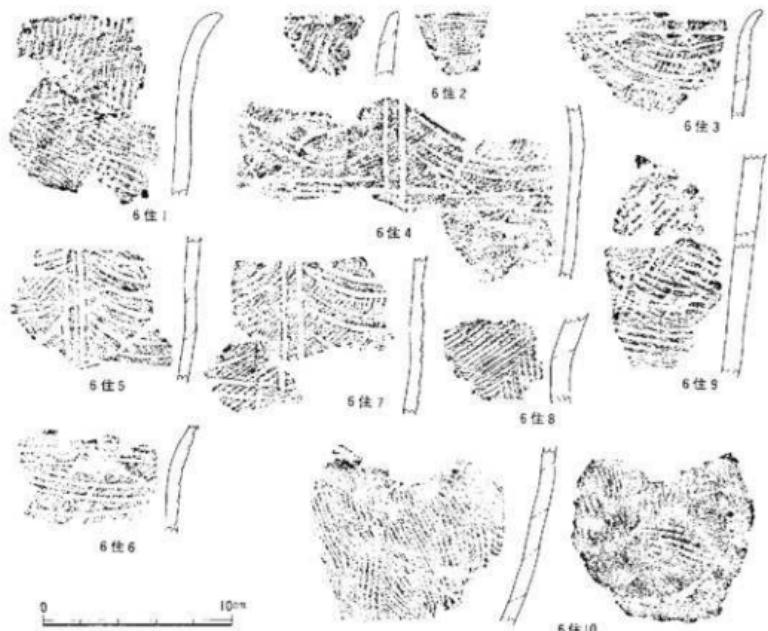
第2図 地蔵田A道路



第12図 6号住跡

住居跡内地盤土

1. 暗褐色シルト(少量の黄褐色ロームを含む)



第13図 6号住跡出土土器

行えなかった。検出面は4・5号住居跡同様中央部から掘り込んだ結果、搅乱ビットとの重複はあるものの壁面がゆるやかに立ち上がる一辺3m程の隅丸方形になり、暗褐色シルトが一層堆積していた。堆積土は一層であるが、ブロックの混入や大きな乱れが認められないことから自然に埋没したものと考えられる。

住居跡内には焼け面が2ヵ所とビットが存在する。2ヵ所の焼け面は床面であるローム面が固くなるほど変化はしていないが、上には1~2cmの焼土の堆積がみられ、中央部のものからは遺物が出土している。住居跡内では21個のビットが検出されているが、住居跡内床面で検出されたビットはP<sub>3</sub>~B<sub>5</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>で、それ以外のものは住居跡上層からの耕作による搅乱ビットである。

#### 遺 物 (第13図、図版10)

6住1・9は住居跡内中央の焼け面より出土したもので、他は $\ell - 1$ の下方から出土したものである。6住1・2は口縁部の破片であるが、6住1の端部はやや外反しているのに対し、6住2は直線的である。両者とも端部から撚糸文が施されているが、6住1の内面の口縁端部にも撚糸文がみられ、6住2では軽い条痕が施されている。6住3~7は口縁部付近で6住1・2に比べ細い撚糸文を地文とし、沈線による直線と連弧の組み合わせ文様を施している。内面は磨滅が著しいが、特別な条痕などは認められない。6住9・10は胴部の破片で撚糸文が施され、6住10の内面には軽い条痕が認められる。6住8も胴部の破片であるが、他のものより焼成がよく4住3に類似している。胎土にはいずれも纖維を多く含んでいる。

#### ま と め

本住居跡も4・5号住居跡同様、縄文時代早期末の住居跡と考えられる。調査できたのが住居跡の半分であると考えられることから、平面プランは隅丸方形と呈すものと思われる。柱痕と認められるビットの配置にはやはり明確な規則性は認められない。焼け面は4・5号住居跡に比べ強く焼けており、中央の焼け面からは土器が出土していることから、住居跡内の火の使用が充分に考えられる。

(安田 俊)

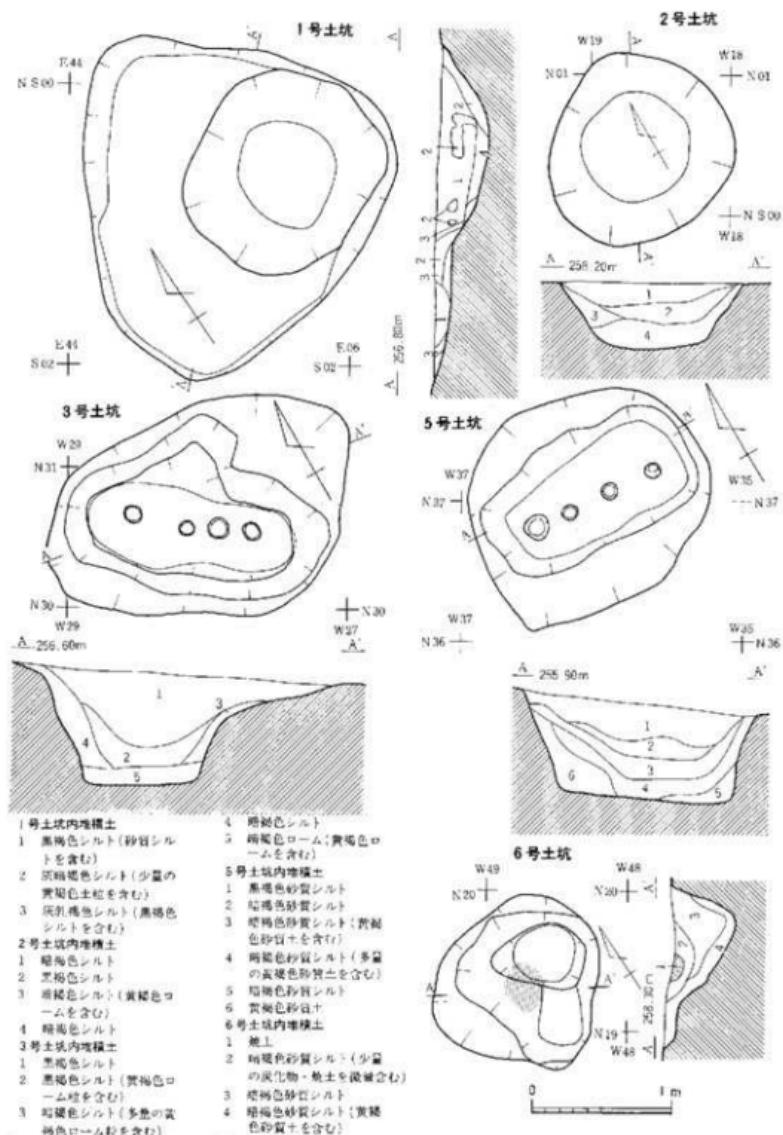
## 第2節 土 坑

検出された土坑は6基あるが伴出した遺物はない。形状から陥穴と考えられる3~5号土坑以外の他の3基については、時期・性格とも不明である。以下それぞれ説明を加える。

#### 1号土坑 SK01 (第14図)

調査区東端B-7グリッドに位置する。検出面は、地山・黄褐色土上であるが、その上層から掘り込まれた可能性がある。プランは南北に2.25m、東西に2.05mを測り、不整円形を呈する。

第2編 地藏田A道路



第14図 1～3・5・6号土坑

深さは13cm程で、底面はほぼ平坦であるが東側に円形の落ち込みがあり、最深部は39cmを測る。堆積土は4層に分けられる。暗褐色砂質シルトに黄褐色土が混入し各層をなすが、上層土と下層土が入り混じって埋められており、人為堆積と考えられる。

伴出した遺物はなく、時期は不明であるが埋土の状態からすると最近のものと考えられる。

### 2号土坑 SK02 (第14図、図版7)

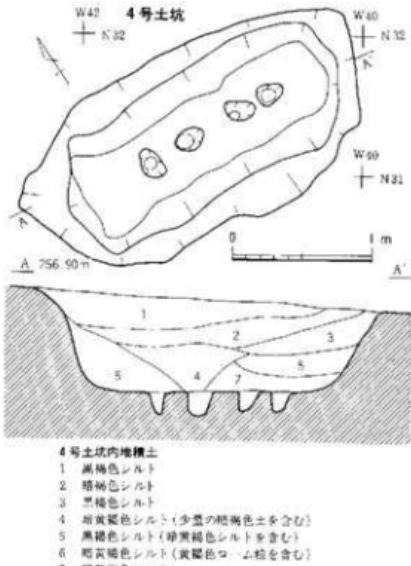
H-5グリッドに位置する。地山・黄褐色土上面で検出し、平面プランは1.67×1.65mの円形を呈する。深さは47cmを測り、断面は鍋底形である。堆積土は4層に分けられ、暗褐色シルトを主体として分層されるが、整然としており自然堆積と考えられる。第3層に黄褐色土粒が混ざるのは、埋没過程で壁面崩壊が著しい時期のものであろうか。土層から古い時期である印象を受ける。

伴出遺物はなく、時期・性格については不明であるが、東側に縄文の住居跡3軒を検出しており、貯蔵穴様の機能を果たした可能性がある。

### 3号土坑 SK03 (第14図、図版7)

調査区北西部斜面上I-2グリッドで検出した土坑である。平面プランは不整梢円形を呈し、長軸2.3m、短軸1.4mを測る。底面プランは不整長方形を呈し、上端長軸方向に対し、下端の長軸方向は東に約30°ずれて掘り込まれている。埋没の過程で、東側の壁の崩壊が著しく、構築時よりもずれて検出されたものと思われる。深さは83cmを測り、断面はロート状を呈する。堆積土は5層に分けられる。第2層より下の層では、地山の黄褐色土を下層にいくほど多く含んでおり、壁崩壊による自然堆積と考えられる。底部に4個の小ピットを検出した。縦位に並び、径は15cm内外のいずれも円形を呈すが、柱痕は確認できなかった。

形状より、いわゆる陥れ穴状土坑と考えられるが、遺物は伴わず、時期・性格について明言することはできない。



第15図 4号土坑

#### 4号土坑 SK04 (第15図、図版7)

K-2グリッドで検出した。SK03の西方、およそ10mに位置する。検出面は、地山の黄褐色砂質土上である。プランは不整梢円形を呈す。径は長軸2.6m、短軸1.3mを測る。深さは66cmとやや浅いが、断面形は底面から急峻に立ち上がり、上端にいくにつれて外側になだらかに開く、ロート形を呈す。堆積土は7層に分層される。第6・7層は地山の黄褐色砂質土粒を含み、その上層でややうする。自然堆積と考えられる。底面は平坦で、4個の小ピットを持っている。それぞれ径20cm内外の不整円形を呈すが、ピット底はほぼ整円である。深さは約20cmを測る。

伴出遺物はなく、時期・性格については確認はないが、いわゆる陥し穴状土坑と考えられる。

#### 5号土坑 SK05 (第14図、図版7)

J-2グリッド、SK04の東方約5mで検出された土坑である。検出面は地山・黄褐色土面で平面プランは長軸で1.72m、短軸で1.51mを測る不整円形を呈する。底面プランは長梢円形を呈し、構築時、長方形状の土坑であったものが、埋没過程で壁崩壊し広がったものと考えられる。深さは70cmを測り、断面はロート形である。堆積土は6層に分けられ、第6層は黄褐色砂質土、第3～5層に黄褐色砂質土が混ざる。上層は、表土と同様の黒褐色砂質シルトにより埋られており、自然堆積と考えられる。底部に4個の小ピットがあり、ほぼ縦一線に並ぶ。径は12～17cmで、円形を呈す。深さは10～15cmを測り柱痕は確認できなかった。形状から、いわゆる陥し穴状土坑と考えられるが、伴出遺物はなく、時期・性格を明らかにすることはできなかった。

なお本土坑と、前述の3・4号土坑との関連性について一言触れる。この3基は、形態的特徴に近似したところがあり、検出区域も本遺跡の中核を成す繩文集落跡が本遺跡を含む丘陵東側緩斜面上に集中するのに比し、本土坑は、北西斜面中腹から下位に位置しており、いわば居住エリアの周辺部にあたる。また、3号土坑はややずれるが、4・5号土坑の底部長軸方向はほぼ東西を示しており、連続して同方向に穿たれた可能性がある。

今次の調査において、本土坑群について繩文集落との関係及びこの3基間の関連性を裏付けるに充分な資料を得ることはできなかったが、3基の土坑は少なくとも同時期に同一の目的をもって構築されたものであると推測される。

#### 6号土坑 SK06 (第14図)

調査区西部、丘陵頂上付近のK-3グリッドにおいて検出された土坑である。検出面は、地山黄褐色土上である。平面プランは不正円形であり、径は長軸1.16m、短軸は1.15mを測る。深さは最深部で47cm、断面形は不整である。堆積土は4層に分層され、下層は自然堆積と考えられるが、

上層第1・2層の焼土塊及び焼土粒は後に投棄されたものである可能性が強い。検出面で土師器片が1個出土している。ロクロ整形による内黒の杯の口縁部で、時期を明確にすることはできないが、1号住居跡出土の土師器よりもやや古いもののと考えられる。しかし、土坑内に他の遺物はまったくなく、本土坑に伴う可能性はない。時期・性格とも不明であり、最近のものである可能性が強い。

(西間木薫)

### 第3節 その他の遺構と遺物

本節では、竪穴住居跡と土坑以外に検出された1～3号溝状遺構・ピット群・焼土塊などの遺構および遺構に伴わざり出土した遺物について述べることにする。なお、これらの遺構についてはいずれも伴出する遺物は少なく、その他確証となる資料にも乏しい。したがって、それについて時期や性格を明確にすることはできないが、他遺構との切り合いや、検出した土層の状況からすると、いずれも比較的後代のものと考えられる。以下種類ごとに報告する。

#### 溝状遺構 SD01～03（第1図、図版8）

本調査区より検出した溝状遺構は3条ある。いずれも調査区を南北に走り、調査区外に延びる幅が細く浅い溝である。

1号溝状遺構は、G-3～7グリッドにかけて検出された。確認した全長は約31m、調査区南からS-I-04を切ってさらに北へぬけ、幅は56cm、深さは20cm以上、底面は皿状に窪んでいる。地山の黄褐色土上で検出し、堆積土は表層と同質の暗褐色シルト1層である。調査区南壁で断面の立ち上がりを見ると、表土下L-II（黒褐色シルト）を切って広がっており、表層より掘り込まれた可能性がある。

2号溝状遺構は、調査区西側丘陵頂上部から北に下がるK-4～7グリッドにかけて検出した。長さ、およそ27m、北端は北斜面上の段差のつく所で終わり、南端は調査区外にかくれる。幅30cmから広いところで約1m、深さは30cm程度である。地山面で検出したわけであるが、上層から掘り込まれた可能性がある。堆積土は暗褐色シルト1層であり、新しいもののようにある。

3号溝状遺構は、東側の一段低い平坦部、D-4～7グリッドで検出している。検出面は地山上で、幅1m、長さ24mを測り南北に走る。暗褐色シルト1層が堆積しており、1・2号同様上層より掘り込まれたものと思われる。上層からの深さを推定すれば約50cm前後である。

遺物は1号・2号溝から出土している。縄文土器・土師器・須恵器の細片であるが、縄文の器種は深鉢、土師器は壺の口縁部・胴部および杯の底部が各1点、須恵器は壺の口縁部・胴部である。須恵器を除いては、かなり磨滅していて判断は困難であるが、1号溝出土の杯底部は、外面

に回転ヘラケズリ、内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。また、2号溝出土の縄文土器片は、口唇部に小波状の刻目を入れ、内外面に擦痕のある纖維を多く含む深鉢の口縁で、これらの遺物はいずれも底面より浮いた状態で出土しており、溝の埋没の過程で流れ込んだものであろうが、磨耗の状態からも廃棄された後、相当移動し今日に至ったものと考えられる。

### ピット群

ピットはC-6・7グリッドの軸線付近と、E-4・5グリッドに集中して、計14個検出されている。埋土は新しく、位置も乱雜で相互関係を推定することはできない。7号ピット埋土中より出土した土師器杯口縁片は、ロクロを使用した内黒のものであるが流れ込みのものと考えられる。いずれも時期・性格は不明である。

### 焼土遺構

D-6グリッドに位置し、第Ⅱ層黒褐色シルト上面で検出した。平面プランは不整形で深さは15cmを測る。周辺より土師器が3点出土しているが、焼土と関連性があるかどうかは不明である。検出された層位から、どの遺構よりも新しいと考えられる。  
(西間木薫)

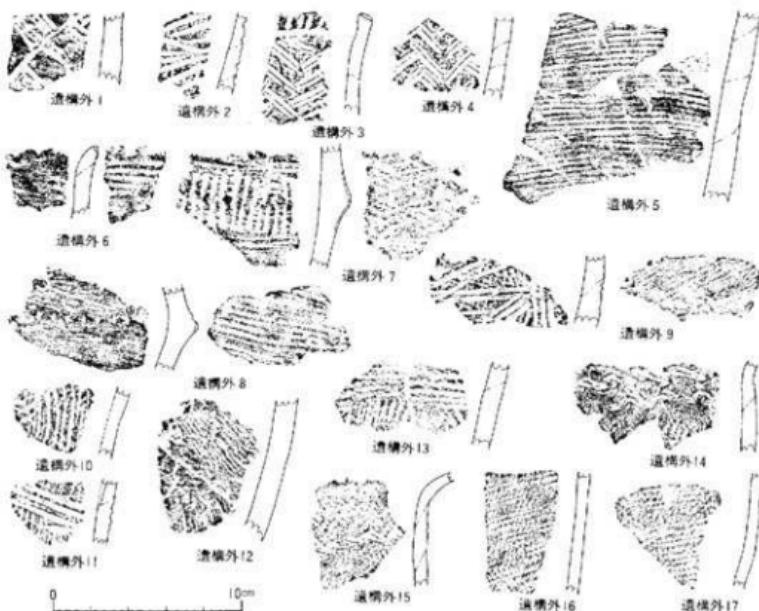
### 遺構外出土の縄文土器

#### 縄文早期の土器（第16図、遺構外1～13、図版11）

遺構外1・8は竹管による円形刺突と沈線を組み合わせたもので、遺構外1は沈線で区画された部分をさらに竹管の刺突で充填している。遺構外5～7は貝殻条痕を施文するもので、遺構外6の口端部にはきざみを有し、遺構外7の隆带上にはやはり貝殻による沈線状の条痕が上下から施文されている。遺構外2～4は竹管による沈線文が施されるもので、遺構外3・4は2本1組の沈線である。遺構外2は横走する沈線と斜走する沈線の組み合わせで、遺構外3・4は鋸歯状の沈線である。なお遺構外3・4は同一個体と思われ、口端部にきざみを有し、地文として縄文が施されている。遺構外9～13は撲糸文を施文するもので、遺構外9・11の内面には条痕がみられ、外面には竹管による沈線が幾何学的に描かれている。上記した土器片はいずれも胎土に纖維を多く含んでいる。

#### 縄文前期の土器（第16図、遺構外14～17、図版11）

調査区西端の風倒木内よりまとめて出土したものの、同一個体のものと考えられる。遺構外14・15は口縁部から肩部にかけた破片で、強く外反する口縁を有し、肩部には縄文の上に綾格文が2段に施されている。縄文はLRの単節斜縄文であるが、肩部と胴部では原体の回転方向が異なっている。胎土に纖維は含まれていない。  
(安田 稔)

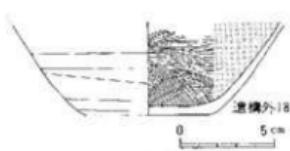


第16図 遺構外出土縄文土器

## 遺構外出土の土師器

上記で述べた縄文土器の他に、土師器・須恵器片が出土している。しかし、そのほとんどは細片でかなり磨滅している。壺の体部・口縁部、杯片であるが、そのうち1点、杯の体部から底部にかけて図化して第17図に掲げた。

遺構外18は調査区西側L-6グリット付近の地山上で検出した。周辺に遺構はなくかなり遠方から運ばれた可能性がある。約1/4程遠存しており、底径6.6cm、残高5.0cmを測る。ロクロにより成形した後、外面下端より底部にかけて回転ヘラケズリ、内面は体部は横方向、底部は斜方向に、ていねいなヘラミガキを行った後黒色処理を施している。外面体部中央にかすかに墨書のあとが見えるが判読できなかった。表衫ノ入式の時期に相当し、3号住居跡の時期に一致すると考えられる。



第17図 遺構外出土土師器

(西間木薫)

## 第3章 考察

### 第1節 繩文時代の遺構と遺物

#### 遺物について

縄文時代の遺物は早期から前期の土器が出土している。4～6号住居跡出土の遺物はその特徴から大烟G式土器に比定されるものと考えられる。5号住居跡出土遺物の中には口縁部に沈線文を施すものは含まれていないが、量的な問題も含めて他の住居跡との時期差を表す根拠とはならないであろう。6号住居跡においては沈線文を施さないものが焼土部分から検出され、沈線文を施すものは焼土外より出土したことから、沈線文を施すものとそうでないものとでは、その用途に違いがあったとも考えられる。また実際に沈線文を施す土器は、施さないものに比べ器厚も薄く、撫糸文も細い原体を用いている。6号住居跡は住居内での火の使用が最も顕著に確認された住居跡で、その辺を考え合わせると興味深い。

順序はやや逆になるが、遺構外1・8はその特徴から鶴ヶ島台式と考えられるが、遺構外8の方が新しい要素を有しているといえる。遺構外5～7は茅山式系の土器と考えられ、条痕文がきわ立ち、装飾的要素の少ないことから茅山上層式と考えられるが、表採ではあるものの塙町南原遺跡、棚倉町日向遺跡(井上1977)などでは、同種の土器が茅山下層式と考えられる土器と共に出土しており、検討を要する。

遺構外2～4は、縄文を地文として2本1組の沈線文を加えたもので、遺構外3・4は同一個体と考えられる。遺構外3は口唇部に刻みを有している。この種の土器は最近阿武隈地区の調査などでも類例が増し、沈線文の系譜から時期的な流れについて検討が加えられようとしているが、ここではその見解を待つことにし広義の大烟G式の範疇で捉えておくことにする。遺構外9～12は4～6号住居跡出土遺物と同じ特徴を有し、大烟G式と考えられ、沈線の特徴は4住1と類似している。

遺構外14～17は風倒木内より出土したもので、胎土には纖維を含まず頭部に2段の綾络文を有し、以下は縄文である。おそらく大木4式と考えられる。

#### 遺構について

今回検出された住居跡は3軒で早期末の住居跡である。平面形は4号住居跡が最も整っており、隅丸方形を呈している。他の2軒はやや明確さに欠けるが、5号住居跡はやや長方形になるものと考えられる。早期末と考えられる住居跡は、石川郡石川町上森屋段遺跡で1軒、田村郡都路村山口E遺跡で1軒、昨年調査が行われた相馬郡飯館村松ヶ平A遺跡で数軒検出している。山口E

遺跡の住居跡は隅丸方形を呈しているが、他の住居跡は定まった形を有さないようである。屋内における焼土は上森屋段、松ヶ平A遺跡で認められ、松ヶ平A遺跡では屋外にも数多くの焼土遺構が検出されている。また焼土付近には本遺跡の4・5号住居跡、松ヶ平A遺跡の屋内・屋外のものを問わず扁平な石が検出されている。柱穴は山口E遺跡では対角線上に4基認められるが、他は住居跡中央を円形に開むような配置で検出されている。

以上のことを考えると本遺跡を含めてこの時期の住居跡には、各遺構を通じて明確な共通点は認められず、特定の制約はないような感じを受ける。また屋内における火の使用は、この時期あたりから徐々に目的をもって屋内に取り込むのではないかと思われるが、松ヶ平A遺跡などを考えると、まだ屋外においての火の使用も活発に行われていたものと考えられる。

陥し穴状遺構は3基検出されているが、住居跡が北西風を避けるように東側緩斜面にあるのに対しても、北側の斜面に3基ではあるが千鳥掛け状に配置している。住居跡と陥し穴状遺構が近接して発見された例を他にみないし、本遺跡においても住居跡と陥し穴状遺構が同一時期に存在したと考えられる根拠は何もないが、その位置関係からは何らかの関連を想定させる。いずれにしても地蔵田A遺跡は水郡線を隔てて南側にもその広がりが知られていることから、残りの部分に調査が加えられた時により確かな考えが導き出せるであろう。

(安田 稔)

## 第2節 平安時代の遺構と遺物

この時期の遺構は竪穴住居跡が3軒だけである。いずれも相当に削平・搅乱を受けており良好な散布状態を示すものはない。遺物も住居跡出土のものを含めてかなり磨滅しており、細片化して遺跡全域に散乱した状態で検出された。本遺跡の立地する丘陵は地形より長期にわたって数次の削平を受けており、その都度遺構が破壊され遺物が移動したものと想像される。

### 遺物について

本遺跡より遺物は土師器・須恵器・鉄製品および木製品が少量ずつ出土しているが、図化し得た土器は土師器の杯と甕の2種類4点のみであった。器形や形態的特徴については前述しているので、ここではその歴史的性格について若干記する。

杯は図化した3点に加え遺構内外より出土した細片も含めてすべてロクロが使用されており、調整は体部下端より底部に回転ヘラケズリを施したものと、底部糸切りによる切離し後手持ちヘラケズリを施したものとの2技法を見るだけである。2住2・遺構外18は前者であり、他に3号住居跡床面上あるいは遺構外より数片同技法によるものが出土している。後者に属するのは2号住居跡出土の底部小片1点のみである。資料の絶対量が少なく即断するわけにはいかないが、前者および後者を使用した時期に大きな時間差はないものと思われる。本遺跡の東方約300m離れて

立地する唐松A遺跡に、前者と同様の手法を用いた杯片を多く出土する5号住居跡があり、同時に集落を形成していたことをうかがわせる。なお2号住居跡は焼失家屋と思われ、2住1は2次的な火を受けて内黒がとんで赤く変色したものと考えるのが妥当であろう。

甕は1住1以外は磨滅の著しい小片ばかりで、調整等の特徴を捉えることは困難であった。1住1は、前章で述べた通り、かなり粗雑な作りで、器面は凹凸が激しく器形もくずれたものである。成形後粗く調整して焼いたらしく、内外面の圧痕もそのまま残されている。需要に相俟つて技法の省略がすすむが、そうした簡素化の傾向を感じさせる1点である。

技法等の観察により、本遺跡出土の土師器の年代は表杉ノ入式期に属するものと判断した。しかもそれほど時期差のない、比較的短期間に集中して集落が形成されたものと考えて間違はないだろう。

#### 遺構について

竪穴住居跡3軒のうちS I 01と02は一辺が約3m程の小型のものである。壁溝とカマドを検出ましたが、柱穴らしいピットは見当たらなかった。削平が著しく、カマドはその位置を確認したのみで規模等については不明である。S I 02は一辺4.7mと前2者に比べればやや大きくなる。付帯施設は貯蔵穴のみで他は検出されなかつたが、カマドの崩壊土と思われる焼土塊があり、位置は不明であるが、カマドの存在は推定できた。次に各住居跡の占める位置について見れば、S I 01が丘陵頂上付近に位置するのに対し、S I 02は北側斜面中腹に、S I 03は東側裾部の平坦面にかなり距離を置いて占地している。本遺跡の南側大半については未調査であるためこの3軒のみによって遺跡の全般傾向を導き出すことは困難ではあるが、住居の小型化と集落の拡散化の傾向が見られるようである。

本遺跡と同様の特徴を有する住居跡を検出している遺跡に郡山市富久山町鳴神・柿内戸遺跡と須賀川市小倉にある沼平遺跡および沼平東遺跡などがある。鳴神9号および柿内戸10号住居跡、沼平遺跡内S I 12・14および沼平東遺跡内S I 15などである。いずれも小型の住居跡であり、柱穴を持たず、また同時期とされる他の住居跡と間隔を置いて構築されている。鳴神・柿内戸遺跡ではこれらの住居跡を含む時期を9世紀前半から10世紀に、沼平および沼平東遺跡では9世紀前半以降と区分しており、本遺跡においてもそれらに相当するものと思われる。伴出した遺物の特徴などからも、本遺跡の住居跡の時期を9世紀として大きくくずれることはないと考える。

今回の調査範囲は遺跡の北半部のみであったことから、検出された集落跡も集落範囲の北端地域一部である可能性が強い。縄文時代早期末の集落および平安時代の集落については、資料が増えつつあるもののまだ不明な点も多く、今回の調査でも全域が把握できずに終わったことは残念であるが、今後の類例の増加によってより明らかになっていくものと思われる。 (西岡木薫)



1 1号住居跡



2 2号住居跡

第2編 地藏田A遺跡



3 3号住居跡



4 4号住居跡

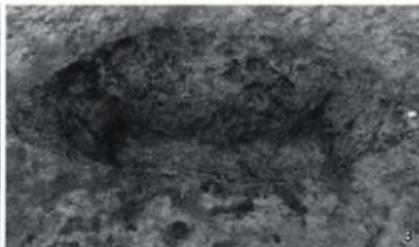


5 5号住居跡



6 6号住居跡

第2編 地藏田A遺跡

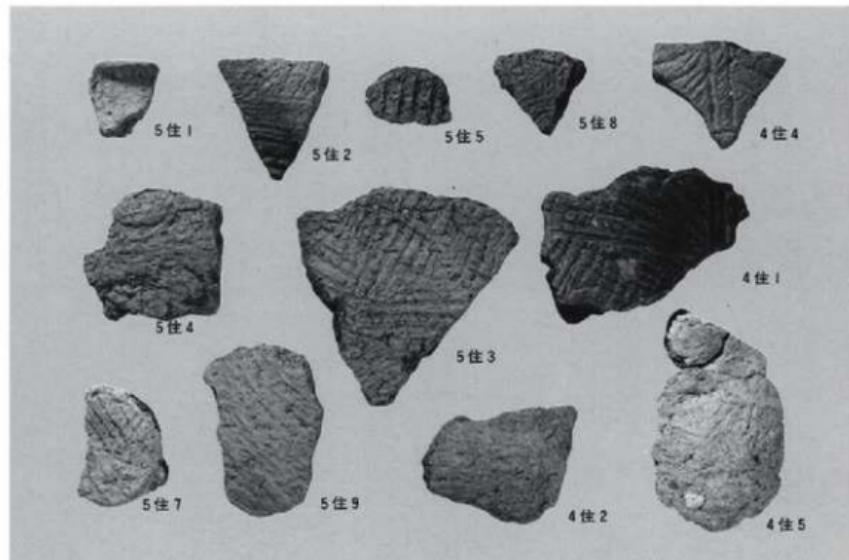


7 土坑

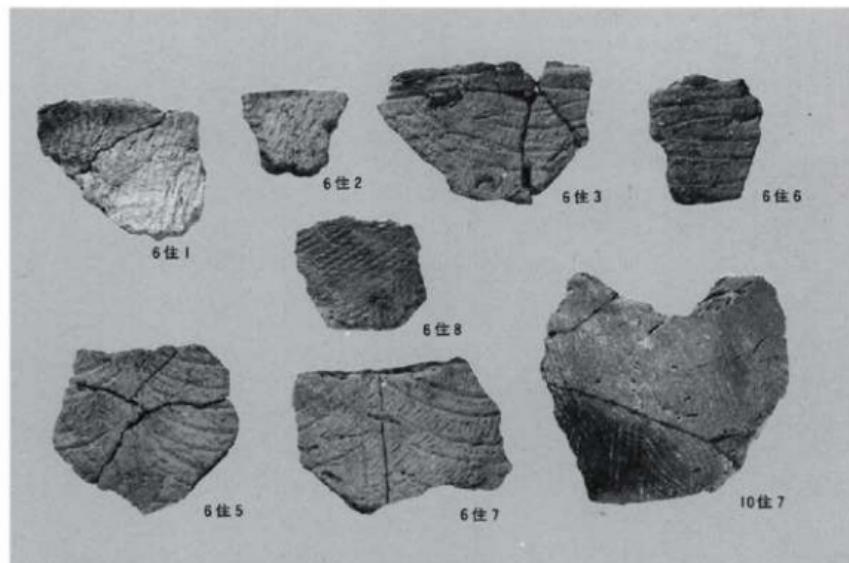
1…2号土坑 2…3号土坑 3…4号土坑 4…5号土坑



8 1号溝跡



9 4·5号住居跡出土繩文土器

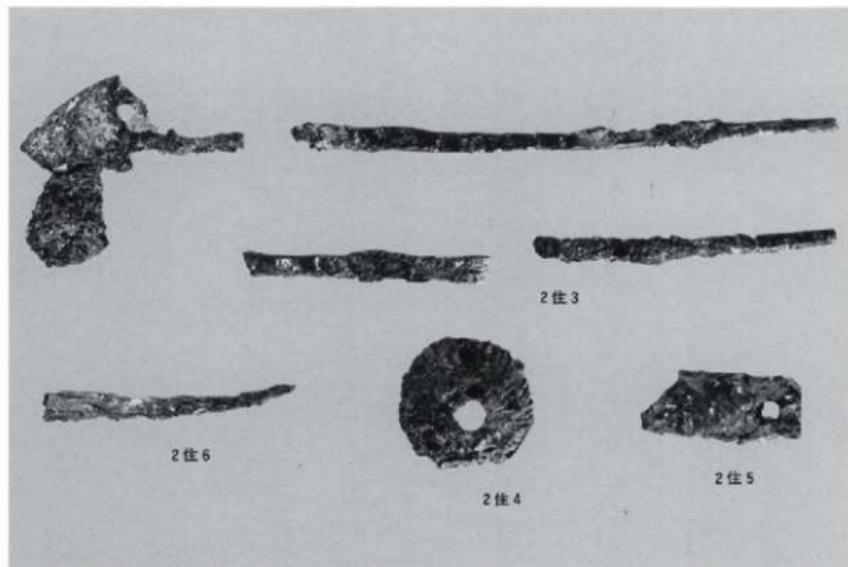


10 6号住居跡出土繩文土器

第2圖 地藏田A遺跡



11 遺構外出土繩文土器



12 2號住居跡出土鐵製品

第3編 地蔵田B遺跡  
(含・カナイ館跡)

遺跡記号 CY-GD-B(K)  
所在地 郡山市田村町大字岩作字地蔵田  
時代・種類 始文時代  
中世-館跡  
調査期間 昭和57年4月12日～5月28日  
発掘担当者 目黒 吉明  
調査員 若林 伸亮 西間木 萬  
橋本 博幸 安田 稔  
協力機関 郡山市田村支所産業課



## 第1章 調査経過

### 第1節 調査経過

地蔵田B遺跡(カナイ館跡)は郡山市田村町大字岩作字地蔵田に所在する。谷田川南岸に形成された河岸段丘先端部に位置し、北側は氾濫原に舌状に迫り出して比高差2m程の段丘崖をなす。西側は一段低く細長い水田がめぐり、東側は用水堀に画された標高254m前後の狭小な平坦地で、地元では古くから此地をカナイ館と通称して来たようである。景観上館跡としての地形的形態は顕著でなかったが、遺跡調査課が行った昭和54年7月の分布調査と昭和55年度の試掘とにより、約9,000m<sup>2</sup>の縄文・土師及び中世城館跡などの複合遺跡として記録された。

今回の調査は、東北農政局母畑開拓事業所との昭和57年度埋蔵文化財保存協議によって、工事により削平される北東部約800m<sup>2</sup>について記録保存を目的として実施することになった。調査区域は蔬菜畠・桑畠であり、4月当初より地権者から調査に関する承諾を得るなど諸準備を重ね、4月12日に調査を開始した。前半は天候がすぐれず終了したのは5月28日であった。

#### 発掘調査日誌概要

- 4月12日 谷田川沿いにある母畑開拓事業所が設定したベンチマークを利用し、遺跡内にレベル原点を設定。標高は254.30mとする。また館測量のための基準ガイドを設定し、地形測量を行う。
- 4月19日 本日より重機を導入し、表土の除去作業を行う。同時に、遺跡の東側の休耕田にテントを設営し、器材を搬入する。
- 4月20日 漢跡を検出する。また漢跡に切られる住居跡と思われる遺構も検出する。
- 4月21日 グリッドを設定。調査区域に5m四方の方眼をかけ、区割りは北から南へA～F、東から西へ1～12とする。南北方向の軸線の方向はN15°Eである。
- 4月22日 調査区域の精査を継続し、遺構確認を行う。またローリングタワーを設置する。
- 4月23日 漢跡の検出を終わり、3ヶ所に1m幅のベルトを残して掘り込みを始める。
- 4月27日 漢跡の掘り込みを継続する。漢跡内堆積土よりおろし皿底部出土。
- 5月11日 漢跡の掘り込みをほぼ終了し精査に入る。平場の精査も同時に行い遺構確認をする。また、漢跡北側部分の斜面下端を確認するため重機を導入し、表層の掘削を行う。湧水のため作業は困難であった。
- 5月14日 漢跡の精査をほぼ終了する。本調査区域外で漢跡の東辺・西辺・南辺を確認するためトレンチを5本(A～E)設定し掘り込みを始める。また土坑・ピットの断ち割り、

セクションの記録に入る。

- 5月17日 B・C・Dトレンチより濠跡を検出する。湧水多く作業は困難を極める。動力ポンプにより排水しながら行う。
- 5月24日 住居跡(S I 01), 特殊遺構(S X 01)の掘り込みに入る。また各遺構の掘り込み、作図を継続。Fトレンチを設定し掘り込みを行う。濠の東南部コーナーを確認する。本調査区域で検出した濠跡に残したベルトを除去し、濠跡全景の写真撮影を行う。
- 5月27日 S I 01の壁柱穴を検出、作図を行う。またS X 01の遺構・遺物の作図も並行して行う。Hトレンチを設定し、濠跡の有無を調べるが確認できなかった。
- 5月28日 全景写真撮影を行い調査を終了する。 (西間木薫)

## 第2節 調査方法

### 1. 調査方法

調査は、試掘調査によって確認された地蔵田B遺跡遺物包含層とカナイ館跡の範囲9,000m<sup>2</sup>中、当初工事によって削平される北側600m<sup>2</sup>を対象とした。また、カナイ館跡の濠跡がどのように巡るか確認するためのトレンチを数ヶ所設定し、あわせて調査を行った。

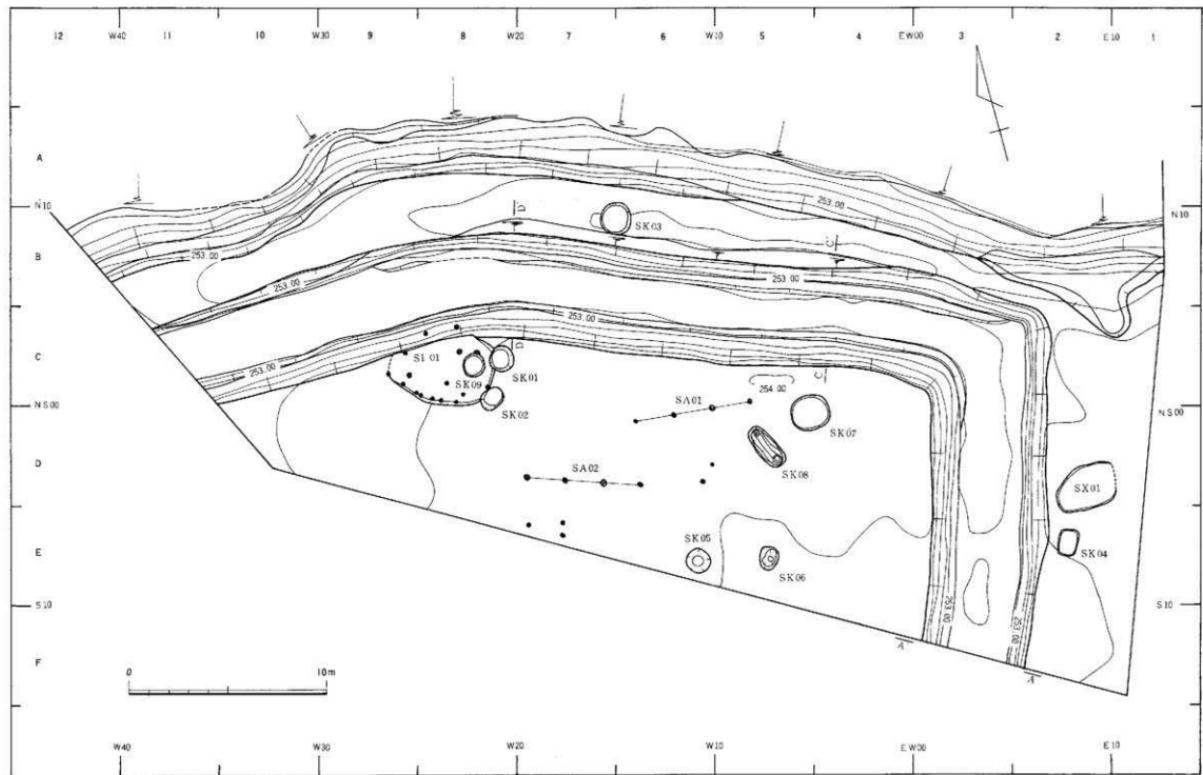
初め現況の地形測量を縮尺1/100で行い、同時に矢田川沿いにある母畑開拓事業所が設置したベンチマークからレベルを移動し、本調査区域外西側高所に調査のためのレベル原点を設けた。標高254.30mである。

発掘調査区の設定は、調査区域を5m四方のグリッドを基準とした碁盤目状に分割し、南北方向にはアルファベットで北側からA~F、東西方向はアラビア数字で1~12を付し、各グリッドをA-1, A-2……と呼ぶこととした。グリッドを設定するにあたり基準とした南北の軸線はN15°Eを示している。調査区内原点は、南北のC・D間と東西の3・4間の交差点とし、ここをE W00, N S00とした。

耕作土等の遺構検出面上の土は、調査時間を短縮するため重機を導入した。遺構は大部分地山である黄褐色砂質土面で検出されたが、濠跡に関しては3ヶ所に土層観察用のベルトを残し、他遺構に関しては2分法による調査方法を用いた。遺構図の採録は、濠跡を1/100、住居跡・特殊遺構・ピット群・その他は1/20、土坑は1/10の縮尺で行った。濠跡土層断面は1/20縮尺で行った。写真撮影は、調査の進行状況に応じ隨時35mm撮影を行った。 (橋本博幸)

### 2. 基本層序

本遺跡内の基本層序は、昭和55年度の試掘時と同様3層に分層された。第1層は耕作土であり25cm前後を測り、第2層は黒褐色砂質シルトが地山上に約30cmほど堆積している。第3層は暗黄

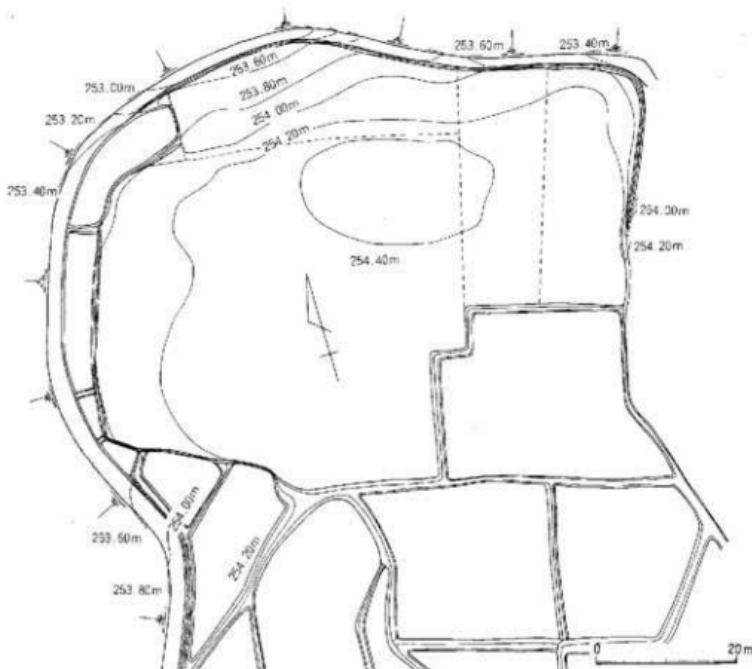


第1図 地蔵田B(カナイ館)道路造構配置図



褐色砂質土(地山)である。この層の上部には拳大の礫が層をなし堆積している部分もある。

調査区北側の低位段丘面に入れた幅2m、長さ10mの南北に長いトレンチでは、水田耕作土20cm下には約1mの黒褐色粘質土層、20cmの黒灰色粘土層、10cmの砂層がそれぞれ堆積しており、その下はかなり厚い疊層であることが確認された。しかし、疊層掘り込み中に湧水がありそれ以下の掘り込みは中止せざるをえなかった。  
(橋本博幸)



第2図 地蔵田B遺跡(カナイ館)現況図

## 第2章 遺構と遺物

調査区域より検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑9基、濠跡1、柱列2、特殊遺構1、その他小ピットが数基ある。調査区が遺跡全体の約10%と限られており、検出された遺構も後世の擾乱を受けており、遺存状態の良好なものは少なかった。遺物は、縄文時代前期前半、中期後半の土器片のほか、中世・近世と思われる陶器片が若干出土しているが、いずれも細片であり完形品となるものはなかった。また、鉄製品も数点出土している。

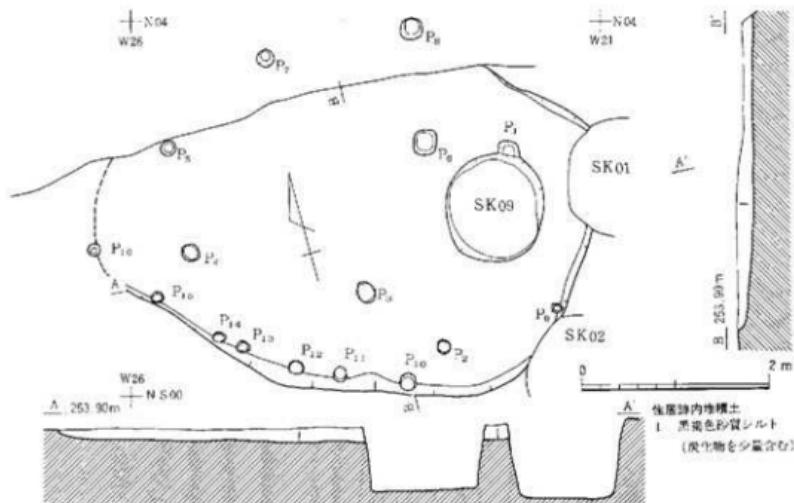
検出された遺構は数時期が重複しており、調査は困難をきわめた。

### 第1節 竪穴住居跡

#### 1号住居跡 S I 01

##### 遺構（第3図、図版10・11）

調査区西側の地山砂質層で検出された住居跡で、北側は館跡とともに濠によって削り取られ、



第3図 1号住居跡

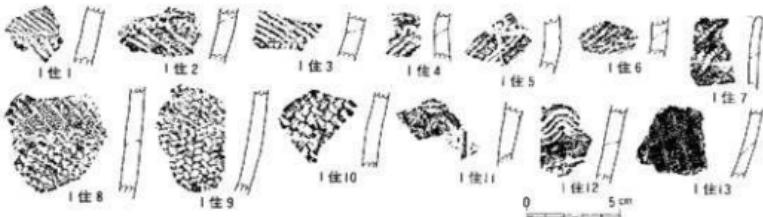
東側では1・2・9号土坑との重複によって一部破壊されている。平面形は梢円形に近い隅丸長方形になると思われ、長軸5m、短軸4m程の規模と考えられる。

住居跡内堆積土は黒褐色砂質シルト1層であるが、地山層のブロック混入や堆積状況に乱れがみられないことから自然堆積である可能性が強い。検出面から床面までの深さは中央部で20cm弱、ゆるく立ち上がる壁際で10cm前後である。床面は地山砂質層をそのまま使用している。

ピットは住居跡内において中央を囲むような形で6個( $P_1 \sim P_6$ )、壁際をめぐるような形で8個( $P_9 \sim P_{16}$ )確認されているが、漆跡法面で検出された $P_7 \cdot P_8$ も埋土などから住居跡に伴うピットであると考えられる。 $P_1 \sim P_7$ は径20cm前後、深さ30~40cmを測り、その規模から住居跡の主柱穴と考えられ、中でも $P_3 \cdot P_4 \cdot P_6 \cdot P_7$ がその中心的役割を持っていたものと考えられる。 $P_9 \sim P_{16}$ は径10cm強、深さ5~15cmを測り、その位置から住居跡の壁柱穴と考えられる。

#### 遺物(第4図)

住居内堆積土 $\ell - 1$ から出土したもので、床面から出土したものはない。1住1~4は末端にループを持つもので、0段多条の原体を用いている。1住5~7は単節斜縄文で、1住5には横雜束の圧痕がみられる。1住8は竹管によるコンバス文を境に斜縄文と異条縄文が施されている。1住9は組紐文である。1住10は1段と2段の縄の堅い結節を持つ原体と考えられる。1住11は竹管による沈線に一部縄文がみられる。1住12は柳歯状工具による波状文である。1住13は2本1組の浅い沈線が一定の間隔を持って施されている。



第4図 1号住居跡出土縄文土器

#### まとめ

本住居跡は遺物から縄文時代前期前半の住居跡と考えられる。平面形は梢円に近い隅丸長方形と思われ、主柱穴と壁柱穴が検出された。遺存する範囲内では焼土および焼け面は認められず、遺存度を考えても、住居内に特別な施設はなかったものと考えられる。

(安田 稔)

## 第2節 土坑

今回調査を行った部分から検出された土坑は9基であり、確認面でのプランは円形・梢円形・

方形があり、大きさや深さもまちまちである。形態から次のように分類される。

平面プランは円形であり、断面筒形を呈する土坑……SK01, 02, 09

タ 断面擂鉢状を呈する土坑……SK05, 06

タ 断面皿状を呈する土坑……SK03, 07

平面プランは方形であり、断面鍋底状を呈する土坑……SK04

平面プランは梢円形でいわゆる陥り穴状を呈する土坑……SK08

ここでは特徴的な土坑をあげ、それぞれの検出状況・形態・覆土の状況、さらに出土遺物について説明を加えたい。なお、計測値等は土坑一覧表にまとめることにした。

#### 1号土坑 SK01(第5・6図、図版12)

C-8グリッド内で、S101の東壁部分を切る状態で検出された。検出面でのプランは円形を呈している。底面はほぼ平坦であり、壁面は垂直に近い立ち上がりを見せ、断面筒形を呈するもの

である。埋土は黒褐色砂質シルト・暗褐色砂質シルトが主体をなし、壁付近には壁崩壊土と思われる黄褐色砂質土を含む暗褐色砂質シルトが自然堆積の状態を示している。

遺物は、埋土内から縄文時代前期前半に比定できる1坑1や、縄文時代中期後半と思われる1坑2ほか細片が5点出土している。

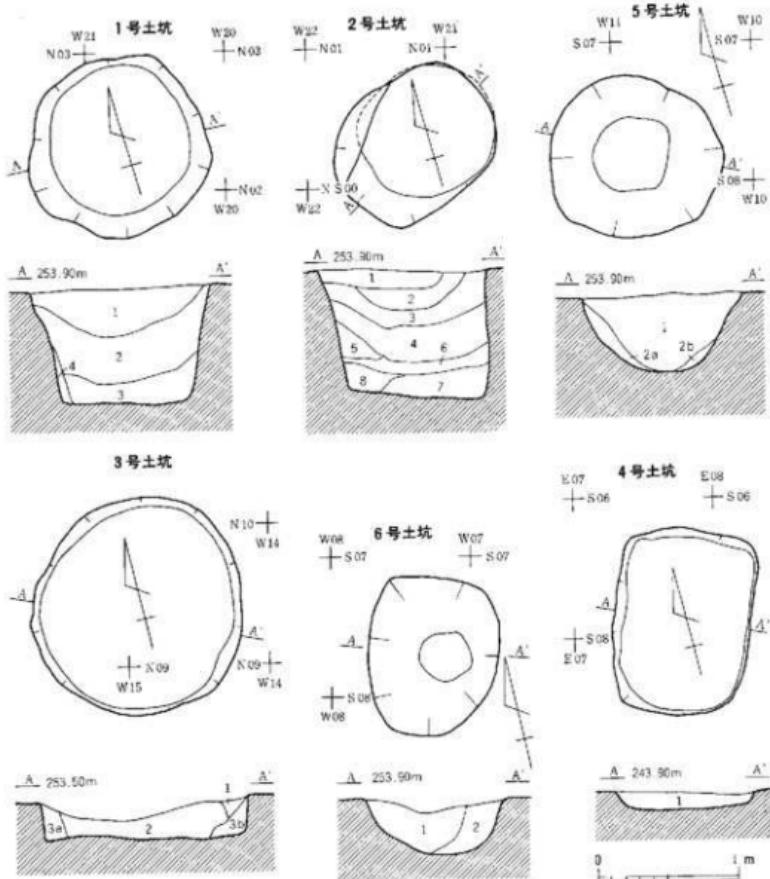
第5図 1号土坑出土縄文土器

#### 4号土坑 SK04(第6図、図版12)

E-2グリッド内で、S101の南側に近接した状態で検出された。検出面における平面プランは隅丸方形を呈している。壁面は、割合平坦な底面より外方へやや開きながらゆるく立ち上がる。底面には、地山に含まれている拳大の礫が部分的に露出しており、また軟弱である。埋土は、暗褐色砂質シルトの單一層である。遺物は、縄文時代中期後半に比定できる磨消し縄文の細片が2点出土したが、本土坑の機能・用途は不明である。

#### 5号土坑 SK05(第6図、図版12)

E-6グリッドにおいて検出された土坑である。東側3mにはSK06が位置している。検出面は地山である暗黄褐色砂質土上に堆積している黒褐色砂質シルト面である。平面形は円形を呈しており断面形は擂鉢状であるが、壁面上部には地山に含まれている拳大の礫が若干露出している部分もある。埋土は暗褐色シルトが主体をなしており、壁面付近には壁崩壊土をブロック状に含



## 1号土坑内堆積土

- 1 黒褐色砂質シルト
  - 2 細褐色砂質シルト
  - 3 黑褐色砂質シルト (少量の黄褐色砂質土を含む)
  - 4 黄褐色砂質シルト (多量の黄褐色砂質土を含む)
- 2号土坑内堆積土**
- 1 黑褐色砂質シルト
  - 2 黄褐色砂質シルト
  - 3 黄褐色砂質シルト
  - 4 黑褐色砂質シルト
  - 5 黄褐色砂質シルト (少量の黄褐色砂質土を含む)
  - 6 黄褐色砂質シルト (多量の炭化物を含む)
  - 7 黄褐色砂質シルト (黄褐色砂質土を含む)
  - 8 黄褐色砂質シルト

## 3号土坑内堆積土

- 1 粘褐色砂質シルト (少量の黄褐色土を含む)
- 2 黑褐色砂質シルト
- 3a 黄褐色砂質シルト (黄褐色砂質土を含む)
- 3b 黄褐色砂質シルト (多量の黄褐色砂質土を含む)

## 4号土坑内堆積土

- 1 黄褐色砂質シルト

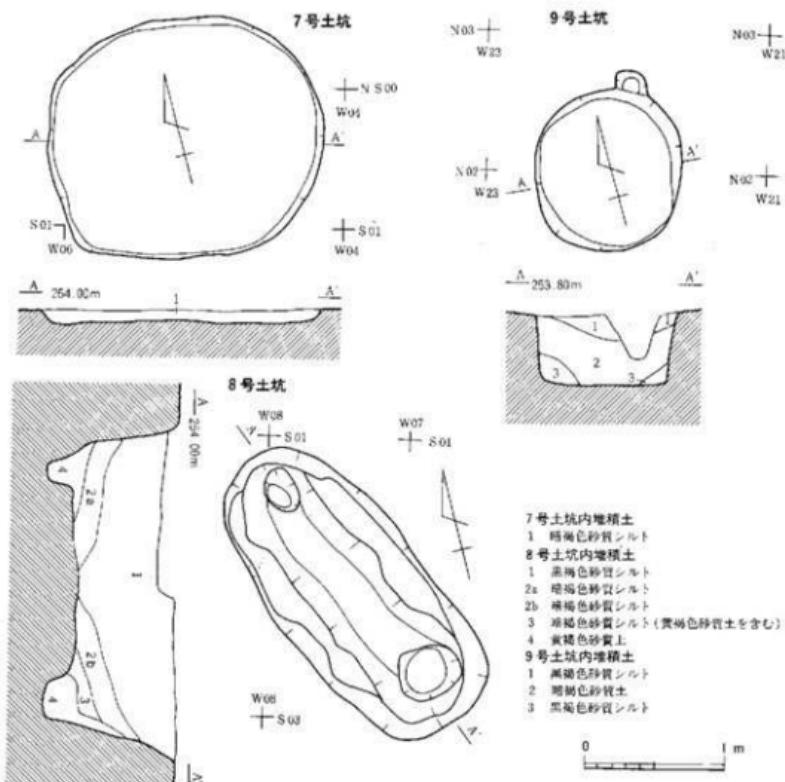
## 5号土坑内堆積土

- 1 黄褐色シルト
- 2 黑褐色シルト (黄褐色砂質土を含む)

## 6号土坑内堆積土

- 1 黑褐色シルト
- 2 黄褐色シルト (少量の黄褐色砂質土を含む)

第6図 1～6号土坑



第7図 7~9号土坑

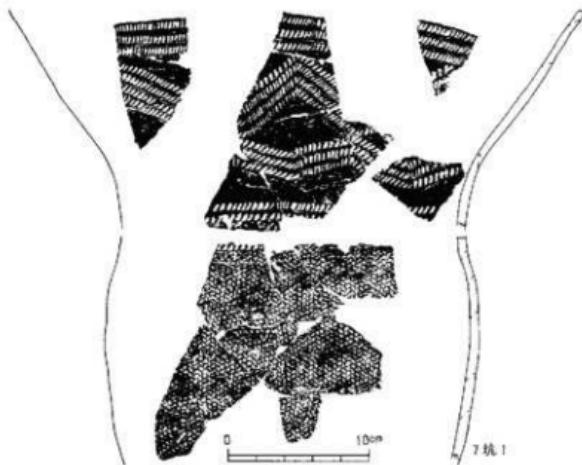
む黒褐色シルトが堆積している。出土遺物はなく、本土坑の性格などは不明である。

#### 7号土坑 SK07 (第7・8図、図版12・18)

C-D-4・5グリッド内で検出された本遺跡調査区域内では最大の土坑である。検出面での平面プランはほぼ円形であり、断面直状を呈する非常に浅いものである。底面は地山を掘り込んで構築しており、地山に含まれている拳大の礫が露出している。やや凹凸があり軟弱である。10cm前後存する壁面は、ゆるやかな立ち上がりをみせる。埋土は、暗褐色砂質シルトの単層で、遺物はこの層から散在した状態で出土している。

本土坑から出土した土器は、縄文時代前期前半に比定される深鉢形の口縁部・胴部の細片約30

片である。7坑1は、中でも一括出土の土器細片を復元図化したもので、推定口径40.8cm前後の深鉢形土器になると思われる。口縁部が刺突文による幾何学的文様を構成し、胴部は組紐文を施しているものである。底部付近の出土はなく不明である。



第8図 7号土坑出土縄文土器

## 8号土坑 SK08 (第7図)

D-5グリッド内で検出された土坑である。検出面でのプランは南北に長い楕円形を呈し、長軸の中心を通る軸線はN27°Wを示している。壁面は75°~80°の角度をもって立ち上がっており、底面は、割合凹凸があり軟弱である。底面両端には小ピットを有し、南側のピットは長軸45cm、短軸38cm、深さ約24cm、北側のピットは長軸31cm、短軸22cm、深さ20cmの平面形はそれぞれ不整円形で断面筒形のものである。本土坑の埋土は3層に分層でき、両ピットと壁付近には黄褐色砂質土、底面付近には暗褐色砂質シルト、最後に黒褐色砂質シルトがレンズ状の自然堆積を示している。遺物の出土はなく、時期・機能等は不明である。

以上のように遺物を伴っている土坑は少なく、構築時期・機能等は不明な点が多い。(橋本博幸)

第1表 地蔵田B遺跡土坑一覧表

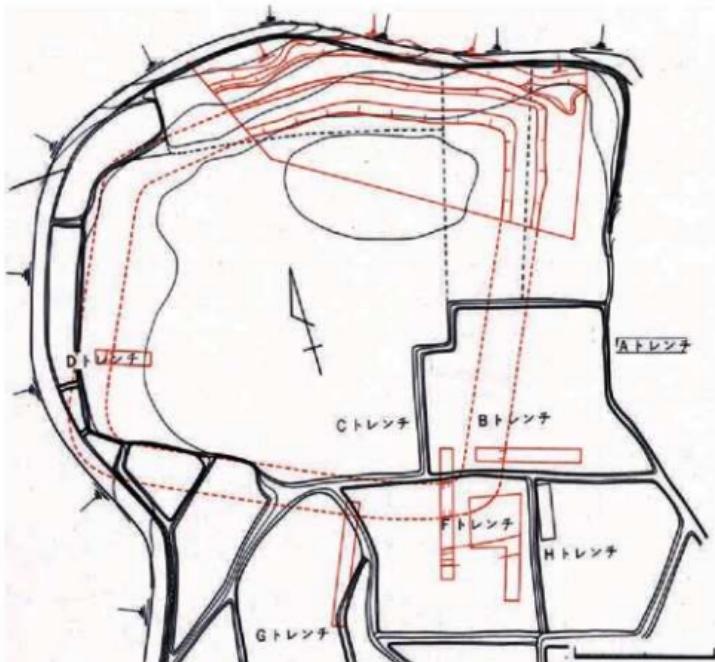
No.	位 置	平 面 形	断面形	規 模 (cm)			出 土 遺 物	備 考
				上 端	下 端	深さ		
1	C-8	円 形	円筒状	127×129	100×108	81	縄文土器片 5点	S1 01を切る
2	C-8	円 形	円筒状	120×95	100×87	91	縄文土器片	S1 01を切る
3	B-6・7	円 形	円筒状	146×155	138×144	28		
4	E-2	椭丸長方形	楕球状	98×132	87×124	13	縄文土器片 2点	
5	E-6	円 形	楕球状	125×115	65×52	57		
6	E-5	円 形	楕球状	93×113	38×34	39		
7	C-D-4・5	円 形	皿 状	198×170	189×162	10	縄文土器片 30点	
8	D-5	楕 圆 形		106×236	27×198	72		両端に円形の小ピット有
9	C-8	円 形	円筒状	104×115	92×106	51		S1 01を切る

### 第3節 濠 跡

今回の調査で検出された濠跡は、谷田川によって形成された河岸段丘の中位段丘高位面のやや北側に張り出した部分に構築されている。

以前より「カナイダテ」と呼ばれていた所で、現況は中央の若干高い部分が桑畠・蔬菜畠、周辺が水田となっている。館の痕跡は、西側水田面がやや落込んでいることから濠跡の存在がうかがわれただけで、不明な点が多かった。昭和55年11月、当課の試掘調査によって1・2・15・17号トレレンチより「カナイ館」の濠と思われる遺構が検出され、単郭式の館跡であろうことが指摘された。

ここでは、本調査区域内で検出された濠跡、また濠跡出土遺物について説明を加えた後、館跡(特に濠跡)の形状を明確に捉えるべく設定した各トレレンチの概要を記し、最後にそれらによって



第9図 カナイ館濠跡全体図

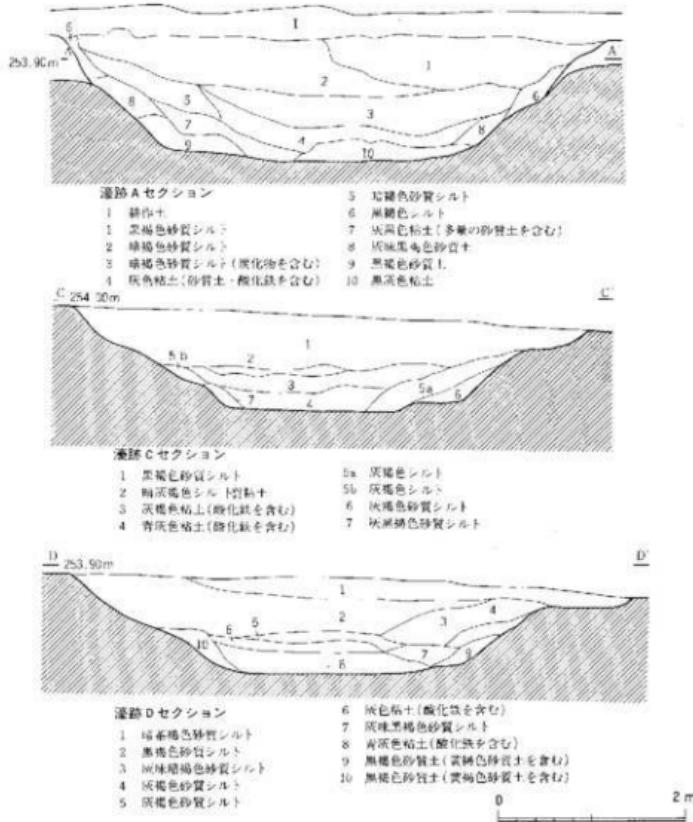
得られたカナイ館の漆跡について若干まとめたいと思う。

## 漆 跡

### 遺構(第10図、図版7~9)

本調査区域内ほぼ中央において、東側から北側へほぼ直角に折曲がる漆跡を検出した。検出された漆跡は東辺の北側部分と北辺の%ほどであり、館跡本来の面積の%程度を調査しただけで、全体を把握することはできなかった。

漆跡東辺は、コーナーより南へ15m、北辺は地形に左右され直線ではなくコーナーより27m西



第10図 漆跡セクション

の所で若干南へカーブを描いて15m検出された。上端幅は5.25~5.80m、下端幅(底面)は2.50~3.30mを測り、断面形は逆台形を呈している。検出面からの深さは約1mであり、底面はほぼ平坦である。壁面の傾斜度は内側で30~38度と比較的均一であるが、外側は25~42度と急な部分とゆるやかな部分があり一定ではない。

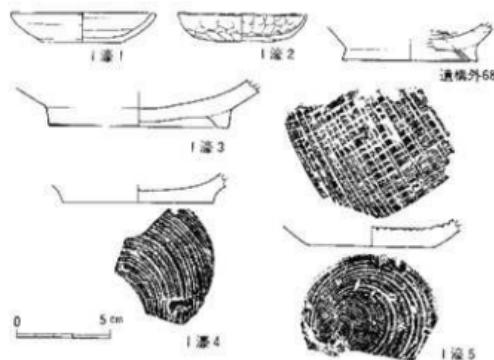
埋土は細分すると10層に分層できるが、主体をなすのは上層では黒褐色砂質シルト・暗褐色砂質シルトであり、底面付近においては灰色粘土や青灰色粘土である。堆積状況から自然堆積と考えられる。底面付近の層はグライ化していることから、以前は水濠であった可能性がある。

#### 遺物(第11・12図)

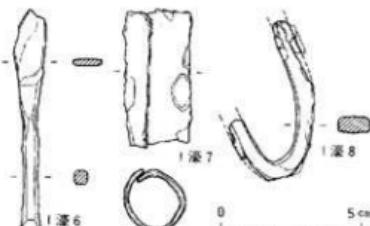
濠内出土遺物には、土師器底部1濠4、土師質土器1濠1・2、中世陶器と考えられる1濠5、近世陶器の1濠3ほか数点の陶器片、また1濠6~8の鉄製品がある。

1濠3・4は $\ell - 1$ 、1濠1・2・5は $\ell - 2$ よりの出土であり、ここにあげた遺構外68は濠検出面の出土である。いずれも小破片であり、図上復元を行った。最も遺存状態が良好な1濠5はおろし皿片で、底部のみの残存である。内面にはヘラ状工具で格子状に刻みを入れ、おろし目をつけている。体部上半は欠落しているため不明であるが、口クロを使用して作られたもので、底部には回転糸切り痕がある。

1濠1・2・4は、いわゆる土師質土器である。1濠1は小皿であり、推定口径7.8cm、器高1.6cm、底径4.2cmを測る。口縁部は、丸味をもって立ち上がる。内外面ともナデ調整が明瞭に観察され、底部は回転糸切り痕である。胎土は緻密であり、色調は黄橙色を呈している。1濠2も小皿であるが、手捏ねの土器であり指頭痕が顕著である。非常に歪みがあるが、推定口径6.8cm、器高1.5cm、底径3.8cmを測り、口縁は丸味をもって立つ。



第11図 濟跡出土陶器・土加質土器



第12図 濟跡出土鉄製品

胎土は緻密であり、色調は橙色を呈している。1漆3は底径9.6cmの底部から体部下半にかけての破片である。高台は貼り付け高台であり、器面の内側には褐色の釉がかけられている。胎土は砂粒を若干含んでいる。

鉄製品1漆6～8は、 $\ell - 1$ より出土したものである。1漆6は鉄錫で、現存長8cmを測る。根は柳葉形を呈し長さ3.9cm、最大幅1.2cm、厚さ0.2cmであるが、先端が若干折れ曲っている。範被は幅0.5cmの方形であり、長さ4.1cmが残存している。銹化が著しく遺布状態は良くない。1漆7は、長さ4.8cmの薄い鉄板を丸めたもので、径2.2cm筒形を呈しており、1漆8は、幅1.1cm前後、厚さ0.6cmの鉄棒をU字状に折り曲げたもので、いずれも銹化が著しく、また用途不明の鉄製品である。

### トレンチ検出の漆

カナイ館の範囲確認のため、昭和55年度の試掘時のトレンチに重複しないようにA～Fトレンチを設定し掘り込みを行った結果、B・C・D・Fトレンチにおいて漆跡を検出することができた。Aトレンチは遺跡の東側に設定したもので、若干の縄文土器細片が出土しただけである。Eトレンチは遺跡の西側の水田面に設定したものであるが、掘り込み途中湧水のため作業不可能となり、掘り込みを中止した。Gトレンチは、漆跡に一部かかるように設定し掘り込みを行ったトレンチであったが、明確にプランを捉えることはできなかった。また、Hトレンチは、Fトレンチの東側へ設定したものであるが、送電線用鉄塔設置時に深掘りした所であり、遺構は検出されなかった。

以下、漆跡を検出した各トレンチについて、説明を加えたい。

**Bトレンチ** 試掘時の15号トレンチの南側11mの地点に設定した15×2mのトレンチである。掘り込みの結果、トレンチの西側で耕作面下90cmの黒褐色シルト層内において、南北に通る遺構を検出した。埋土を除去した結果、深さ60cmの溝状になることが確認された。これは、カナイ館跡の東辺を画する漆跡の一部と思われる。

**Cトレンチ** Bトレンチの西側に、直角に曲がる位置に2×15mのトレンチを設定、掘り込みを行った。耕作面下60～70cm、トレンチのほぼ中央において上端幅5m前後の漆跡を検出することができた。埋土は黒褐色シルトが主体をなすが、グライ化した暗灰色粘土・青灰色粘土が下位に堆積していることから水濠であったことがうかがえる。埋土中には拳大～人頭大の礫がかなり入っており、掘り込みは困難を窮めた。途中豪雨等によってトレンチ内に湧水があり、底面までの掘り下げは行えなかった。

同時に漆跡の南側で溝状遺構の北側上端を検出したため、トレンチを3mほど南へ拡張し上端を確認した。上端幅2.5m、下端幅1m、深さは検出面から約60cmを測る。断面形は逆台形を呈し

ている。

**Dトレンチ** 濟跡の西辺が通ると思われる現況では一段下がった蔬菜畑に設定した $2 \times 8\text{m}$ のトレンチである。掘り込みの結果、トレンチの西側よりで濟跡の東側上端を検出することができ、また、深さも45cm前後残存していることが確認された。

**Fトレンチ** 濟跡の南東コーナーを確認するために設定した $7 \times 7\text{m}$ のトレンチである。トレンチ内北西隅、耕作土下約70cmの黒褐色シルト面で濟跡のコーナー部を検出した。同時にCトレンチ南側で検出した溝状遺構が、本トレンチの南隅を東西に通ることを確認したため、 $2 \times 8\text{m}$ の拡張トレンチを設定、上端幅を捉えた。

### まとめ

今回の本調査区域内及びB・C・D・Fトレンチ、また試掘時のトレンチで検出された濟跡を総合してみると、北辺は地形に左右され直線ではなく、やや歪んだ方形のプランを呈するが、館としては単郭式であることが判明した。濟跡を含めた東西は62.4m、南北は62mを測る。内側平場に関しては、東西51.7m、南北51.5mである。濟跡は上端幅5.5m前後、下端幅3m前後、深さは検出場所によって違うが60~100cmを測るものである。壁の勾配は内壁約35°、外壁はぼらつきがあり25°~42°であり、断面は諸薬研型を呈しているものである。調査が部分的であり、また後世の耕作等による搅乱がかなり進んでおり、建物跡や土壠等を検出することはできなかった。なおC・Fトレンチで検出した濟跡外側の溝状遺構はGトレンチでは検出されず、またHトレンチでは搅乱のため確認されなかった。このため現状ではこの溝状遺構が館跡に伴うものであるかどうか断言できない。

(橋本博幸)

## 第4節 その他の遺構と遺物

ここでは、特殊遺構・柱列・その他のピット群の各遺構、また遺構外出土の遺物について説明を加える。

### 1号特殊遺構 SX01

#### 遺構 (第13図、図版13)

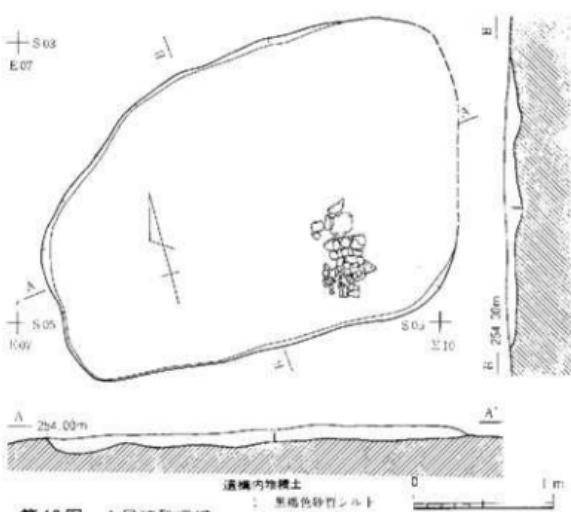
本遺構は調査区東側で検出されたもので、1号濠に区切られた郭内の外側に位置している。堆積土は暗褐色砂質土1層のみで、底面も安定していないことから明確な掘り込みを持つ遺構としてはやや疑問が残るが、遺物が集中して出土していることから特殊遺構として扱った。平面で捉えられたプランは長軸約1.55m、短軸1.05mを測る不整長方形を呈しているが、プラン東側は明確な壁面は捉えられなかった。遺構の南東隅からは縄文土器が押しつぶされたような形でまと

まって出土し、扁平な石もそばにみられた。遺物は底面から若干浮いた状態であった。

### 遺 物

(第14図、図版19)

遺構図に図示したものを復元したもので、この他の土器は出土していない。1特1は直線的に外傾する深鉢形土器で、口縁部と胴部を区切るよう波状の貼り付けによる隆線が巡っており、残存して



第13図 1号特殊遺構

いる破片では、1カ所だけわずかに貼り付け隆線が垂下している部分があり、同じく1カ所だけ貼り付け隆線上に刻みを施している部分がある。繩文は単節による継回転で、胴部には綾紋文がみられ、口縁部にも繩文が施されている。1特2は口縁部がやや肥厚する深鉢で無節の繩文を用い、口縁部と胴部の境に無文部がみられる。



第14図 1号特殊遺構出土繩文土器

## まとめ

本遺構は、その形状などからやや疑問が残るが、土器の出土状況や扁平な石の状態から流れ込んでできたものとは考えられず、何らかの人為的痕跡と推定し、一応掘り込みをもつ遺構として捉えた。土器に見られる特徴は中期前半を示していると考えられる。  
(安田 稔)

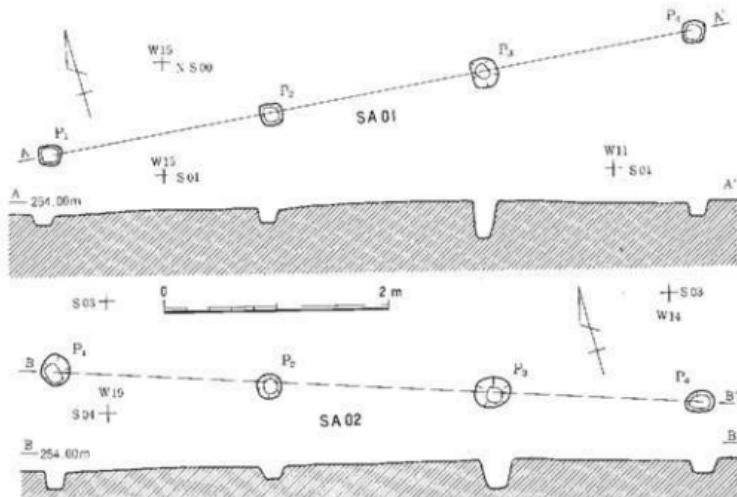
## 柱列・その他のピット群

## 1号柱列 SA01 (第15図)

調査区のほぼ中央、濠跡内の平場(C・D-5・6グリッド)で検出された。柱穴4個の柱列である。当初建物跡を想定し柱穴の検出にあたったが、4個のピットを検出しただけであり、本遺構は柱列とした。柱穴の大きさは、一辺20cm前後の隅丸方形を呈するものであるが、深さは10~32cmと一定ではない。柱痕は検出されなかった。埋土は、砂粒を多く含む黒褐色土である。柱間は西側より1.98m+1.92m+19.0mとほぼ等間隔に並んでおり、柱列の軸線はN85°Wを呈している。柱穴内からの出土遺物はなく、時期は不明である。

## 2号柱列 SA02 (第15図)

SA01のやや南西より(D-6・7グリッド)で検出された柱列である。柱列は、SA01同様4個で構成されている。柱間は西側より1.94m+1.99m+1.86mであり、柱穴を通る軸線はN82°W



第15図 1号、2号柱列

を示している。柱穴は、P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は不整形、P<sub>2</sub>は円形を呈しており径20~30cmであり、深さは10~25cmを測る。柱痕は検出されなかった。埋土は黒褐色砂質土である。柱穴から検出された遺物はなく、本遺構の構築時期は不明である。

#### ピット群

柱列以外の小ピットは、D-6、E-7グリッドで散在した状態で計5個検出された。ピットの大きさは径14~22cmの円形あるいは不整形を呈し、深さは7~22cmを測る。埋土は、黒褐色土の単一層である。これらは柱列の柱穴とはほぼ共通した形状・埋土を呈しているが、各ピット間にはまとまりがなく、性格等は不明である。  
(橋本博幸)

#### 遺構外出土の遺物（第16・17図、図版15~17）

調査区全域からL-IIを主体に出土したもので、主として縄文土器が出土し、その他に土師器・陶器が若干出土している。ここでは縄文土器を中心に述べ、その他については若干の説明を加えることとする。

##### 〔縄文土器〕

縄文土器は時期的に大きく分けると早期後半、前期前半、中期の3時期に分かれ、前期前半と考えられるものが最も多く、以下中期・早期末の順である。縄文土器を包含していたL-II自体はそれほどの厚さを持たないことから、層位による土器の上下関係はつかめず、また層位での細分なども不可能である。

##### I群土器 早期後半の土器群

1類(第16図、遺構外1) 内面に貝殻条痕をもつ厚手の土器である。口唇部と外面には竹管によると思われる沈線文がみられ、外面の沈線は口縁に対して斜行している。

2類(第16図、遺構外2) 口唇部が若干外方へ押し出されたやや厚手の土器である。口縁端部と外面に同工具の竹管による刺突と沈線文がみられ、外面の菱形の区画は鋸歯状沈線を組み合せたものである。

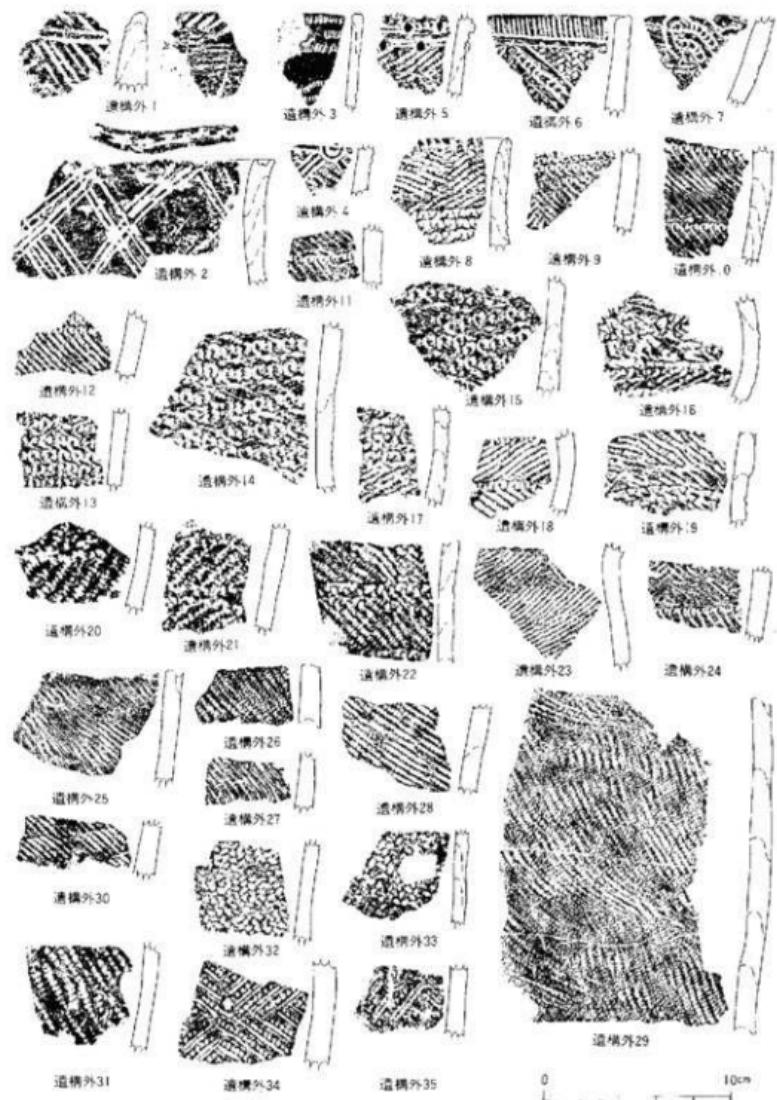
##### II群土器 前期前半の土器群

出土遺物の中で最も多く出土した土器で、大きく縄文を施文するものと沈線文を施文するものの2種に分かれ、いずれも纖維を含んでいる。また、縄文を施文するものの口縁部文様として竹管による沈線と押し引きのみられるもの(遺構外4~7)があり、遺構外5には沈線を引く前に小瘤が貼り付けられている。遺構外8も口唇部に刻み状の沈線が施されているが、ヘラ状の工具によるものと思われる。

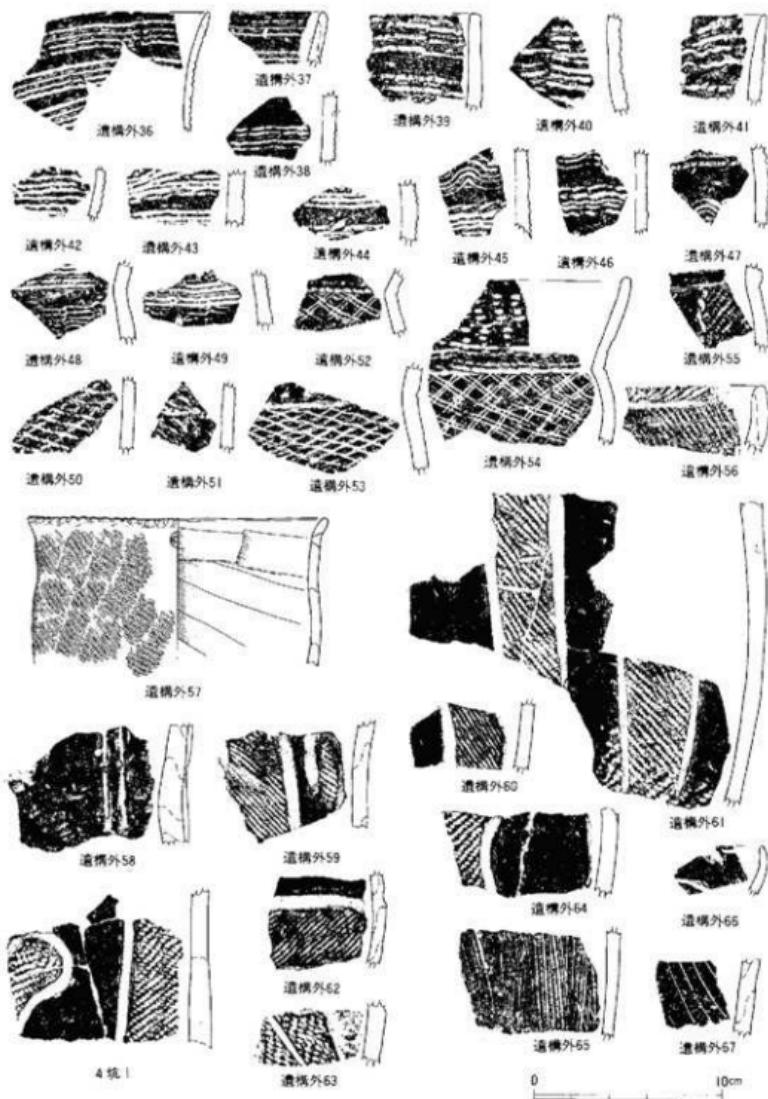
以下、上記したものを除いて分類ごとに記述する。

1類(第6図、遺構外3) 薄手の土器で、外面無文部に細いヘラ状工具による連続刺突が施さ

第3圖 地藏田B道路



第16圖 這橫外出十繩文土器(1)



第17図 遺構外出土繩文土器(2)

れている。連続刺突は口縁部付近は横走し、下部は斜めになっている。おそらく7坑1と同様のモチーフになると思われる。若干の繊維が含まれている。

**2類(第16図、遺構外8~21・24)** ループ文をもつ土器である。遺構外14・15はやや大きめのループ文が土器片全面に施され、ループとループの間にしっかりと残っていない原体分の間隔がある。遺構外9~12・24は0段多条の原体を用いた末端ループ文である。その内、遺構外9・12には末端ループで足の長い斜縄文とループ文を組み合わせたものが施されている。他は単節斜縄文の末端ループでやはり遺構外8・16・17の様にループ文と末端ループ文を組み合わせたものがみられる。遺構外16は肩部の破片で混んだループ文が斜方向に施されており、上部にループ文による幾何学的な文様が想定される。遺構外18は羽状縄文である。

**3類(第16・17図、遺構外22・23・25~27・29・30・57)** 斜縄文の施される土器である。遺構外22は原体の末端部がみられ、遺構外23・27は0段多条、遺構外25は0段多条と単節の原体を施文したものである。遺構外29は長い原体の片方を自条自巻ふうに引き詰めたものと考えられる。遺構外57は口縁部に刻みを有し、補修孔がみられる。

**4類(第16図、遺構外32・33)** 繩紐の施される土器である。

**5類(第16図、遺構外34・35)** 异条斜縄文の施される土器である。

**6類(第17図、遺構外36~47)** 櫛歯状工具による沈線文のみられる土器である。沈線には横方向のものと波状を呈するものがあるが、横方向のものは工具の押し引きが多いが、波状のものには押し引きはみられない。

**7類(第17図、遺構外48~54)** 撫糸文の施される土器である。遺構外48・49はいわゆる葺瓦状撫糸文で、遺構外50が網目状撫糸文である。遺構外52~53は2本1組の網目状撫糸文で、接合した口縁部には櫛歯沈線が退潮したような刺突と櫛歯状工具の沈線が巡っている。

### Ⅲ群土器 中期の土器群

**1類(第16・17図、遺構外28・30・55・56)** 斜縄文の施される土器で、遺構外28・30は単節の縄文が縦に施文されている。遺構外56は口縁部で浅い沈線が口縁を巡っている。遺構外55は横に貼り付けた隆帯の下から縦回転の綾格りがみられる。

**2類(第17図、遺構外58)** 無文部に貼り付けによる縦の隆帯があり、隆帯の両脇には沈線がみられる土器である。

**3類(第17図、遺構外59~64)** 沈線と磨消部によって文様を施す土器である。遺構外61は太い沈線によって縦に区画された縄文部と磨消部をもち、下方の磨消部には半分磨り消された縄文がみられることから、縄文を施文した後に磨消が行われることが知られる。59・62は磨消縄文が横方向へ展開するもので、60・64も沈線の彎曲具合から横方向への展開が考えられる。遺構外ではないが4坑1も同種のものである。

**IV群土器 晩期の土器**

薄手の土器で、間隔の細い櫛歯状工具による条痕が施されるものである。 (安田 稔)

〔その他の遺物〕

縄文土器以外では、土師器片・土師質土器片・陶器片が若干出土している。いずれも耕作土あるいはL-IIからの出土であり、後世の搅乱を受け磨滅が著しい。

土師器は、杯片が7点、甕片が1点である。杯片は口縁部片1点、体部から底部にかけてのものが6点であり、細片ではあるがすべてロクロ痕が観察される。中には内面黒色処理を施しているものもみられる。胎土は緻密であり、焼成は良好である。甕片は口縁部の細片であり、内外面ともヨコナデ調整が施されている。胎土には多量の砂粒を含んでおり、色調は赤褐色を呈するものである。

土師質土器片は、小皿の細片が2点ある。内外面ともにロクロ痕を明瞭に残している。胎土は緻密であり、色調は明赤褐色を呈している。

陶器片は2点あり、頸部から肩部にかけてのものと胴部破片である。 (橋本博幸)

## 第3章 考察

### 第1節 繩文時代の遺構と遺物

#### 遺物について

縄文土器は早期から晩期までの土器が出土している。量的に最も多いものは前期の土器で、次に中期、早期と晩期はわずかである。

早期の土器は遺構外1・2で胎土に纖維を含んでいるが、遺構外2はそれほど多くはない。沈線の鋸歯状のモチーフからおそらく茅山下層式から早期末にかけての土器であろう。

最も量の多い前期の土器は、縄文を多用する土器（遺構外II群1～5類）と沈線文を施す土器（遺構外II群6・7類）の二つに分けることができる。縄文を多用するものの特徴を上げると、口縁部付近においては瘤状の貼付文・半截竹管による連続爪形文および沈線・口唇部の刻み目が上げられ、胴部において多種類の縄文とループ文・半截竹管によるコンパス文がみられる。多種類の縄文には斜縄文・組紐文・異条縄文がみられ、斜縄文系統のものには0段多条の原体を用いているものが多い。

沈線文によるものは口縁部に櫛歯状工具による波状沈線・平行沈線がみられ、胴部には葺瓦状、網目状然糸文が施されている。

上記の縄文を多用する土器群は関東北部における前期前半に認められるもので、関山式の特徴を有しているといえる。現在関山式については幸田貝塚などで細分が行われており、関山式内でも新旧が知られるようになっている。その観点から本遺跡の土器をみると、口縁部においては古い要素と考えられる瘤状の貼り付けや竹管沈線は残っているものの、いずれも装飾以前に地文としての縄文が施されていることや、ループ文をもつものでも足の長い斜縄文をもつものが多く、新しい要素が抽出できる。さらにわずかではあるが竹管によるコンパス文や異条縄文がみられることから本遺跡の土器は関山式でも新しい時期のものとして位置付けることが可能である。

沈線文を施す土器は関東における植房式の影響を受けるものと考えられるが、葺瓦状あるいは網目状然糸文がみられることから大木2a式と折衷したものと考えられる。大木2a式は最近、原町市赤沼遺跡、西白河郡泉崎村原山古墳において検出されているが、赤沼遺跡ではループ文、組紐文がみられず、0段多条の縄文は1点しか出土していない。単節斜縄文の他には複節・無節の縄文がみられ本遺跡においては1坑1・遺構外31がそれに類似している。

S X01から出土した1特1・2は中期前半と考えられ、1特1は口縁部の縄文、胴部の綾の綾

格、器形などから大木7・b式に属すると思われる。1特2も出土状況から同時期のものと考えられる。遺構外28・30・56～58も中期前半であろう。遺構外59～64は太い弦線と磨消繩文から成る土器で、文様が横方向への展開を示すものであることから大木9～10式の土器と考えられる。遺構外65は晩期の粗製土器であろう。

#### 遺構について

今回検出された縄文時代の遺構は住居跡と土坑および特殊遺構で、住居跡はその遺物から開山式後半の時期に位置づけられるものと考えられる。福島県における前期前半の住居跡の検出例は石川郡石川町の達中久保遺跡、昭和57年度調査の西白河郡泉崎村の原山古墳、相馬郡飯館村の松ヶ平A遺跡があげられ、田村郡都路村の石橋遺跡の住居跡もその時期にあてられている。しかし検出例はあるものの数的にはまだ少なく、本遺跡の住居跡も数少ないこの時期の1つの形態を補ったという所で止めた。近年関東で行われた論考(笠森1981・1982)などと比較検討を行うまでにはまだかなりの時間を要すると思われる。

土坑は明確にその時期を判断できるものはないが、埋土・形態などから1～4・7～9号土坑が縄文時代のものと考えられる。1・2・9号土坑は1号住居跡を切っていることから前期前半より新しいものと考えられるが、性格は不明といわざるを得ない。5・6号土坑は前述の土坑とは埋土・深さの点で異なる時期の土坑と思われるが、明確な時期および性格はやはり不明である。

(安田 稔)

## 第2節 中世以降の遺構と遺物

ここでは、今回の調査で得られた「カナイ館跡」の資料をまとめ、館跡について若干検討を加えたい。

カナイ館は、谷田川が形成した氾濫原に面する南岸の河岸段丘崖の先端部(舌状に飛び出した中位段丘上位面)に位置している。三方は平坦地であり、非常に見通しの良い場所となっており、北側水田面との比高差は約2mである。館跡の縄張りは、東西62.4m(34.7間)、南北62m(34.4間)であるが、北辺の濠が「へ」の字状に折れ曲がっている。これは、谷田川が形成した地形に左右され、そのまま利用するために起こったことであり、実際はほぼ62m四方の単郭式の縄張りを行ったものと思われる。濠跡は、上端幅5.5m前後の諸葉研型を呈しており、深さは約1mである。底面のレベルは、Bトレンチ付近がやや高く253.15m前後であるが、他は252.75～252.80mとはほぼ一定のレベルになっていることが確認された。濠跡内下層埋土は、グライ化していることが本調査区やB・C・Dトレンチで確認され、水濠であった可能性が指摘された。平場は後世の削平等により当時の状況をうかがい知ることはできないが、東西51.70m(28.7間)、南北51.50m(28.6間)

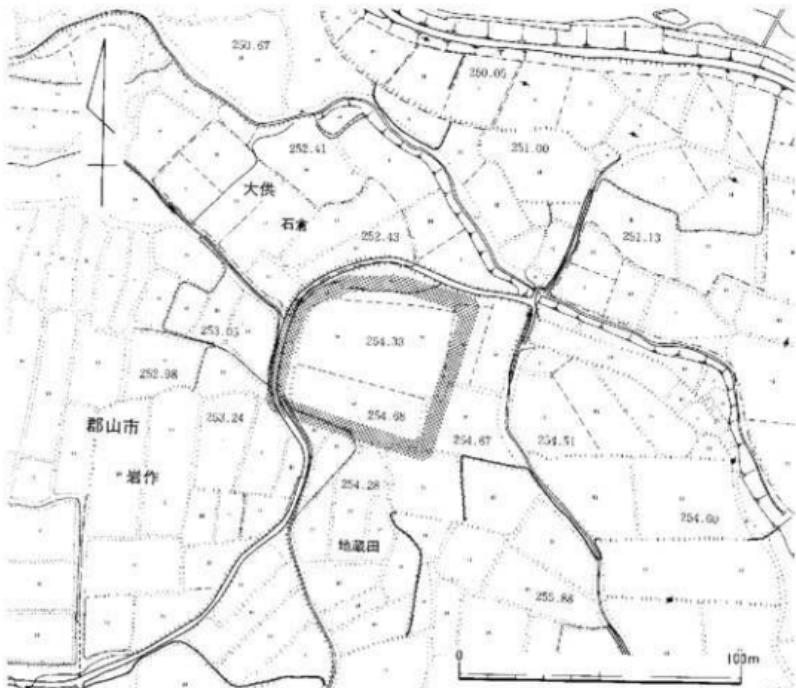
第3編 地蔵田B道路

である。南東部が最も高いレベルを示している。

以上のように館跡としての規模は小型であり、一重の濠をもつ簡素な作りであったことがわかった。

付近には石井館・細田館・唐松館・守山館・正直館などいくつかの城館跡が知られているが、文献資料や発掘調査例が少なく、これらの構築された時期や構造等については不明な点が多い。発掘調査が行われ最も本館跡に近い距離にあり、また本館跡同様の立地条件をもつ類例としては、昭和56・57年度にわたって県文化センターが調査をした唐松館がある。これは本館跡の西側約500mに位置しているもので、詳細については本書第1編にあるのでここでは省略するが、本館跡が立地する地形と同じ河岸段丘面にあり、規模はやや大きい長方形を呈する館跡であることが判明している。構造的には内側にもう一本の濠を有するもので、防備に対する配慮が本館跡よりすぐれている。

また、類似した形態の館跡として郡山市日和田町南古館に所在する日和田古館跡がある。これ



第18図 力ナイ館推定復元図

は一辺65m前後の方形単郭式の館であり、藤田川の南岸に立地し三方は平坦地となっている平地の館跡であるなど古地に関しては非常に酷似しているが、文献資料や考古学的資料に欠け明らかにできない点が多い。

最後に、本館濠跡に伴出した遺物についてであるが、土師質小皿片や中世陶器と思われるおろし皿片など数片が出土しただけである。時期を推定できる資料は少ないが、日常雑器であるおろし皿は、断言はできないが14～15世紀頃の所産と思われる。

以上今回の調査によって検出されたカナイ館跡についてみてきたが、館跡であったことを証明できる資料としては濠跡のみである。土塁や建物跡は検出されず、また未調査部分が非常に多かつたため、館の全要を把握することは不可能であった。今後建物跡やその他の遺構など考古学的に究明すべき点や文献資料等の追究など問題点は多いが、本館跡は、平地の単郭式館跡であることが判明したことはひとつの成果であった。

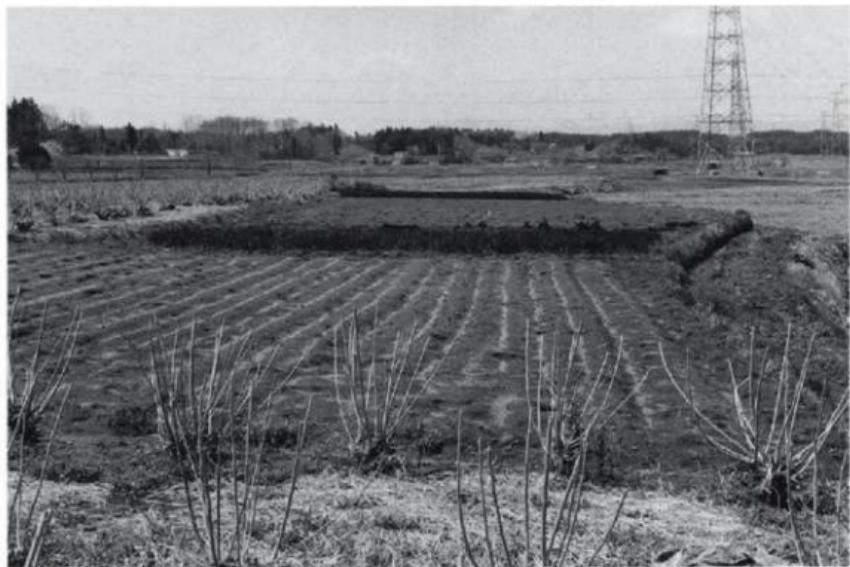
## 参考文献

- 矢島清作 1942 「東京都杉並区井草の石器時代遺跡」『古代文化13・9』  
 加藤 孝 1954 「塙市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論集V』  
 西村正衛他 1955 「千葉県西之城貝塚」「石器時代2号」  
 芹沢長介・杉原莊介 1957 「神奈川県夏島における縄文早期初頭の貝塚」『明治大学文学部研究報告第2冊』  
 赤星直忠・岡本 勇 1957 「茅山貝塚」「横須賀市博物館研究報告第1集」 横須賀市博物館  
 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』  
 西村正衛 1957 「横房貝塚」「早稲田大学教育学部学術研究報告第3集」  
 小林達雄 1966 「Na52道路 縄文早期前半に関する問題」 多摩ニュータウン遺跡調査報告II  
 舞野義一 1967～1970 「大木式土器理解のためにI～VI」『考古学ジャーナル13・16・18・24・32・48』  
     ニューサイエンス社  
 福島県 1969 「福島県史1」  
 庄野靖彦 1974 「関山貝塚」「埼玉県埋蔵文化財調査報告第3集」  
 竹島国基 1975 「宮田貝塚」 相馬郡小高町教育委員会  
 郡山市 1975 「郡山市史 第1巻」  
 馬目順一他 1975 「大畠貝塚調査報告」 福島県いわき市教育委員会  
 井上国雄 1977 「久慈川上流域における縄文時代早期後半の土器編年」『福島考古18号』 福島県考古学会  
 伊禮正雄 1977 「中世城館址の調査」「考古資料の見方(道路編)」  
 藤沼邦彦 1977 「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要第3巻』 東北歴史資料館  
 伊藤信雄 1978 「宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告(奥羽史料調査部研究報告第II)」  
 根本豊徳 1978 「借宿遺跡」「塙の越・借宿(二本松市文化財調査報告書第3集)」 二本松市教育委員会  
 大越道正・玉川一郎他 1978 「母畠地区遺跡発掘調査報告II(福島県文化財調査報告書第67集)」  
     福島県教育委員会・(財)福島県文化センター  
 目黒吉明 1978 「西郷村のあけぼの」「西郷村史」  
 藤田定興・中村五郎 1979 「白河地方の古代縄文土器」「福島考古18号」 福島県考古学会  
 大越忠士・大越道正他 1980 「母畠地区遺跡発掘調査報告V(福島県文化財調査報告書第85集)」  
     福島県教育委員会・(財)福島県文化センター  
 佐藤則之他 1980 「三神峯遺跡発掘調査報告書(仙台市文化財調査報告書第25集)」

- 仙台市教育委員会・東北電力株式会社宮城支店  
日下部善己・寺島文隆他 1980 「金谷館跡」「伊達西部地区遺跡発掘調査報告(福島県文化財調査報告書第82集)」  
福島県教育委員会  
木本元治・菅野順子他 1981 「徳定B遺跡」「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅲ(福島県文化財調査報告書第92集)」  
福島県教育委員会・日本国有鉄道  
木本元治他 1981 「矢ノ戸遺跡」「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅳ(福島県文化財調査報告書第99集)」  
福島県教育委員会・日本国有鉄道  
鈴木 啓・根本豊徳 1981 「郡山台V(二本松市文化財調査報告書第7集)」 二本松市教育委員会  
日黒吉明他 1981 「日本城郭大系3」 新人物往来社  
三上次男他 1981 「尻八船調査報告書」 尻八船調査委員会  
芳賀英一他 1981 「大久保A遺跡」「母烟地区遺跡発掘調査報告Ⅴ(福島県文化財調査報告書第96集)」  
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター  
中山吉秀・移山晋作他 1981 「木の根」(財)千葉県文化財センター  
高橋雄三 1981 「花積下層式土器の研究」「考古学研究第28巻第1号」 考古学研究会  
鈴鹿良一・山内幹夫他 1981 「石橋遺跡発掘調査報告(郡山村文化財調査報告書第1集)」  
福島県田村郡都路村教育委員会・(財)福島県文化センター  
校本 茂他 1981 「地蔵田B遺跡・カナイ館」「母烟地区遺跡分布調査報告V(福島県文化財調査報告書第97集)」  
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター  
山内幹夫他 1981 「阿武隈地区遺跡分布調査報告I(福島県文化財調査報告書第98集)」  
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター  
木本元治他 1981 「鳴神・柿内戸遺跡」「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告V(福島県文化財調査報告書第101集)」  
福島県教育委員会  
芳賀英一 1982 「矢吹町乙江沢発見の井草式土器とその意義」「福島考古23号」 福島考古学会  
馬目順一他 1982 「竹之内遺跡」 いわき市文化事業団  
安孫子昭二 1982 「子母口式土器の再検討」「東京考古」東京考古談話会同人



1 地蔵田B(カナイ館跡)遺跡遠景(北東より)



2 地蔵田B(カナイ館跡)遺跡近景(東より)

第3図 地蔵田B遺跡



3 地蔵田B遺跡調査区全景(東より)



4 地蔵田B遺跡調査区全景(北西より)

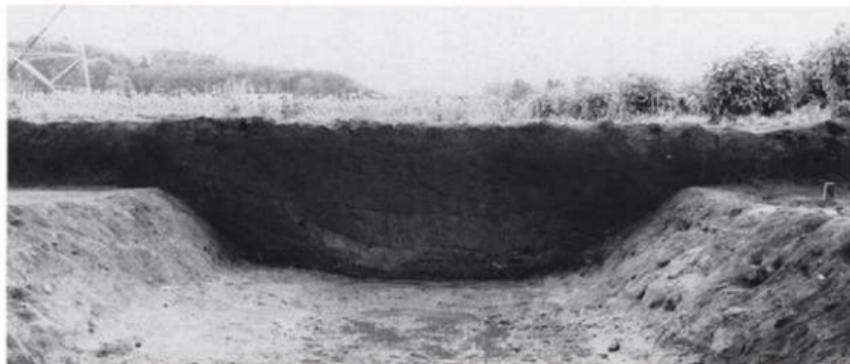


5 調査区北側斜面部 (西より)



6 調査区北側斜面部 (東より)

第3編 地蔵田B道路



7 濟跡Aセクション



8 濟跡Bセクション



9 濟跡Eセクション

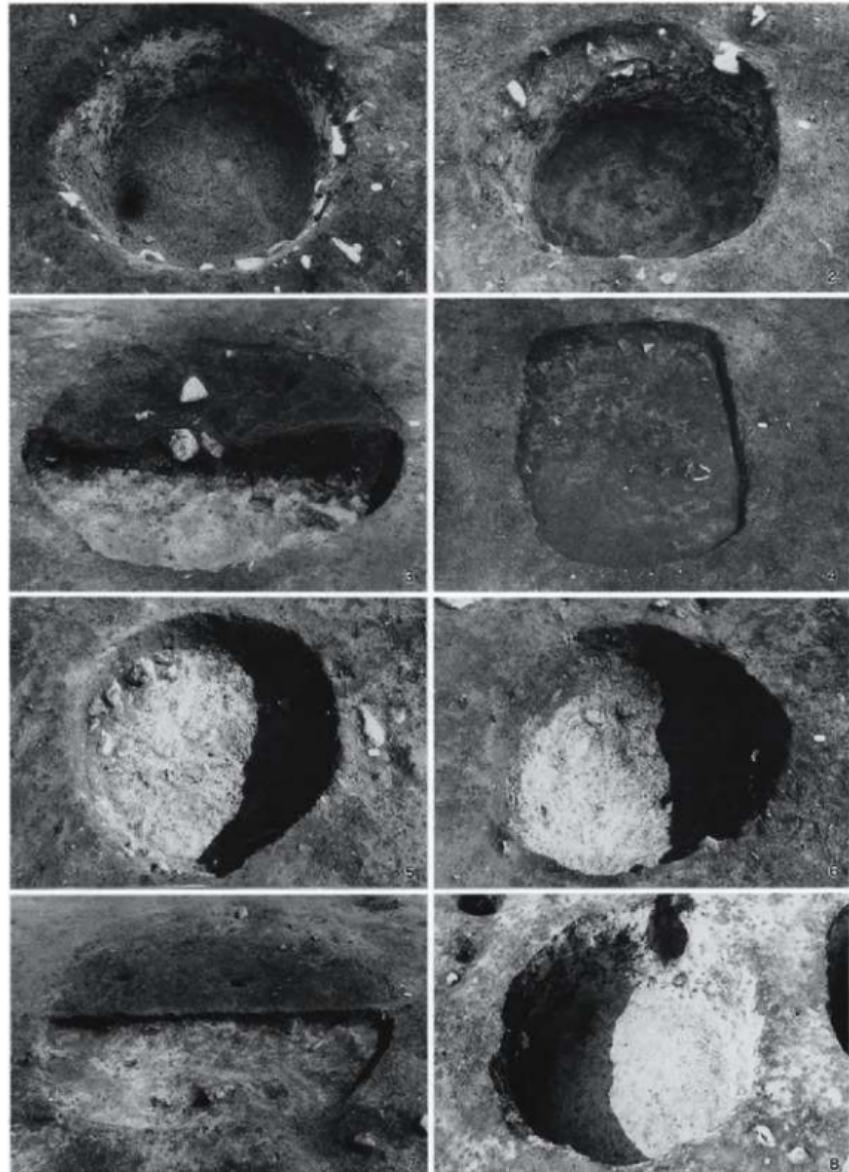


10 1号住居跡検出状況



11 1号住居跡

第3編 地藏田B遺跡



12 土坑

1…1号土坑 2…2号土坑 3…3号土坑 4…4号土坑  
5…5号土坑 6…6号土坑 7…7号土坑 8…9号土坑

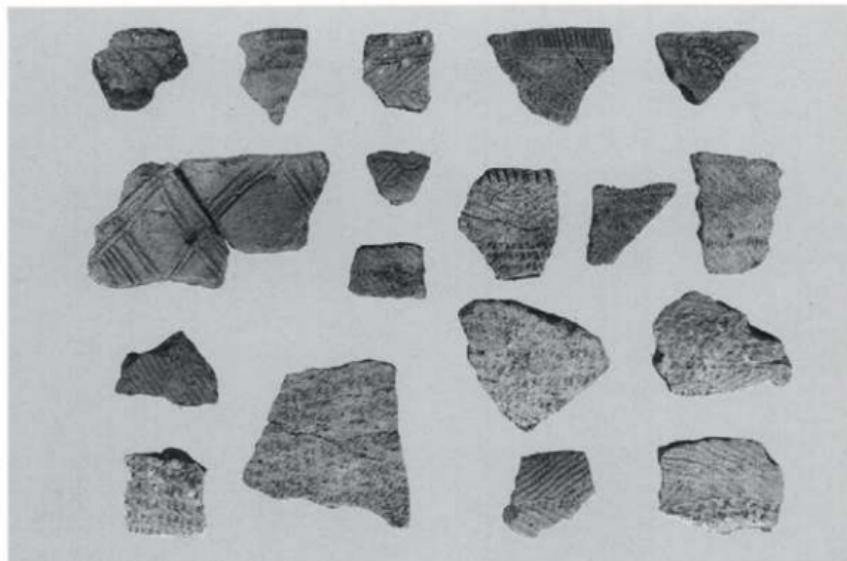


13 1号特殊遺構

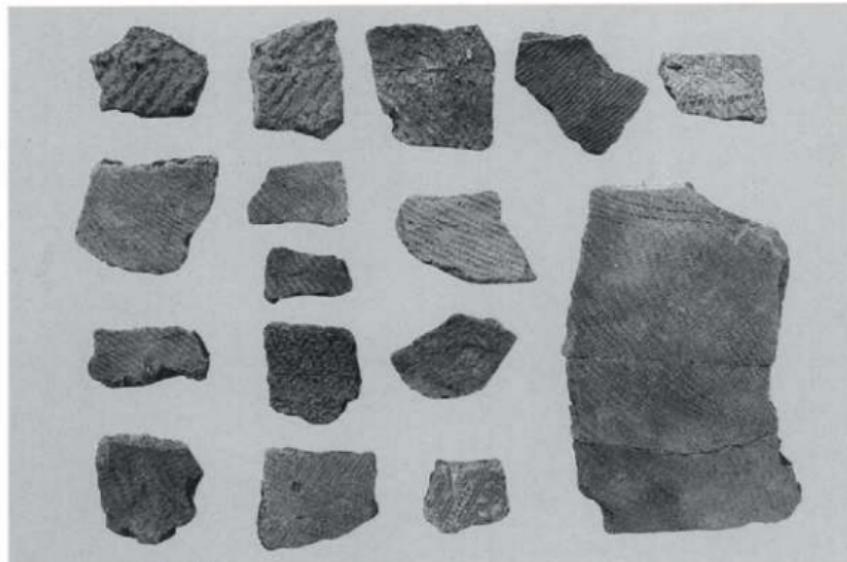


14 Cトレンチ 南側溝跡

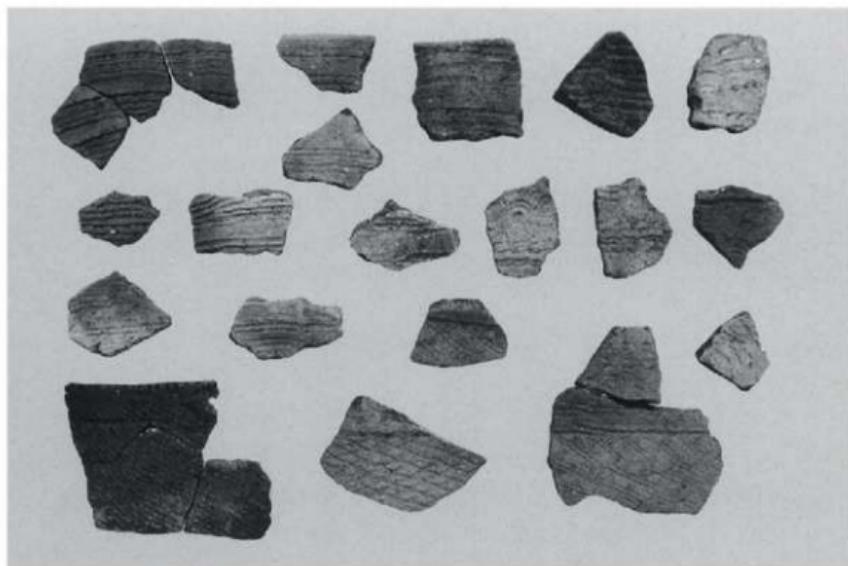
第3編 地藏田B遺跡



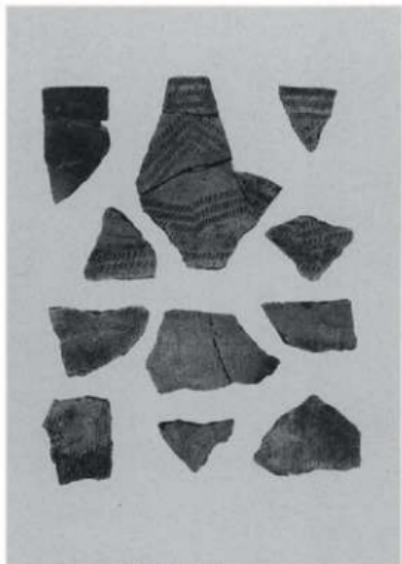
15 遺構外出土繩文土器(1)



16 遺構外出土繩文土器(2)



17 遺構外出土繩文土器(3)



18 7号土坑出土繩文土器



19 1号特殊遺構出土繩文土器

## 唐松館跡より出土した炭化材の樹種

鳴倉巳三郎

福島県郡山市田村町字唐松にある奈良時代末期～平安時代の遺跡から出土した炭化材を調べたが、その結果は次のことになった。

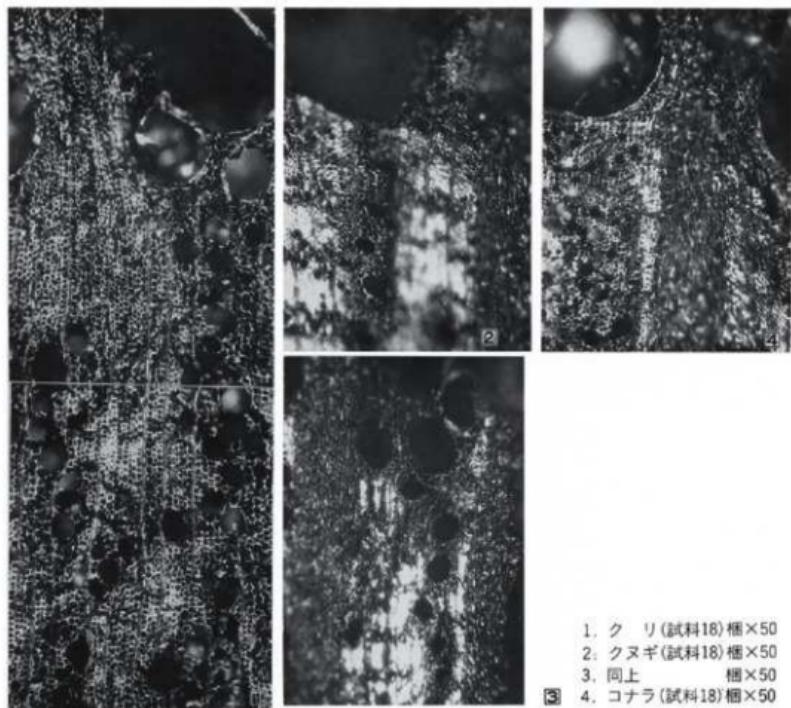
試料No18 (C.Y-KM・A S I 01 床直) 樹種 クスギ

クリ

コナラ

大部分がクスギ炭で、コナラ炭が数個、クリは2～3個であったが、これは小片で広放射組織が見当らないのでクリに同定したが、コナラであるかもしれない。

クスギ・コナラ・クリは各地の遺跡からも出土し、建築・杭・薪炭・器具その他に使用された。



1. クリ(試料18) 桢×50

2. クスギ(試料18) 桢×50

3. 同上 桢×50

4. コナラ(試料18) 桢×50

## 福島県教育委員会

文化課	課長 大塚和美	専門文化財主査 渡辺正俊
遺跡班	専門文化財主査 日高努	専門文化財主査 渡辺正俊
	専門文化財主査 渡辺一雄	専門文化財主査 木本元治
(財)福島県文化センター職員組織表		
館長 佐藤光	副館長 酒井信人	事業第二部長 鈴木隆

遺跡調査課	課長 目黒吉明(出)	第1係	文化財主査 福島雅儀
文化財主査	門若林伸亮(出)	文化財主事 大越道正	文化財主事 福島雅儀
文化財主査	門大河峯夫(出)	文化財主事 阿部俊夫	文化財主事 安田稔
文化財主査	門小平良男(出)	文化財主事 橋本博幸	文化財主事 佐藤耕三(出)
文化財主査	門西間木薰(出)	文化財主事 松本茂	
第2係			
文化財主査	矢部一弥(出)	文化財主事 芳賀英一	嘱託石井宏幸
文化財主査	辺見陽一(出)	文化財主事 浜名新一(出)	
文化財主査	石本弘	嘱託長鶴雄一	
第3係			
文化財主査	長谷川力(出)	文化財主事 鈴鹿良一	文化財主事 村木亨(出)
文化財主査	金谷光男(出)	文化財主事 山内幹夫	
文化財主査	寺島文隆	文化財主事 高橋信一	(出)……教育委員会出向職員
臨時職員			
深谷千恵子	篠崎綾子	福地真由美	志賀恵
児玉真知子	菱沼千左登	叶敦子	菅野美津枝
伊藤登茂	菊地秀子	佐藤康子	森美津子

### 福島県文化財調査報告書第115集

#### 国営総合農地開発事業 母畠地区遺跡発掘調査報告11

昭和58年3月30日 発行

編集 法人 福島県文化センター(遺跡調査課)

(〒960)福島市春日町5-54

発行 福島県教育委員会(〒960)福島市杉坂町2-6

印刷 株式会社日進堂印刷所(〒960)福島市野田町大通10